琵琶垣内遺跡（第３次）発掘調査報告

２００７．３

三重県埋蔵文化財センター

序

琵琶垣内遺跡は、これまでに何度か発掘調査が行われておりますが、本書で報告する第３次調査は平成13年度に県営ほ場整備事業に伴って三重県埋蔵文化財センターが実施したものです。

現地での調査は紅葉もひときわ鮮やかな秋真っ盛りの10月に開始しましたが、途中で大雨に見舞われ発掘調査区が水没したり、また冬季には大雪による交通渋滞のために機材の手配が遅れるなど予想外の出来事があり、なかなか予定どおりに発掘調査が進行しませんでした。

発掘調査は、現地での十分な最終検討、確認を行い、すべての調査が終了したうえで現地引き渡しを行うのが、本来のあり方です。しかしながら、今回はほ場整備の工期も差し迫っており、工事を遅らせることもできないため、事業部局と協議の結果、調査が終了した部分から順次引き渡すことといたしました。このため、調査現場は工事に追われ、掘る、写真を撮る、実測図を作る、引き渡す、を何度も繰り返す日々となってしまいました。こうした状況の中で現地調査が終了したのは、残寒厳しい２月末でした。

文末になりましたが、発掘調査にあたりましては、県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、櫛田上土地改良区、財団法人農林水産支援センター、松阪市教育委員会をはじめ多くの方々には、多大なるご支援、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成19年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

１．本書は三重県松阪市豊原町ほかに所在する琵琶垣内遺跡の第３次発掘調査報告書である。

２．調査は県営ほ場整備事業（櫛田上地区）に伴い、平成12年度に試掘調査、平成13年度に本発掘調査を実施した。

３．調査の体制は下記の通りである。

・調査主体　三重県教育委員会

・調査担当　三重県埋蔵文化財センター

・現場作業　財団法人三重県農林水産支援センター

平成12年度の試掘調査は、小濵学、川合圭子が担当した。13年度の本発掘調査は宮田勝功、小濵学、小林俊之、山岡奈美恵、山崎博史が担当し、遺構実測は、担当者のほかに河北秀実、原田恵理子、金子智子が従事した。

４．本書作成にかかる報文執筆は河北秀実、小濵学、川合圭子、宮田勝功が、遺物写真は田村陽一が担当し、全体の編集は河北が担当した。

５．本書に用いた地図及び遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、挿図の方位は全て座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成11年現在で、座標北からＮ６°30′Ｗ振れている。

６．本書で報告した遺跡にかかる記録図面類、写真および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

７．土層及び埋土については、現地調査時に付与した名称をそのまま掲載した。土色については、標準土色帖を参考にして色名をつけたが、必ずしも厳密なものではない。また、土質は、肉眼観察によるものであり、土壌調査で一般的に用いられる粒径の区分や土性の区分とは異なった基準で表現している。

８．本書で用いた遺構表示略記号及び試掘坑略記号は、下記のとおりである。なお、遺構の名称は、遺構の性格を検討した結果、現地調査時点での呼称とは異なっているものがある。

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＥ：井戸　　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

Ｐit：柱穴・小穴　　ＳＺ：性格不明遺構　　Ｇ：試掘調査グリッド

９．遺構番号については、琵琶垣内遺跡として重複のないように、第１次調査から第4次調査までを通して付与している。遺構番号は報告書作成段階で改めて新番号を付与したため、現地調査時点での番号とは異なっている。

第３次調査における各調査区の遺構番号は下記のとおりである。ただし、第１次・第４次調査等既報告の調査で、番号が付与されている遺構については、それを踏襲している。

Ａ地区　２０１～２８３　　Ｂ地区　３０１～３４５　　Ｃ・Ｅ地区　４０１～４０４

Ｄ地区　４１１～４１３　　Ｆ地区　４２１～４２２

本　文　目　次

例言
目次
Ⅰ　前言……（1）
　1　遺跡の発見と第１次調査……（河北秀実）…（1）
　2　第２次調査……（河北秀実）…（1）
　3　試掘調査の経過……（小濵学、川合圭子）…（1）
　4　本調査に至る経過……（河北秀実）…（2）
　5　本調査の経過……（宮田勝功）…（2）
　6　調査記録の方法……（河北秀実）…（6）
　7　出土遺物の取り扱い……（河北秀実）…（6）
　8　第４次調査……（河北秀実）…（6）
Ⅱ　位置と環境……（河北秀実）…（8）
Ⅲ　Ａ地区の調査結果……（河北秀実）…（10）
　1　概要……（10）
　2　土層……（10）
　3　遺構……（10）
　4　遺物……（27）
Ⅳ　Ｂ地区の調査結果……（河北秀実）…（38）
　1　概要……（38）
　2　土層……（38）
　3　遺構……（38）
　4　遺物……（48）
Ⅴ　Ｃ・Ｅ地区の調査結果……（河北秀実）…（52）
　1　概要……（52）
　2　土層……（52）
　3　遺構および遺物……（52）
Ⅵ　Ｄ地区の調査結果……（河北秀実）…（56）
　1　概要……（56）
　2　土層……（56）
　3　遺構および遺物……（56）
Ⅶ　Ｆ地区の調査結果……（河北秀実）…（58）
　1　概要……（58）
　2　土層……（58）
　3　遺構……（58）
　4　遺物……（59）
Ⅷ　科学分析……（61）
　1　琵琶垣内遺跡および山添遺跡における放射性炭素年代測定……（パリノ・サーヴェイ株式会社）…（61）
Ⅸ　結語……（63）
　1　縄文時代の琵琶垣内遺跡……（河北秀実）…（63）
　2　古墳時代前期の大溝……（河北秀実）…（63）
　3　古墳時代後半……（河北秀実）…（63）
　4　奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物……（河北秀実）…（63）
　5　平安時代から鎌倉時代……（河北秀実）…（64）
　6　室町時代……（河北秀実）…（64）

挿　図　目　次

第１図　試掘抗配置図 ……（２）
第２図　試掘抗平面及び土層断面略測図（１）……（４）
第３図　試掘抗平面及び土層断面略測図（２）……（５）
第４図　試掘調査出土遺物実測図 ……（６）
第５図　調査区位置図 ……（７）
第６図　遺跡位置図 ……（９）
第７図　Ａ―Ⅱ地区土層図 ……（11）
第８図　Ａ―Ⅲ・Ⅳ地区土層図 ……（12）
第９図　Ａ―Ⅴ地区土層図 ……（13）
第10図　Ａ―Ⅰ～Ⅲ地区第一検出面平面図 ……（16）
第11図　Ａ―Ⅰ～Ⅲ地区第二検出面平面図 ……（17）
第12図　Ａ―Ⅳ・Ⅴ地区第一検出面平面図 ……（18）
第13図　Ａ―Ⅳ・Ⅴ地区第二検出面平面図 ……（19）
第14図　Ａ地区個別遺構図 ……（21）
第15図　Ａ地区出土遺物実測図（１）……（31）
第16図　Ａ地区出土遺物実測図（２）……（33）
第17図　Ａ地区出土遺物実測図（３）……（35）
第18図　Ｂ地区土層図（１）……（40）
第19図　Ｂ地区土層図（２）……（41）
第20図　Ｂ地区平面図（１）……（44）
第21図　Ｂ地区平面図（２）……（45）
第22図　Ｂ地区出土遺物実測図 ……（51）
第23図　Ｃ・Ｅ地区土層図 ……（53）
第24図　Ｃ・Ｅ地区平面図 ……（54）
第25図　ＳＥ４２１実測図 ……（55）
第26図　Ｄ地区土層図及び平面図 ……（57）
第27図　Ｆ地区土層図及び平面図 ……（59）
第28図　ＳＥ４２１実測図 ……（60）
第29図　Ｆ地区出土遺物実測図 ……（60）

表　目　次

第１表　試掘調査一覧 ……（３）
第２表　試掘調査出土遺物観察表 ……（６）
第３表　Ａ地区遺構一覧（１）……（24）
第４表　Ａ地区遺構一覧（２）……（25）
第５表　Ａ地区掘立柱建物一覧 ……（25）
第６表　Ａ地区出土遺物観察表（１）……（30）
第７表　Ａ地区出土遺物観察表（２）……（32）
第８表　Ａ地区出土遺物観察表（３）……（34）
第９表　Ｂ地区遺構一覧 ……（47）
第10表　Ｂ地区出土遺物観察表 ……（50）
第11表　Ｃ・Ｅ地区遺構一覧 ……（52）
第12表　D地区遺構一覧 ……（56）
第13表　Ｆ地区遺構一覧 ……（58）
第14表　Ｆ地区出土遺物観察表 ……（58）
第15表　放射性炭素年代測定結果（１）……（62）
第16表　暦年較正結果（１）……（62）
第17表　放射性炭素年代測定結果（２）……（62）
第18表　暦年較正結果（２）……（62）

図　版　目　次

カラー図版 ……（69）
ＰＬ１　Ａ地区調査前風景・Ａ地区調査後風景・Ａ―Ⅰ地区 ……（71）
ＰＬ２　Ａ―Ⅰ地区・Ａ―Ⅰ地区東部・Ａ―Ⅱ地区北部・Ａ―Ⅱ地区中央部 ……（72）
ＰＬ３　Ａ―Ⅱ地区南部・Ａ―Ⅱ地区南部・Ａ―Ⅲ地区全景・Ａ―Ⅳ地区北部 ……（73）
ＰＬ４　Ａ―Ⅳ地区南部・Ａ―Ⅳ地区南部下層・Ａ―Ⅴ地区南北トレンチ・Ａ―Ⅴ地区東西トレンチ ……（74）
ＰＬ５　ＳＤ２０８・ＳＤ３０・ＳＤ３０・ＳＨ２１２ ……（75）
ＰＬ６　ＳＨ２１４・ＳＢ２７７・ＳＢ２７８・ＳＢ２７９ ……（76）
ＰＬ７　Ａ地区出土遺物 ……（77）
ＰＬ８　Ａ地区出土遺物 ……（78）
ＰＬ９　Ａ地区出土遺物 ……（79）
ＰＬ10　Ｂ地区調査前風景・Ｂ地区調査後風景・Ｂ―Ⅰ地区北端・Ｂ―Ⅰ地区 ……（80）
ＰＬ11　Ｂ―Ⅱ地区北部・Ｂ―Ⅱ地区中央部・Ｂ―Ⅱ地区中央部・Ｂ―Ⅱ地区中央部 ……（81）
ＰＬ12　Ｂ―Ⅱ地区南部・Ｂ―Ⅱ地区南部・Ｂ―Ⅱ地区南端東西トレンチ・Ｂ地区出土遺物 ……（82）
ＰＬ13　Ｃ地区調査前風景・Ｃ地区調査後風景・Ｅ地区調査前風景・Ｅ地区調査後風景 ……（83）
ＰＬ14　Ｃ地区全景・Ｃ―Ⅰ地区全景・Ｃ―Ⅱ地区全景・Ｅ―Ⅱ地区及びＣ―Ⅱ地区 ……（84）
ＰＬ15　Ｅ―Ⅰ地区及びＣ―Ⅰ地区・Ｅ―Ⅱ地区・Ｅ―Ⅲ地区・Ｅ―Ⅲ地区 ……（85）
ＰＬ16　Ｄ地区調査前風景・Ｄ地区調査後風景・Ｄ―Ⅰ地区・Ｄ―Ⅰ地区 ……（86）
ＰＬ17　Ｄ―Ⅲ地区・Ｄ地区作業風景・Ｆ地区調査前風景・Ｆ地区調査後風景 ……（87）
ＰＬ18　Ｆ地区・Ｆ地区・Ｆ地区出土遺物 ……（88）

Ⅰ　前　　言

１　遺跡の発見と第１次調査

琵琶垣内遺跡は、松阪市遺跡番号13Ａ－26[(1)]で、松阪市豊原町・山下町・安楽町にまたがって所在する。

琵琶垣内遺跡が始めて発掘調査されたのは、県道御麻生薗・豊原線建設に伴い昭和60年10月15・16日に実施された試掘調査[(2)]であるが、この時点では遺跡名は閑浄寺遺跡であった。道路建設予定地内に２ｍ×４ｍの試掘坑を21箇所設定した。調査の結果、溝、土坑、小穴、焼土などの遺構が確認され、遺物も奈良時代から平安時代にかけての土師器皿・甕・高杯、須恵器片や鎌倉時代の山茶椀などが出土した。

本調査は第１次調査として、昭和62年度に3,800㎡を対象に行われた[(3)]。古墳時代前半の大溝、古墳時代～奈良時代の竪穴住居、奈良時代～平安時代の掘立柱建物などが検出された。また、遺物では「下厨前」「厨前」「仁田」などの墨書土器も出土した。

この調査の結果、遺跡範囲は、北は主要地方道鳥羽・松阪線を北端として、南北600ｍ程と考えられた。しかし、東西への広がりについては、地形や遺物の散布状況から推定された範囲であり、地下遺構の状況については不明確であった。

（河北）

２　第２次調査

平成８年度には、櫛田上地区の県営ほ場整備事業に伴って県道より東側で試掘調査が実施[(4)]され。その結果、県道から50ｍほど東側までが、遺跡範囲であることが判明した。

この試掘調査の結果を受けて、第２次調査は平成９年度に県営ほ場整備事業に伴って、県道の東側で発掘調査を実施[(5)]した。調査面積は600㎡で、弥生時代、古墳時代及び中世の遺構、遺物が確認された。

（河北）

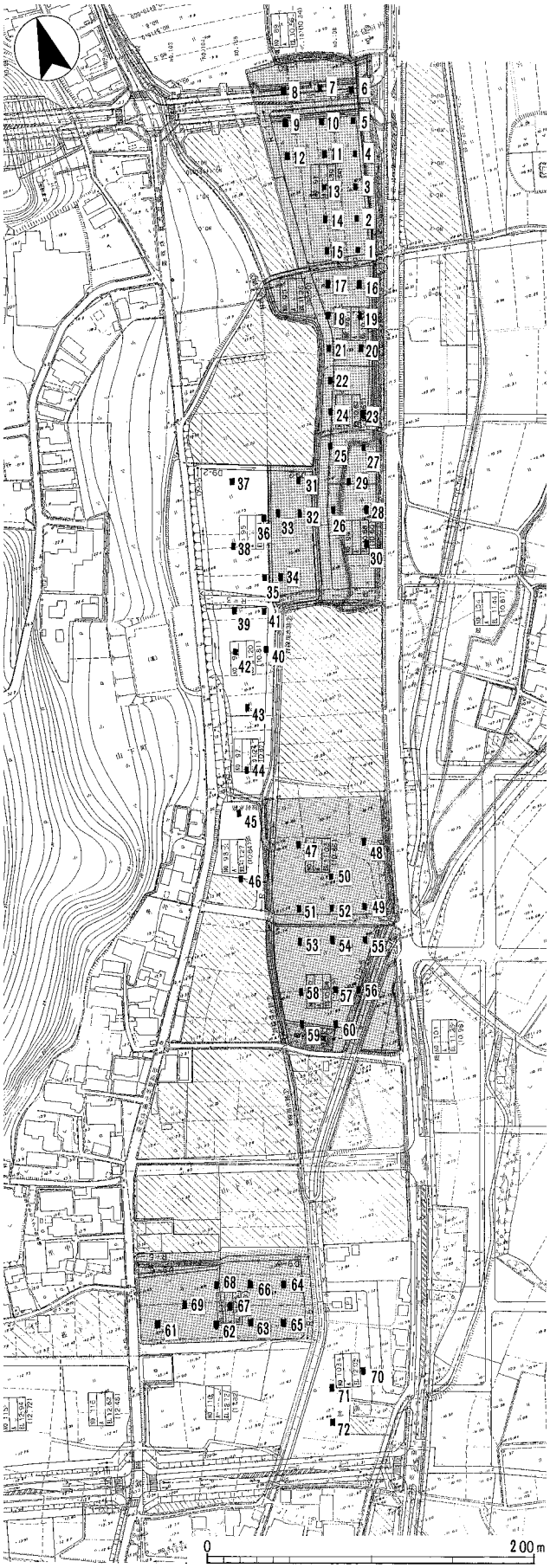
３　試掘調査の経過

平成12年９月26日から10月11日までの間に、試掘対象面積50,500㎡を実施した[(6)]。２×４ｍを70箇所、３×４ｍを１箇所、２×５ｍを１箇所、合計582㎡、72箇所で実施した。

今回の調査対象地は、県道松阪御麻生薗線の西方に広がる。現況はほとんどが水田、一部畑地、竹林である。試掘坑（以下Ｇと表記する。）を72箇所設定し掘削を行った。

基本的な土層は、上から耕作土（灰色土）、床土（黄色土）、灰褐色土、黒褐色土である。（Ｇ１、２、３、12、15、16、18、19、23、28、34、35、38、39、40、41、42、44）。また、灰褐色土と黒褐色土の間に褐灰色土層が確認できた地点（Ｇ４、６、９、11、17、20、21、24、25、31、32、33、36、37、43）や黒褐色土層の上に灰オリーブ色土層が確認できた地点もみられた（Ｇ67、69）。黒褐色土上面が遺構検出面と考えられるが、掘削地点によっては、黒褐色土が存在せず、橙色土（Ｇ26）やオリーブ色シルト（Ｇ27）、褐色土（Ｇ49、53、59）の上面が遺構検出面となる。また、黒褐色土層より上層の青灰色シルト（Ｇ５、７、８、26）や明黄灰色土（Ｇ62、66、68）の上面が遺構検出面である地点も存在しこれらは、堆積状況の違いと思われる。遺物包含層は、灰褐色土あるいはその直下の褐灰色土と考えられるが、遺物を包含しなかったり、褐灰色土層が存在しない地点や、灰褐色土層や褐灰色土層がなくなる耕作土直下が遺構検出面となる場合もある（Ｇ10、13、14、29、30、45、46、47、48、50、51、52、54、55、56、57、58、60、61、63、64、65）。

遺構については弥生から中世の溝・土坑・ピットなど多数を、遺物については弥生土器、奈良から平安時代にかけての須恵器、土師器、中世の土師器、山茶椀、陶器を確認した。Ｇ30では、多量の奈良から平安時代にかけての須恵器・土師器を溝埋土から確認した。Ｇ66、67では西方に延びる溝を確認しており、弥生土器台付甕底部がその溝から出土した。



第１図　試掘坑位置図（1：4,000）

G33、56、57、69では黒褐色土の検出面に淡黒褐色土が埋土の遺構が切り込んでいて土層断面の状況から確認するしかなかった。また、地元の古老によると調査対象地は、「何某マタ」と呼ばれた溝が縦横に存在したらしく調査結果とも合致する。「何某マタ」の時期が判然としないが当地の遺跡立地を考えるうえで興味深い。なお、遺構・遺物を確認できなかったのは、G12、38、42、43、45、46、50、51、53、54、61、62、63、65、68、70、71、72である。これら以外については、遺構あるいは遺物を確認している。

以上のことから、遺構あるいは遺物を確認した試掘坑およびその周辺約36,000㎡については遺跡であると判断した。

（小濵・川合）

4　本調査に至る経過

平成13年度事業地内に所在する琵琶垣内遺跡、山添遺跡を一括し、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」は、平成13年７月30日付け、農基第507号で、三重県知事北川正恭から三重県教育委員会教育長あてに提出され、平成13年８月６日付け、教ス生第689号で「発掘調査」の指示事項が出された。

文化財保護法第58条の２第１項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」は、琵琶垣内遺跡第３次調査と山添遺跡第４次調査を一括して、平成13年８月20日付け、教埋第157号で、三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長に出された。

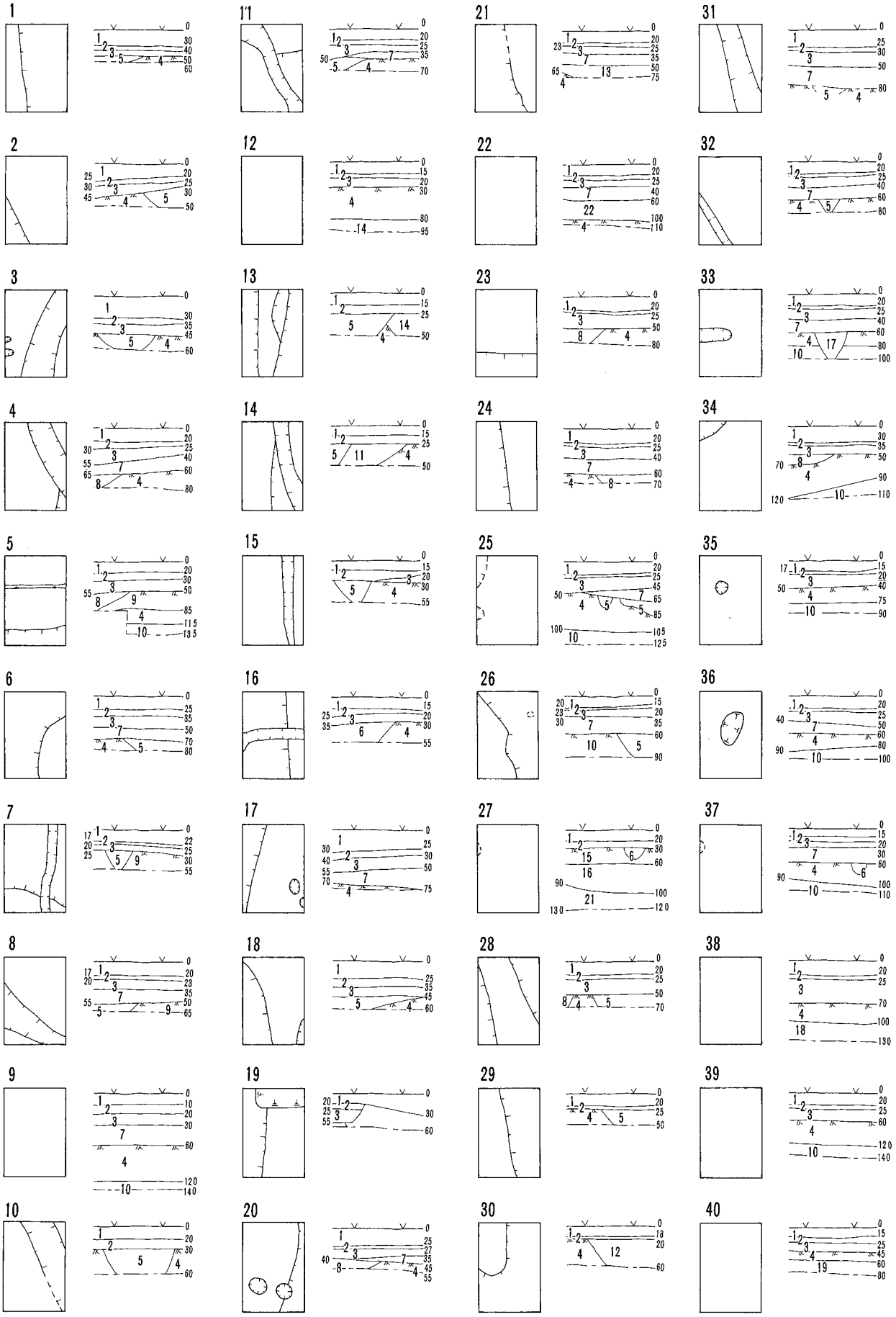
（河北）

5　本調査の経過

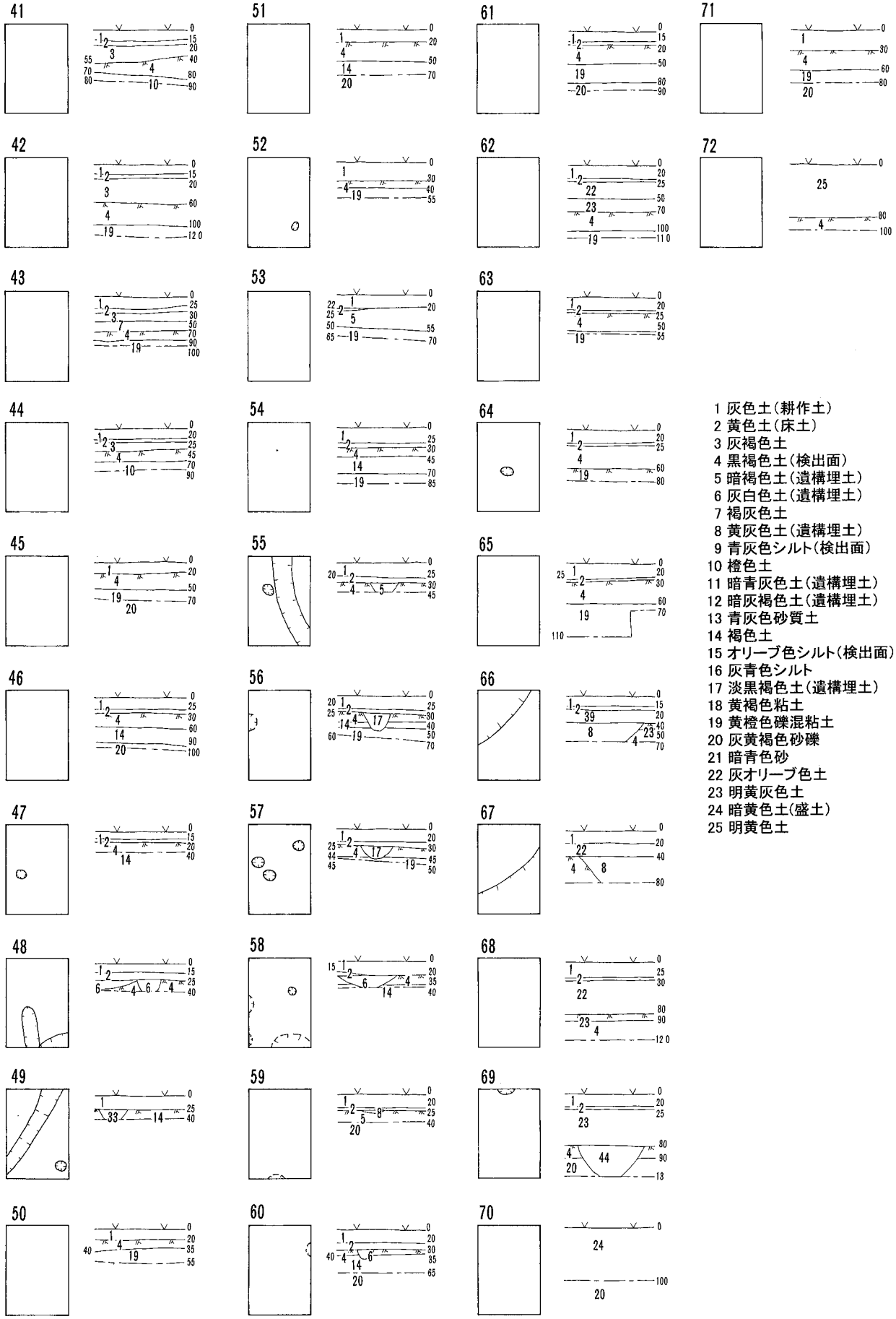
今回の第３次発掘調査地の字は豊原町琵琶垣内・山際・肥留場、山下町茶園・南門である。調査地は、ほ場整備に伴って削平される排水路やパイプライン敷設などの調査幅が狭い調査である。調査する箇所が６箇所にわかれているため、Ａ地区からＦ地区の地区名を付与して調査を行なった。

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ（cm）	遺構上面の深さ（cm）	遺　構	遺　物
1	40	50	溝か	土師器片
2	25～30	30～45	溝か	——
3	35	45	溝	土師器片、陶器片
4	25～30	60～65	溝	土師器皿・甕、須恵器片など
5	30	50～55	溝か	土師器甕片
6	35	70	溝	土師器片、山茶碗片
7	20	25	溝など	土師器片（中世含む）
8	20～23	50～55	溝	土師器甕片
9	30	——	——	土師器片
10	——	30	溝	土師器甕片
11	25	50	溝、土坑	土師器片
12	——	——	——	——
13	——	25	溝、土坑	土師器皿・鍋（中世）
14	——	25	溝	土師器片など
15	20	30	溝	土師器片、陶器片
16	20～25	30	溝	土師器片
17	30～40	70～75	溝か	土師器皿片（中世）
18	35	45	土坑	土師器片（中世含む）
19	25	55	溝	土師器片
20	27	40～45	溝、ピット	土師器片
21	23～25	50	溝か	土師器片など
22	25	100	——	土師器甕
23	25	50	溝か	土師器甕、須恵器甕片など
24	25	60	溝	土師器片
25	23～25	50～65	ピット	土師器片
26	20～23	60	溝か	土師器椀片
27	——	30	ピット	土師器甕片
28	25	50	溝か	須恵器甕片
29	——	25	溝	——
30	——	20	溝,複数の重複	土師器杯・皿・甕、須恵器壺、土錐など多量
31	——	80	溝	——
32	——	60	溝	——
33	——	60	ピット	——
34	——	50	ピット	——
35	——	40～45	ピット	——
36	——	60	——	——
37	——	60	——	——
38	——	——	——	——
39	——	——	——	土師器片
40	——	——	——	土師器片
41	20	40～55	——	土師器片
42	——	——	——	——
43	——	——	——	——
44	25	——	——	土師器片
45	——	——	——	——
46	——	——	——	——
47	——	20	ピット	——
48	——	25	溝、土坑	——
49	——	25	溝、ピット	——
50	——	——	——	——
51	——	——	——	——
52	——	30	ピット	——
53	——	——	——	——
54	——	——	——	——
55	——	30	溝、ピット	——
56	——	25	ピット	——
57	——	25～30	ピット	——
58	——	20	土坑、ピット	——
59	——	25	ピット	——
60	——	30	ピット	——
61	——	——	——	——
62	——	——	——	——
63	——	——	——	——
64	——	60	ピット	——
65	——	——	——	——
66	——	40	溝	弥生土器台付甕
67	——	40	溝	——
68	——	——	——	——
69	——	80	土坑	——
70	——	——	——	——
71	——	——	——	——
72	——	——	——	——

第１表　試掘調査一覧



第２図　試掘坑平面及び土層断面略測図（１）



1 灰色土(耕作土)
2 黄色土(床土)
3 灰褐色土
4 黒褐色土(検出面)
5 暗褐色土(遺構埋土)
6 灰白色土(遺構埋土)
7 褐灰色土
8 黄灰色土(遺構埋土)
9 青灰色シルト(検出面)
10 橙色土
11 暗青灰色土(遺構埋土)
12 暗灰褐色土(遺構埋土)
13 青灰色砂質土
14 褐色土
15 オリーブ色シルト(検出面)
16 灰青色シルト
17 淡黒褐色土(遺構埋土)
18 黄褐色粘土
19 黄橙色礫混粘土
20 灰黄褐色砂礫
21 暗青色砂
22 灰オリーブ色土
23 明黄灰色土
24 暗黄色土(盛土)
25 明黄色土

第３図　試掘坑平面及び土層断面略測図（２）

なお、Ａ地区は調査期間中の生活道路を確保するために調査に制約を受け、調査区を北からＡ－Ⅰ～Ⅴ地区の５地区に分けて調査を行なった。Ｂ地区も同様にⅠ・Ⅱ地区に分けて調査を行なった。

Ｃ地区とＥ地区は当初は、分離分割して調査を実施する予定であったが、事業の設計変更により、結合することとなったため、併せてＣ・Ｅ地区として調査を実施した。

Ａ地区は排水路建設、Ｂ地区はパイプライン敷設、Ｃ地区は揚水場建設、Ｄ地区は排水路建設、Ｅ地区はパイプライン敷設、Ｆ地区は排水路建設によって、遺跡が破壊を受けるために発掘調査を行った。

調査面積は、Ａ地区650㎡、Ｂ地区470㎡、Ｃ地区120㎡、Ｄ地区120㎡、Ｅ地区130㎡、Ｆ地区80㎡で、合計1,570㎡である。

現地での実質的な調査期間は、平成13年10月15日から平成14年２月27日までである。

（宮田）

６　調査記録の方法

小地区は、４ｍ×４ｍを１グリッドとし、調査区の形に合わせて東西方向に西からａ、ｂ、ｃ、……と記号を付し、南北方向は北から、１、２、３、……と数字を付した。

調査区の土層断面図は1／20の縮尺で手描きし、遺構平面図は３ｍ方眼を基準として1／20又は1／50の縮尺で、手描き実測を行なったが、一部で1／100の縮尺で平板測量で作成した。井戸等の個別遺構は平面図と断面図を1／10で作成した。

写真撮影は、カメラは６×７㎝判と35㎜判を使用し、フィルムは白黒及びカラーリバーサルを使用した。

（河北）

７　出土遺物の取り扱い

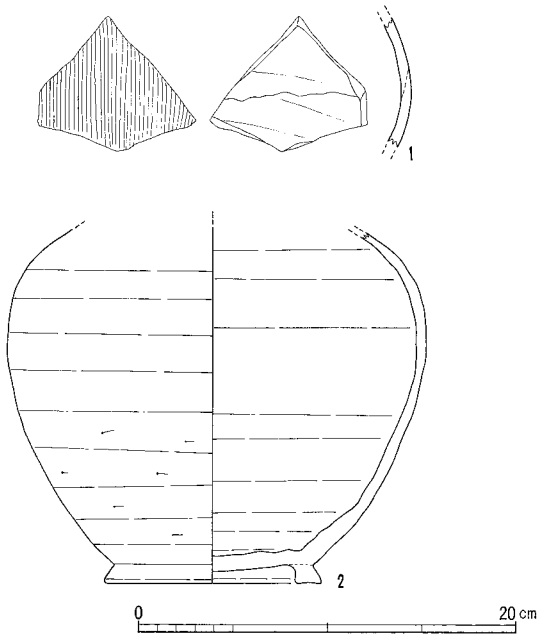
埋蔵文化財の発見及び認定にかかる法手続きは、発見日を平成14年３月25日とし、山添遺跡第４次調査の出土遺物とともに発掘調査終了後の平成14年３月29日付け教埋第８－30号で、埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あてに依頼文が提出され、同日付け教委第12－６－１号で松阪警察署あてに通知された。

（河北）

８　第４次調査

第４次調査は平成16年度に県道の改築事業に伴い三重県埋文センターが発掘調査を実施した[7]。弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が確認された。

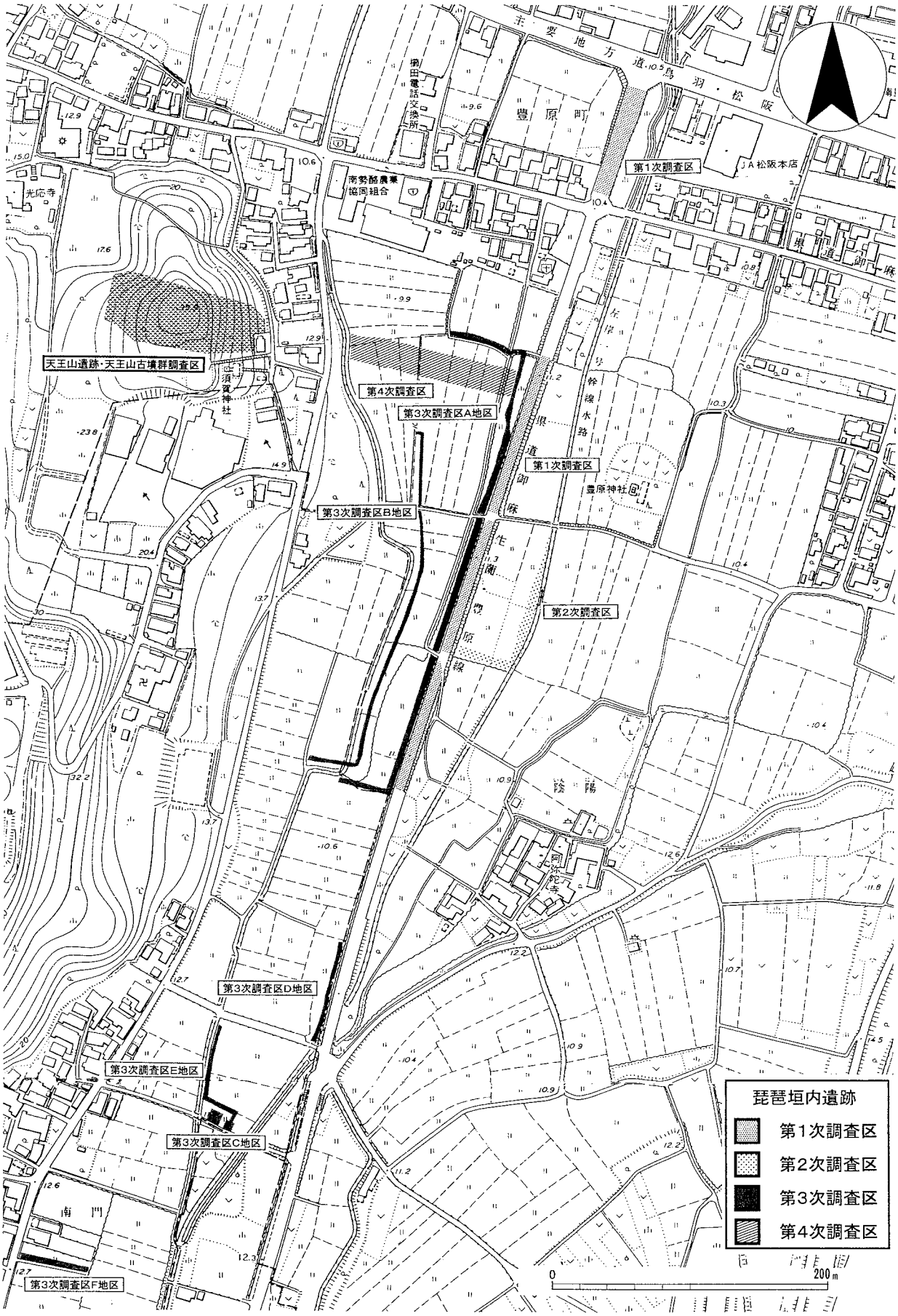
（河北）



第４図　試掘調査出土遺物実測図（1：4）

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径（㎝）	器高（㎝）	底　径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	040－03	Ｇ２７	土師器甕				ハケメ、ナデ	やや密、素地が異なる	並	灰褐	胴部小片	煤付着
2	034－01	Ｇ３０	須恵器壺			11.2	ロクロナデ、ロクロケズリ	やや密	やや良	灰	胴～底部3/4	

第２表　試掘調査出土遺物観察表



第５図　調査区位置図（1：4,000）

Ⅱ　位置と環境

琵琶垣内遺跡（１）は櫛田川下流左岸の標高10m程の氾濫平野に立地する。周辺の地理的環境や各時代を通した周辺の遺跡の状況については、当遺跡の第１・４次発掘調査報告書[8]及び第２次発掘調査報告書[9]や山添遺跡の第１次発掘調査報告書[10]・第２次発掘調査報告書[11]あるいは天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告書[12]等に記述されているので、詳細はそれらを参照していただきたい。

ここでは、今回の発掘調査区で確認された中心的な時期である古墳時代、奈良時代、平安時代末期～鎌倉時代に絞って周辺の遺跡を確認しておくことにとどめたい。

古墳時代

琵琶垣内遺跡の西側にある松阪丘陵東端部を越えた金剛川流域の松阪市市街地南西部には、茶臼山古墳（２）、久保古墳（３）、坊山古墳群（７）の１号墳、高田古墳群（８）の２号墳などの大型古墳が所在しており[13]、これらの古墳は、遺物から４世紀後半に属すると考えられている。さらに佐久米古墳群（11）に属する大塚山古墳は５世紀後半と考えられている。

琵琶垣内遺跡のすぐ西側の丘陵上には天王山古墳群（20）、山添古墳群（22）があり、また山添遺跡（21）内には車塚がある。天王山古墳群は19基の円墳からなる古墳群であり、このうち１・11～16号墳の７基が発掘調査され、５世紀中葉から７世紀中葉に築造されたことが判明した[14]。山添古墳群の２号墳は発掘調査[15]により６世紀後半とされている。山添遺跡内の車塚は、すでに墳丘は消滅しているが、山添遺跡の第３次発掘調査[16]で、その近くから埴輪が出土している。

櫛田川の対岸には古轡通りＢ遺跡（27）があり、古墳時代前半の２間×２間に四面庇がつく特異な掘立柱建物と木製くり抜き井戸が検出されている[17]。また古轡通りＢ遺跡に重複して所在する古轡通り古墳群では、６世紀中頃から後半にかけての古墳４基が確認されている。さらに東方の祓川右岸の丘陵部には、５世紀後半頃の神前山古墳群[18]（37）、大塚古墳群[19]（38）が、さらには後期群集墳である河田古墳群（32）がある[20]。

奈良時代

官衙遺跡としては、櫛田川を挟んだ３km東方に飛鳥時代から鎌倉時代にかけて存続した斎王の宮殿跡である国史跡斎宮跡（42）がある[21]。そして、その斎宮跡と奈良・京都の都を結ぶ推定古代官道（45）が琵琶垣内遺跡のすぐ北側を東西に走っている[22]。

寺院跡には、１km北東の下流には大雷寺廃寺（26）が、２km西方には貴田廃寺（９）がある。大雷寺廃寺はかつて広い範囲にわたって奈良時代後半の瓦が出土したとされている[23]。貴田廃寺はその実態は不明な点は多いが、奈良時代後半の瓦が出土していることから古代寺院跡と考えられている[24]。山添遺跡ではこの時期の遺構は顕著ではないが、第３次調査で大雷寺廃寺と同文の軒丸瓦が１点出土している[25]。

集落跡としては、琵琶垣内遺跡のすぐ西側の丘陵裾に丸野遺跡（17）、中谷遺跡（19）、天王山遺跡（20）があり、３km北西には堀町遺跡（12）がある。丸野遺跡では、飛鳥～奈良時代の竪穴住居４棟、掘立柱建物１棟を検出している[26]。中谷遺跡では竪穴住居や奈良時代の可能性がある掘立柱建物を検出している[27]。天王山遺跡では、飛鳥～奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている[28]。堀町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物２棟と井戸４基が検出されている[29]。なお、少し時代は新しくなるが２km南には大川上遺跡（23）があり、平安時代前Ⅱ期後半すなわち９世紀後半の溝から「神宮寺」と書かれた墨書土師器杯が出土しており、伊勢神宮寺との関連が指摘されている[30]。

平安時代末期から鎌倉時代

この時期は前述の斎宮跡が存続しており、また前述の堀町遺跡では、平安時代後末期～鎌倉時代の掘立柱建物40棟と井戸20基が検出されている[31]。

（河北）

第６図　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「松阪」「国東山」1：25,000による〕

Ⅲ　Ａ地区の調査結果

１　概要

Ａ地区は県道の西隣に沿った細長い調査区で、西に開いたコの字状を呈している。総延長約410m、幅1.5～2.0m、調査面積は650㎡である。北からＡ－Ⅰ～Ⅴの５地区に分けて調査を行なった。

Ⅰ地区は北端に位置する東西58mの調査区である。Ⅱ地区はⅠ地区に続く南北119mの調査区で小地区ｐｑｒ１～31である。Ⅲ地区はⅡ地区の南側でｑｒ32～37の南北23mである。Ⅳ地区はさらに南のｑｒ38～57の75mの間である。Ⅴ地区はさらに南に続く調査区でｑｒ58～84の南北100mと逆Ｌ字状に続くｉ～ｒ83・84地区の東西35mの調査区である。

２　土層

Ａ地区の調査区土層断面図は、Ⅱ～Ⅴ地区の南北方向は東壁で、Ⅴ地区の東西方向は南壁で作成した。

Ⅱ地区の基本的層序は、第１層が灰色砂質土の耕作土（１）、第２層が黄橙色粘質土の床土（２）、第３層が暗褐色砂質土の遺物包含層（３）、第４層が黒色砂質土（４）である。Ⅱ地区北端は削平により第３層がみられない。中央部付近は第３層と第４層の間に橙色砂質シルト（33）がみられる。遺構検出はおおむね第４層上面で行ったが、遺構は第３層上面から切り込むものと第４層上面から切り込むものがある。

Ⅲ地区の基本的層序は、第１層が灰色砂質土の耕作土（１）、第２層が橙色粘質土の床土（２）、第３層がにぶい橙色砂質土（３）、第４層が暗褐色砂質土に砂礫混じりの遺物包含層（４）、第５層が灰褐色砂質土（５）、第６層が黄灰色粘質シルト（６）である。第５層および第６層は北半部にみられるが、南半部では消滅する。遺構検出面はおおむね第４層上面である。

Ⅳ地区の基本的層序は、第１層がオリーブ灰色砂質土の耕作土（１）、第２層が橙色砂質土の床土（２）、第３層が暗褐色粘質土に砂礫混じり（３）である。第３層は、遺物包含層であるが、現水田の耕地整理時に削平を受けて、残存状況が悪くなっている。第４層以下は、複雑な層序となる。

Ⅴ地区の基本的層序は、第１層が灰色砂質土の耕作土（１）と現代畦畔および盛土（95）、第２層が明黄橙色粘質土の床土（２）であり、第３層以下は様々な土層が入り込み、層序は場所によって異なっている。

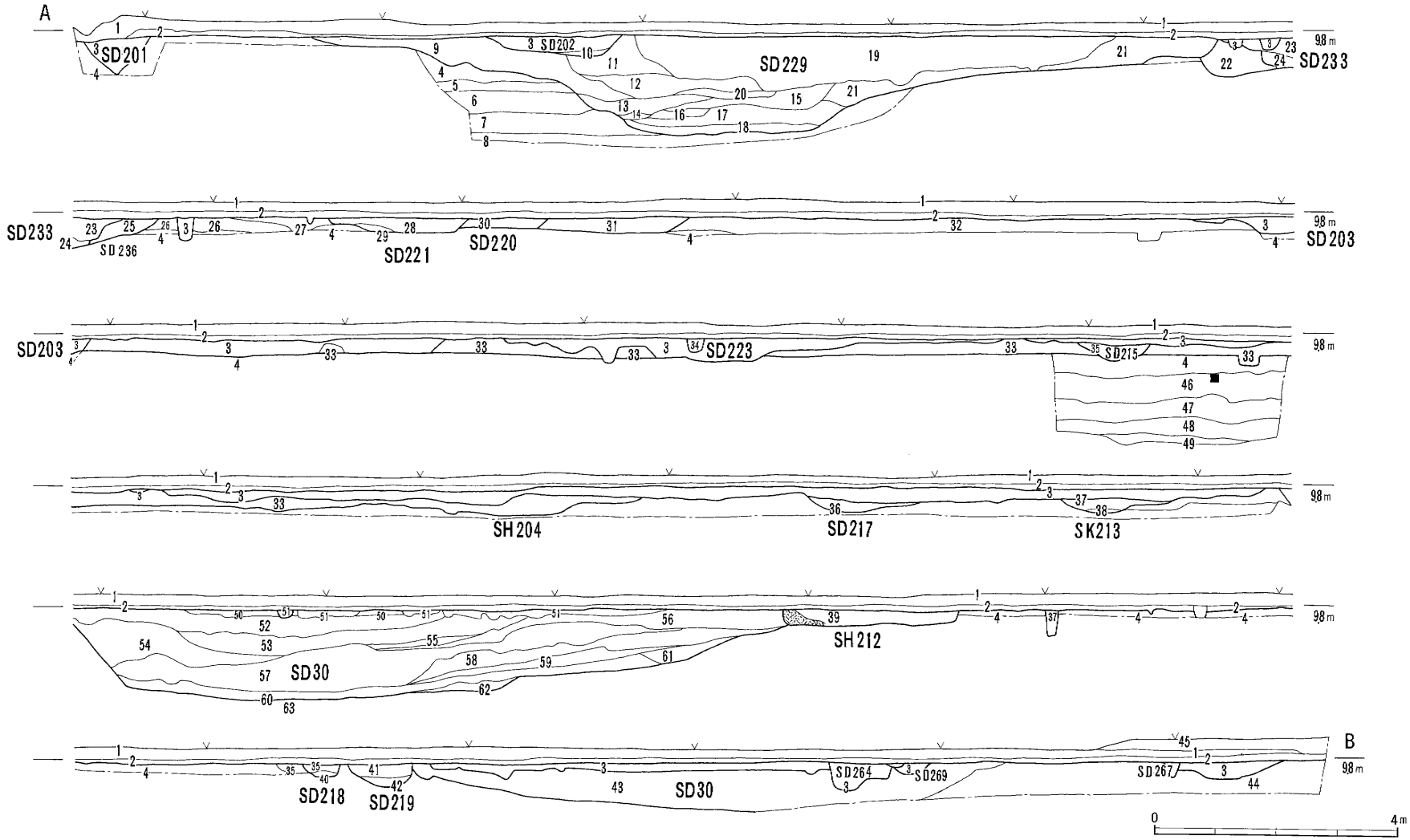
３　遺構

遺構は、二面に分けて検出した。当然同一地点での上面で検出した遺構は新しく、下面で検出した遺構は古いものである。また、重複する遺構が多く、同一面で検出したが、切り勝っているほうを上面、切られているほうを下面としていることもある。したがって、結果として上面遺構と下面遺構との時期差がはっきりと分かれるわけではなかったために、遺構の記述では特に分けることなく扱った。ただし、遺構平面図は、上面と下面に分離して掲載した。

調査区が細長いため、検出遺構の多く、特に調査区に直交する溝は調査区外に延びるためその全容を明かにすることはできなかった。なお、遺構の規模は特に記述のない限り、検出状況での計測値である。

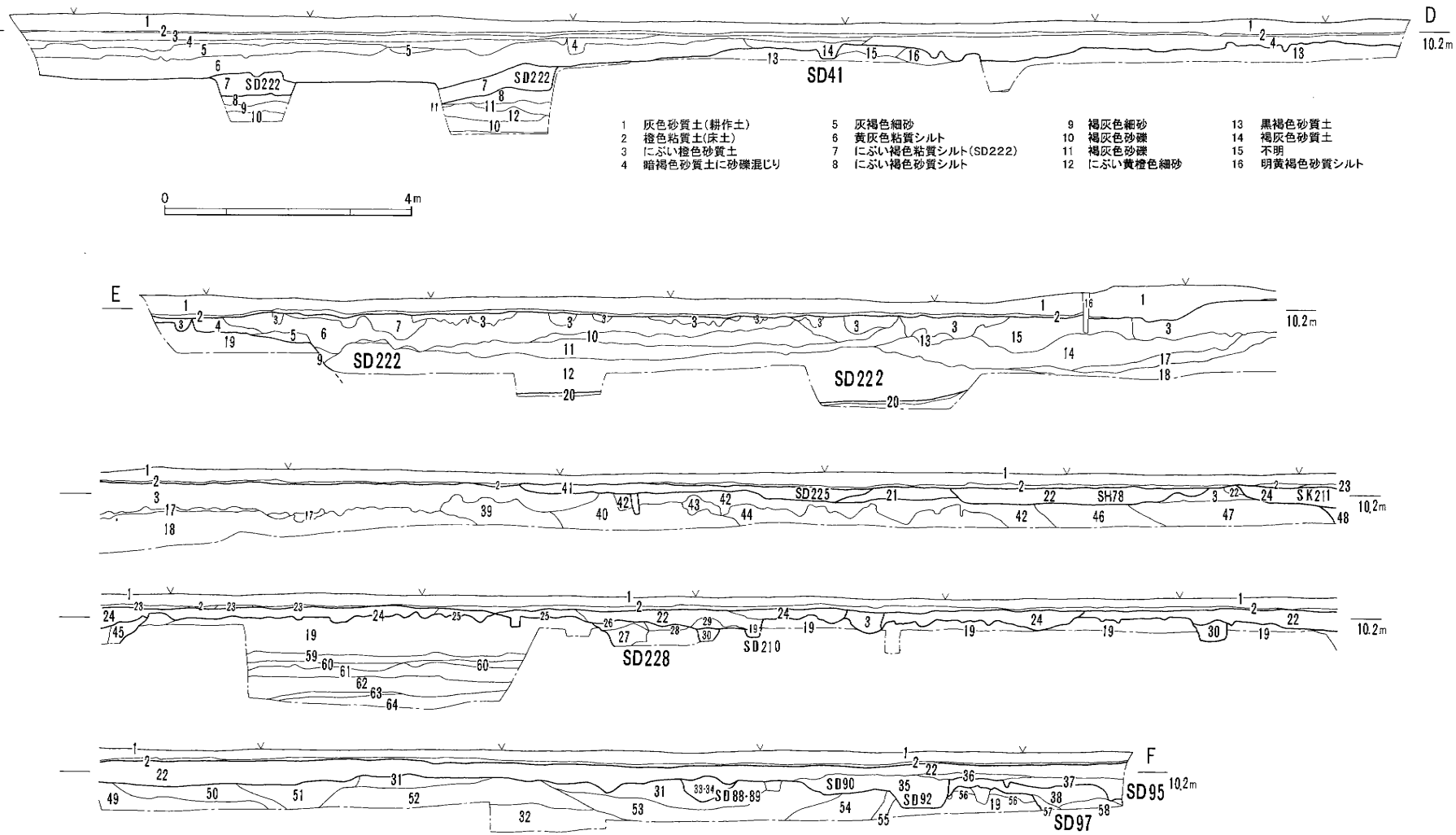
遺構の時期は、古いものは古墳時代前半、新しいものは江戸から明治時代頃までと広範である。遺構の時期決定については、出土遺物による判断を中心に、他の遺構との切り合い関係や遺構埋土の色・質によって決定した。しかし、出土遺物は小片が多く、また遺構が重複している箇所では、遺物の混入が考えられるケースもあり、各遺構の時期については、ある程度幅を持たせて考えざるを得ない遺構もみられた。このため、各遺構の時期は次のような分け方とした。

（１）古墳時代前半
（２）古墳時代
（３）古墳時代から奈良時代
（４）奈良時代



1 灰色砂質土(耕作土)
2 黄橙色粘質土(床土)
3 暗褐色粘質土に礫又は粗砂混じり(包含層・SD201・202・203・223・30・264・269)
4 黒色砂質土
5 明赤褐色粘質土に円礫混じり
6 にぶい黄色砂質土に円礫混じり
7 黄灰色砂に円礫混じり
8 オリーブ黄色砂に円礫混じり
9 明黄褐色シルト(SD229)
10 褐色砂質土に粗砂混じり(SD202)
11 にぶい黄褐色砂質土に粗砂混じり(SD229)
12 にぶい黄褐色砂質土(SD229)
13 にぶい黄橙色シルト(SD229)
14 にぶい黄橙色粘質シルト(SD229)
15 灰黄褐色細砂(SD229)
16 褐灰色細砂(SD229)
17 灰黄褐色細砂(SD229)
18 明青灰色粗砂に明黄褐色粗砂混じり(SD229)
19 明黄褐色シルト(SD229)
20 にぶい黄橙色粘質シルト(SD229)
21 暗褐色砂質土(SD229)
22 明黄褐色シルト
23 にぶい褐色砂質シルト(SD233)
24 暗褐色砂質土に円礫混じり(SD233)
25 浅黄色シルト(SD236)
26 黒褐色砂質土に円礫混じり
27 暗赤褐色砂質土
28 にぶい褐色砂質土(SD221)
29 暗褐色砂礫に黄橙色粗砂混じり(SD221)
30 黒褐色砂質土(SD220)
31 暗褐色砂質土
32 明黄褐色シルト
33 橙色砂質シルト
34 にぶい褐色砂質土
35 灰褐色砂質土(SD215・218)
36 灰褐色砂質土(SD217)
37 灰色砂質土(SK213)
38 灰黄褐色砂(SK213)
39 灰褐色砂質土に黒色砂質土混じり(SH212)
40 黒褐色砂質土(SD218)
41 黒褐色砂質土(SD219)
42 黒褐色砂質土(SD219)
43 灰黄色シルトに黄橙色シルト、にぶい黄橙色粗砂混じり(SD30)
44 浅黄色粗砂に黄色シルト混じり(SD30)
45 黄色砂質土に礫混じり(盛土)
46 黒色シルト
47 明黄褐色シルトに砂混じり
48 明黄褐色シルト質砂礫
49 にぶい黄橙色砂礫
50 浅黄色シルトに礫混じり(SD30)
51 灰黄色土(SD30)
52 にぶい黄色細砂質シルト(SD30)
53 暗灰黄色砂礫(SD30)
54 オリーブ黄色砂質シルト(SD30)
55 黄褐色細砂(SD30)
56 にぶい黄色砂質シルト(SD30)
57 黄褐色砂礫または砂(SD30)
58 黄褐色細砂質シルト(SD30)
59 暗灰黄色シルト(SD30)
60 暗黄褐色シルト(SD30)
61 オリーブ褐色砂質シルト(SD30)
62 暗灰黄色シルト質砂(SD30)
63 オリーブ黄色砂礫

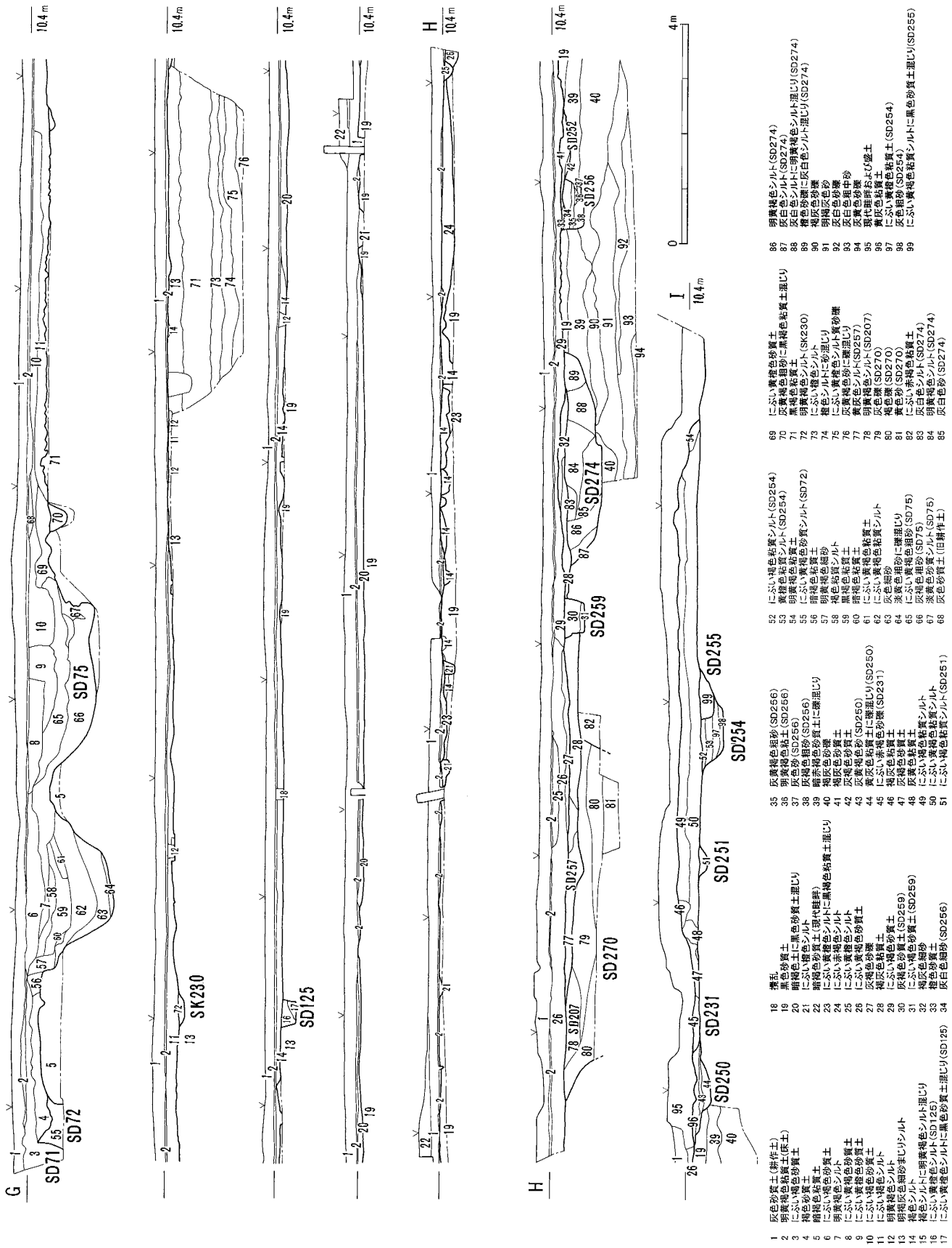
第7図 A－Ⅱ地区土層断面図(1：100)



1 灰色砂質土(耕作土)
2 橙色粘質土(床土)
3 にぶい橙色砂質土
4 暗褐色砂質土に砂礫混じり
5 灰褐色細砂
6 黄灰色粘質シルト
7 にぶい褐色粘質シルト(SD222)
8 にぶい褐色砂質シルト
9 褐灰色細砂
10 褐灰色砂礫
11 褐灰色砂礫
12 にぶい黄橙色細砂
13 黒褐色砂質土
14 褐灰色砂質土
15 不明
16 明黄褐色砂質シルト

1 オリーブ灰色砂質土(耕作土)
2 橙色砂質土(床土)
3 暗褐色粘質土に砂礫混じり
4 にぶい赤褐色砂質シルト(SD222)
5 褐色粘質土(SD222)
6 明黄褐色細砂質シルト(SD222)
7 黄褐色砂質土に砂礫混じり(SD222)
8 にぶい黄橙色細砂(SD222)
9 にぶい黄褐色粘質シルト(SD222)
10 黄褐色細砂(SD222)
11 にぶい赤褐色粗＋にぶい黄色細砂(SD222)
12 暗赤褐色粗砂＋にぶい黄褐色砂礫(SD222)
13 にぶい黄橙色粘質シルト(SD222)
14 にぶい黄橙色砂質シルト(SD222)
15 明黄褐色粘質シルト(SD222)
16 攪乱土
17 にぶい黄橙色粘質シルト(SD222)
18 黄褐色砂質シルト(SD222)
19 黒色砂質土
20 黒褐色粘質土
21 黄褐色砂礫
22 灰褐色砂質土(SH78・その他)
23 橙色砂(床土か)
24 褐色砂に礫混じり(SK211)
25 黒褐色粘質土
26 にぶい褐色土(SD228)
27 にぶい褐色土に黒褐色砂質土混じり(SD228)
28 褐色砂質土(SD228)
29 灰黄褐色シルト
30 にぶい黄褐色シルト
31 にぶい橙色粘質シルト
32 にぶい黄橙色シルト
33 黄灰色土(SD88・89)
34 灰黄色シルト(SD88・89)
35 黄褐色砂質土(SD90・92)
36 灰褐色シルト
37 褐色シルト(SD95)
38 にぶい黄褐色シルト(SD97)
39 灰褐色粗砂
40 明黄褐色シルト
41 黒褐色砂質土に礫混じり(SD225)
42 黄褐色粗砂
43 褐灰色砂
44 褐灰色砂に黄褐色砂質シルト混じり
45 明黄褐色シルト
46 灰色粗砂に礫混じり
47 黄褐色砂質シルトに灰黄褐色粗砂混じり
48 にぶい黄褐色粗砂
49 明黄褐色粘質シルト
50 にぶい褐色粘質シルトに黒褐色粘質土混じり
51 にぶい褐色粘質シルト
52 にぶい黄褐色シルト
53 灰黄褐色シルト
54 明黄褐色砂質シルト
55 にぶい黄橙色砂質シルト
56 暗褐色粘質土
57 にぶい黄褐色シルトに暗褐色粘質土混じり(SD97)
58 灰褐色粗砂(SD97)
59 暗赤褐色シルト
60 にぶい赤褐色シルトに砂混じり
61 にぶい赤褐色シルト質砂礫
62 淡黄色砂礫
63 暗赤褐色および灰白色砂
64 灰白色砂礫

第8図 A－Ⅲ・Ⅳ地区土層断面図 (1：100)



第９図　Ａ－Ｖ地区土層断面図（1：100）

（５）奈良時代から平安時代
（６）平安時代
（７）平安時代末期から鎌倉時代
（８）中世
（９）近世から明治時代
（10）時期不明
（11）現代

（１）古墳時代前半の遺構

①　溝

ＳＤ３０　第１次調査で検出した南北方向の大溝で、今回の調査でもその続きをＡ－Ⅱ地区の下面ｒ20～23地区およびｒ27～29地区の２箇所で確認した。第１次調査の成果も含めると長さ45m以上、幅３ｍ前後、深さ1.5mである。埋土は何層かに分かれるが、黄褐色系のシルトまたは細砂が主で、これに黄橙色シルトやにぶい黄橙色粗砂が混じる。奈良時代の竪穴住居ＳＨ２１２に切られる。第１次調査では、当該遺構の時期を弥生時代中期以降としているが、今回の調査では縄文土器（44）、古墳時代前半の土師器高杯・壺（45）・甕が出土していることから、古墳時代前半とした。

ＳＤ９７　第１次調査で確認された溝であるが、今回の第３次調査でもその続きをＡ－Ⅳ南端のｑｒ56・57地区で検出した。規模は不明であるが、切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ９５より古い。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰褐色粗砂またはにぶい黄褐色シルトに暗褐色粘質土混じりである。第１次調査では古墳時代前半の遺物が相当量出土しているため、遺構の時期は、当該期と判断したものである。今回の調査では、奈良～平安時代の間におさまる土師器甕等の小片が出土したが、これは隣接する遺構からの混入の可能性が高い。

ＳＤ２０６　Ａ－Ⅴ地区の北端からｑ66地区にかけて検出した南北方向の大溝で、長さ32m以上、幅は不明、深さ0.1～0.3mである。Ⅲ・Ⅳ地区のＳＤ２２２と一連の大溝の可能性もあるが、確認には至らなかったため異なる遺構番号を付与した。古墳時代前半の土師器高杯（３・４）・甕（５～７）が出土した。なお、須恵器、山茶椀がごく少量出土したが、須恵器は溝の最終埋没時期を示す遺物であり、山茶椀は調査時に新しい時期の遺構の切り込みを見落としたための混入と推定される。

ＳＤ２０８　Ａ－Ⅴｒ75～83地区で検出した南北方向の大溝で、長さ33m以上、幅は不明、深さ0.8～1.0mであるが、落ち込みの可能性もある。縄文土器（８・９）、弥生土器壷（10～13）、土師器高杯（17～19）・壺（14～16）・小型丸底壷・甕（20～25）・ミニチュア土器（28）が出土した。量的には古墳時代前半の遺物が多くを占める。出土遺物の中には、古墳時代後半に属する土師器小片や奈良時代の土師器椀（26）・甕（27）なども若干みられるが、それらは遺構の埋没期を示すものと考えられる。

ＳＤ２２２　Ａ－Ⅲ・Ⅳ地区のほぼ全面にわたる南北方向の大溝である。長さと幅は不明であるが、深さは0.3mである。前述のとおりＡ－Ⅴ地区のＳＤ２０６と一連の大溝の可能性がある。埋土はにぶい褐色粘質シルトである。出土遺物には、縄文土器（29～32）、弥生土器壷（33・34）・甕（35）、古墳時代前半の土師器高杯（36～38）・壺（41）・甕（39・40）、板状木製品、奈良時代の土師器椀（42）・甕（43）があり、縄文時代～奈良時代と時期幅がある。縄文土器については、少量、小片であり、弥生土器も一定量出土しているものの小片である。古墳時代前半の土器は量的に比較的多く出土しており、この溝の存続時期あるいは埋没開始時期としては、古墳時代前半とするのが適切と考える。一方、奈良時代の遺物については、調査時に奈良時代の遺構の切り込みを見落としていたか、あるいは溝の最終埋没期を示すものであろう。

ＳＤ２４０　Ａ－Ⅰｊ２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。埋土は褐色土で、古墳時代の土師器高杯（46）が出土した。また、平安時代の土師器の小片が出土したが、後世の遺構の切り込みを見落としたための混入と考えられる。

ＳＤ２７１　Ａ－Ⅴｑｒ59地区下面で検出した東西溝で、長さ2.0m、幅1.1m以上、深さ0.3mである。切り合いにより奈良～平安時代の溝ＳＤ２７２より古い。古墳時代前半の土師器甕（47・48）や高杯・壷・甕等の小片が出土した。

ＳＤ２７５　Ａ－Ⅴ地区下層ｑｒ60～62で検出した東西溝で、長さ2.5m以上、幅2.5m、深さ0.9mである。埋土は二層に分かれ、上層がにぶい黄褐色粗砂、下層が灰褐色粗砂である。古墳時代前半の土師器小片が出土した。

（２）古墳時代の遺構

①　溝

ＳＤ２３３　Ａ－Ⅱｐ６地区下面で検出した東西溝で、長さ0.9m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。切り合いによりＳＤ２３６より新しい。古墳時代の土師器、須恵器の小片が出土しており、当遺構の時期は古墳時代後半と考えられる。

ＳＤ２３６　Ａ－Ⅱｐ６地区下面で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅2.3m、深さ0.5m以上である。土師器の小片が出土したが、遺物から時期を限定することは困難である。切り合いにより古墳時代の溝ＳＤ２３３より古く、古墳時代以前と判断できることから一応、この時期とした。

②　土坑

ＳＫ２１１　Ａ－Ⅳｒ47・48地区で検出した土坑で、平面形は1.0m以上×0.3m、深さは0.1mである。古墳時代の土師器片が出土した。

ＳＫ２７３　Ａ－Ⅴｒ63地区下面で検出した土坑で、平面形は長径1.0m、短径0.5mの楕円形で中段にテラスをもつ。深さは中段が0.2m、底部が0.5mである。古墳時代の土師器甕が出土した。

（３）古墳時代から奈良時代の遺構

①　溝

ＳＤ８８・８９　第１次調査ではＳＤ８８・８９の２条の溝を確認している。今回の調査でもその続きをＡ－Ⅳｑｒ55地区で検出したが、平面・断面とも２条に分けて検出することが出来なかった。溝の南側法面には中段がみられることから、北側の深い部分がＳＤ８８、南側の中段までがＳＤ８９となる可能性が高い。第１次調査の成果も含めると、長さは両溝とも21m以上で、幅はＳＤ８８が0.6～1.6m、ＳＤ８９が0.4～1.1m、深さはＳＤ８８が0.6m、ＳＤ８９が0.4m程になると考えられる。埋土は黄灰色または灰黄色土で、炭が混じる。第１次調査では、ＳＤ８８が古墳時代後期、ＳＤ８９が古墳時代としているが、第３次調査では奈良時代の土師器皿（79）・甕（80）および小片が出土していることから、どちらかの溝が奈良時代と考えられる。

ＳＤ２５０　Ａ－Ⅴｍ83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.1m、深さ0.1mである。上面を近世以降の溝であるＳＤ２３１に切られる。埋土は二層に分かれ、上層が灰黄褐色砂、下層が黄灰色粘質土に礫混じりで、古墳～奈良時代にかけてと考えられる土師器甕、須恵器小片が出土した。

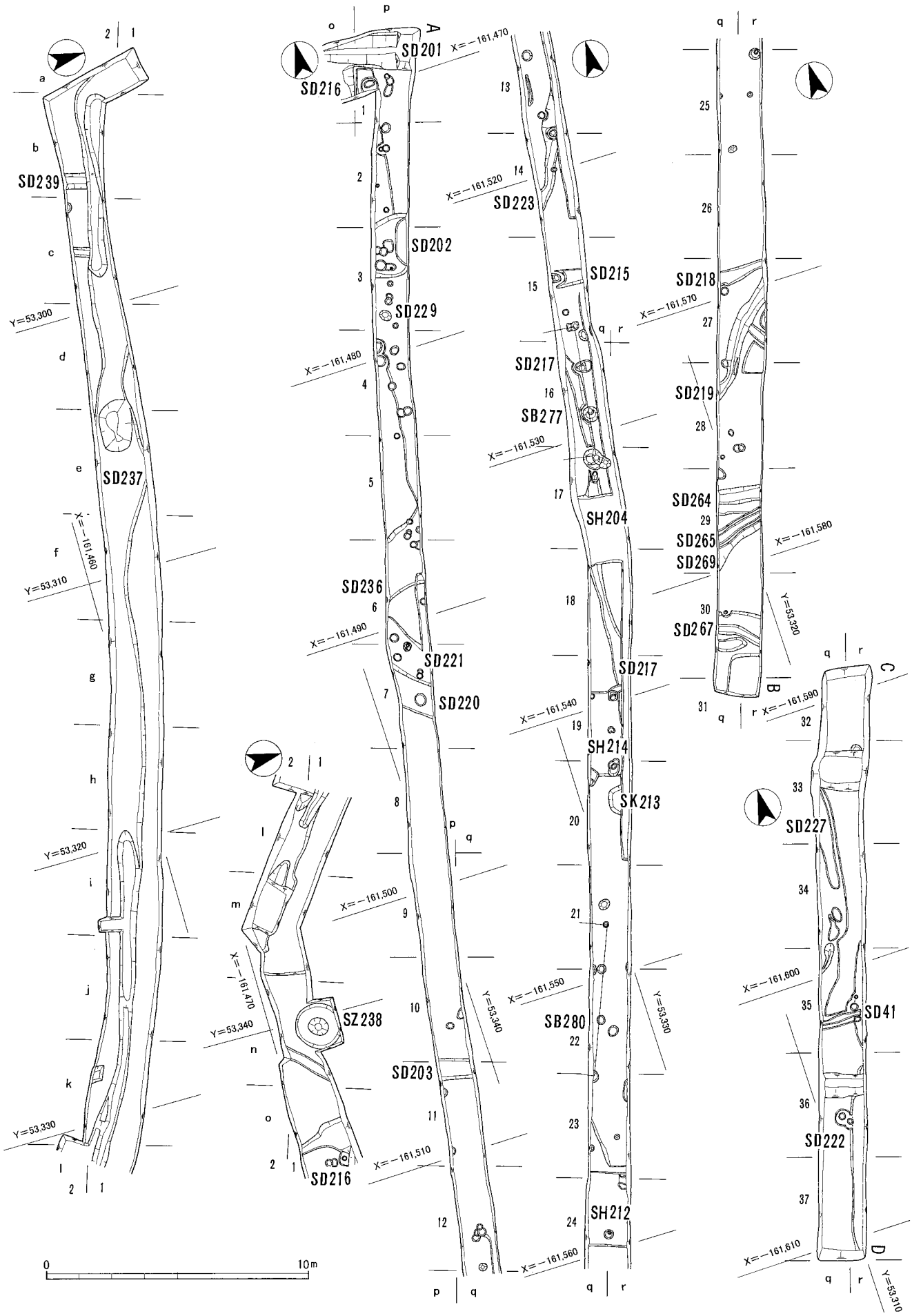
（４）奈良時代の遺構

①　竪穴住居

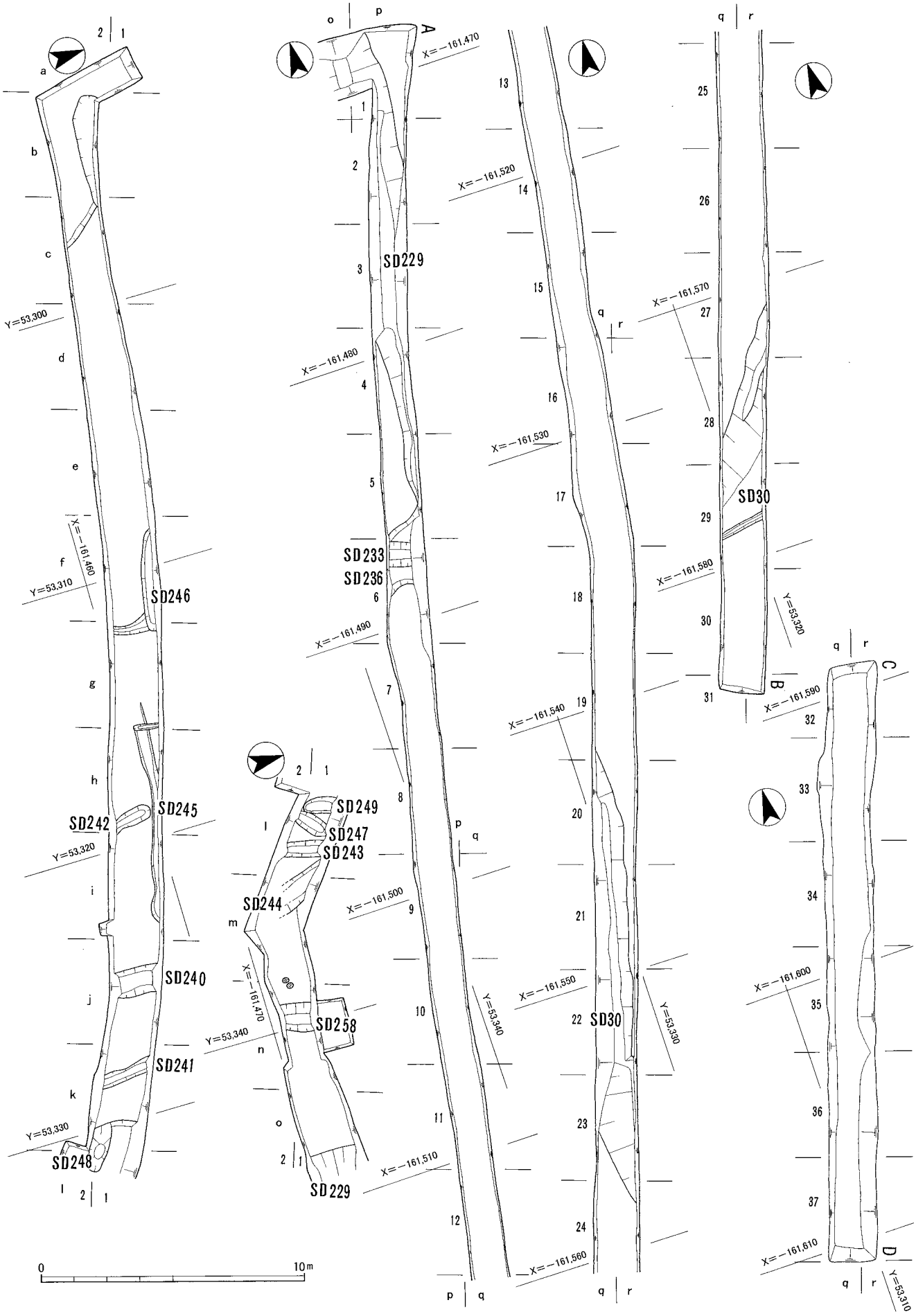
ＳＨ２０４　Ａ－Ⅱｑｒ17地区で検出した竪穴住居で、東西1.5m以上×南北2.8m、深さ0.1mである。方位はN９°Eである。切り合いにより、奈良時代の溝ＳＤ２１７より新しい。主柱穴や竈は確認できなかったが、形状が他の竪穴住居に類似することから、竪穴住居と考えた。調査区東壁面では遺物包含層である橙色砂質シルト層が2.5mの範囲で深さ0.2m程凹んでいることが確認されており、この竪穴住居の埋土と考えられる。したがって、竪穴住居の東辺は調査区外にまで延びるものと判断される。埋土からの出土遺物はないが、遺構の時期は他の竪穴住居と同じく奈良時代と推定した。

ＳＨ２１２　Ａ－Ⅱｑｒ24地区で検出した竪穴住居で、東西1.6m以上×南北2.9m、深さ0.2mである。方位はN18°Eである。切り合いにより古墳時代前半の大溝ＳＤ３０より新しい。北壁には0.3m以上×0.6mの範囲で竈跡と考えられる炭と焼土がみられる。南壁近くには径0.4mの円形のピットが一箇所あり、主柱穴の可能性がある。埋土は灰褐色砂質土に黒色砂質土がブロックで混じる。遺構埋土から奈良時代の土師器皿（49）・甕（50）・甑、須恵器杯片が出土した。

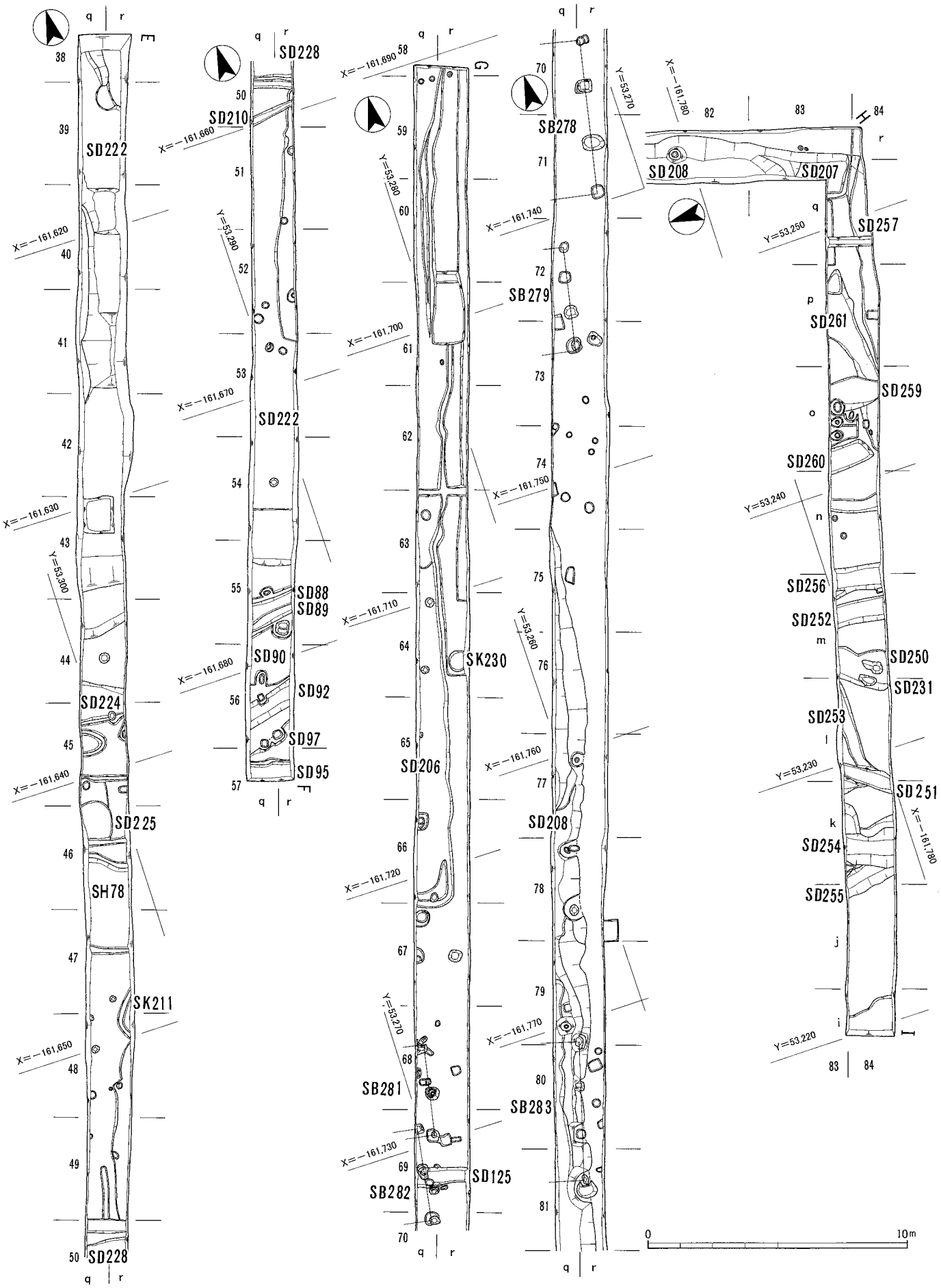
ＳＨ２１４　Ａ－Ⅱｑｒ19・20地区で検出した竪穴住居で、東西1.2m以上×南北3.2m、深さ0.1mである。方位はN18°Eである。竪穴住居の東壁は北半分を検出したが、南半分は調査時の排水用トレンチにより破壊しており、確認できなかった。東壁の中央



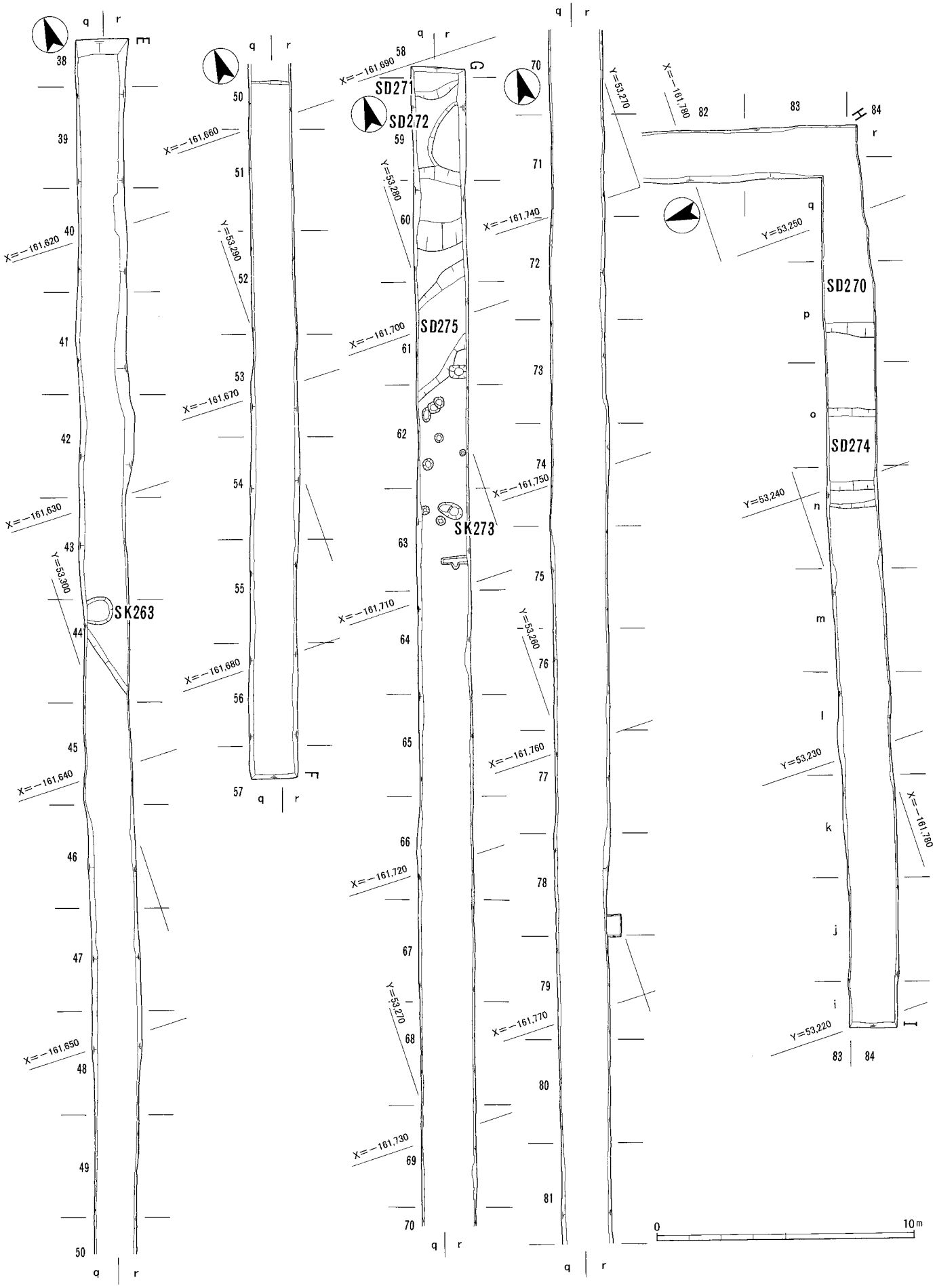
第10図　ＡＩ～Ⅲ地区第一検出面遺構平面図（1：200）



第11図　ＡⅠ～Ⅲ地区第二検出面遺構平面図（1：200）



第12図　AⅣ・V地区第一検出面遺構平面図（1：200）



第13図　AⅣ・V地区第二検出面遺構平面図（1：200）

部に0.7m×0.5m以上の範囲で焼土がみられるが、これは竈の残骸と考えられる。２箇所にピットがあるが、主柱穴の可能性がある。また、北東隅から幅0.2mの溝が延びているが、これは竪穴住居の排水溝の可能性がある。奈良時代の土師器杯（51）・皿（52～54）・甕（55～60）、須恵器杯小片が出土した。

② 掘立柱建物

掘立柱建物は７棟確認したが、いずれも柱穴が直線的に３～４個並ぶもの、すなわち２～３間分を検出したものである。柱穴の形、規模、方向、柱間、柱痕跡の有無などから掘立柱建物と推定したものである。

ＳＢ２７７　Ａ－Ⅱｑ15・16地区で、Ｎ８°Ｅの南北方向に３間分検出した。長さは5.1mで、柱間寸法は1.7m等間である。柱掘形は径0.5～0.7mの円形で、深さは0.5m、柱痕跡は径0.2mである。埋土は暗褐色土で、遺物は奈良時代の土師器皿（61）と杯・甕の小片が出土した。

ＳＢ２７８　Ａ－Ｖｑｒ70・71地区で、N11°Eの南北方向に３間分を検出した。長さは6.0mで、柱間寸法は北から1.8＋2.2＋2.0mである。柱掘形は一辺0.3～0.8m程の隅丸方形で、深さは0.4mである。埋土は主に明黄褐色土や黄橙色のシルトで、出土遺物は土師器甕の小片であるが、奈良時代頃と考えても矛盾のないものである。

ＳＢ２７９　Ａ－Ｖｑｒ72・73地区で、N11°Eの南北方向に３間分を検出した。長さは3.9mで、柱間寸法は1.3m等間である。柱掘形は一辺0.4m程の隅丸方形で、深さは0.2mである。埋土は主として明黄褐色シルトで、奈良時代の須恵器杯蓋（62）や土師器杯・甕、須恵器杯の小片が出土した。

ＳＢ２８０　Ａ－Ⅱｑｒ21・22地区で、N24°Eの南北方向に３間分を検出した。長さは5.85mで、柱間寸法は1.95m等間である。柱掘形は径0.2～0.4m程の円形で、深さは0.2mである。埋土は灰褐色、黄褐色、暗灰色で、土師器の小片が出土した。

ＳＢ２８１　Ａ－Ⅳｑｒ68・69地区で、N10°Eの南北方向に２間分を検出した。長さは3.6mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一辺0.5m程の隅丸方形で、深さは0.3m、柱痕跡は径0.2mである。埋土から、奈良時代と考えてほぼ間違いのない土師器杯が出土した。

ＳＢ２８２　Ａ－Ｖｑｒ69・70地区で、Ｎ８°Ｅの南北方向に２間分を検出した。長さは3.6mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一辺0.3m程の隅丸方形で、深さは0.5mである。埋土は黄灰色等で、土師器の小片や古墳時代の須恵器杯が出土したが、遺構そのものの時期は他の掘立柱建物と同じく奈良時代であろう。

ＳＢ２８３　Ａ－Ｖｒ80・81地区で、N16°Eの南北方向に３間分を検出した。長さは5.4mで、柱間寸法は1.8m等間である。柱掘形は一辺0.4m程の隅丸方形で、深さは0.2mである。埋土から土師器の小片が出土した。

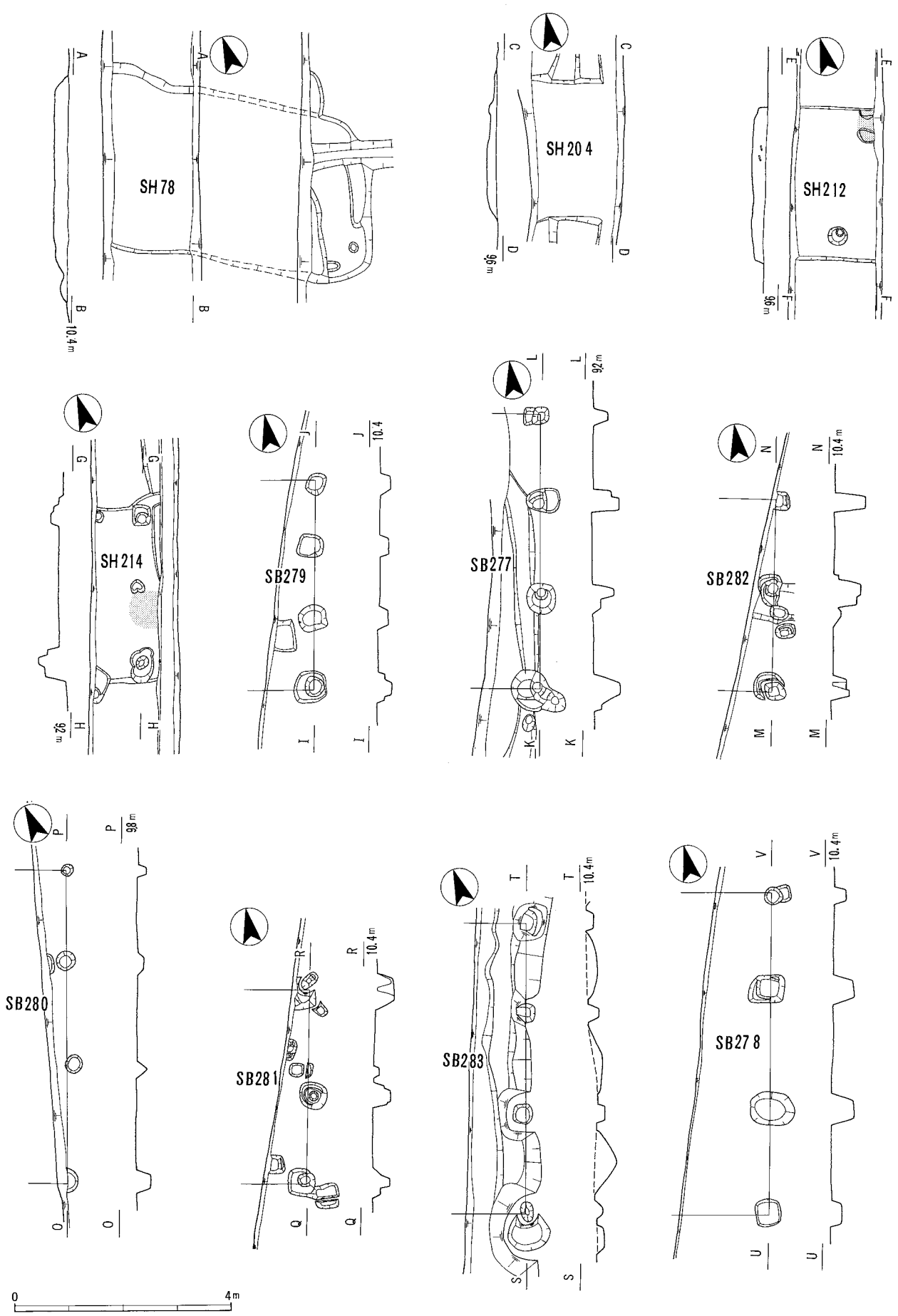
③ 溝

ＳＤ９０　第１次調査で確認された溝で、今回の第３次調査でもその続きをＡ－Ⅳｑｒ55・56地区で検出した。第１次調査の結果も含めると、長さ21m以上、幅2.0m、深さ0.3mである。埋土は黄褐色砂質土である。今回の調査では遺物は出土しなかったが、第１次調査の結果を踏襲して奈良時代とした。

ＳＤ２０１　Ａ－Ⅱｏｐ1地区で検出した東西溝で、長さ４m以上、幅1.5m、深さ0.4～0.6mで、断面は逆三角形である。埋土は暗褐色粘質土で礫を含んでいる。縄文土器（63）、奈良時代の土師器皿・甕（66～68）・甑（69）、須恵器の小片が出土し、さらには平安時代の土師器杯（64）、甕（65）、山茶椀（70・72・73）、小椀（71）、鉢（74）も出土した。当該遺構の時期は、一応、奈良時代の項で取り扱ったが、出土遺物が奈良時代と平安時代末期～鎌倉時代にはっきり分かれる。したがって、２時期の溝が重複していた可能性も高いが、現地では確認出来なかった。なお、江戸時代の寛永通宝（76）も出土したが、近世遺構の切り込みを見落としたための混入であろう。

ＳＤ２１５　Ａ－Ⅱｑ15地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は灰褐色砂質土で、奈良時代の土師器杯類・甕、製塩土器の小片が出土した。

ＳＤ２１６　Ａ－Ⅰｏ1地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅2.5m、深さ0.2mである。埋土に



第14図　竪穴住居、掘立柱建物実測図（1：100）

は焼土が含まれる。奈良時代の土師器甕（77）が出土した。

ＳＤ２１７　Ａ－Ⅱｑｒ16～19地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の竪穴住居ＳＨ２０４および掘立柱建物ＳＢ２７７より古いものである。埋土は灰褐色砂質土で、奈良時代のものと考えても矛盾しない土師器の小片が出土した。

ＳＤ２１９　Ａ－Ⅱｑｒ27・28地区で検出した溝で、長さ4.5m以上、幅0.3～0.6m、深さ0.3mである。埋土は暗褐色土または黒褐色砂質土であるが、奈良時代かと思われる土師器甕・皿、須恵器小片が出土した。

ＳＤ２２０　Ａ－Ⅱｐ７地区で検出した溝で、長さ２m以上、幅1.2m以上、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の溝ＳＤ２２１より古い。埋土は黒褐色粘質土で、奈良時代の土師器高杯・甕、須恵器小片および土錘（78）が出土した。

ＳＤ２２１　Ａ－Ⅱｐ６・７地区で検出した溝で、長さ２m以上、幅1.2m、深さ0.2～0.5mである。切り合いにより奈良時代の溝ＳＤ２２０より新しい。埋土はにぶい褐色砂質土で、奈良時代の土師器皿・甕、須恵器小片が出土した。

ＳＤ２２３　Ａ－Ⅱｑ13・14地区で検出した溝で、長さ4.5m以上、幅0.4～1.0m、深さ0.05mである。埋土は暗褐色砂質土で、土師器の小片が出土した。また、溝内のピットからは奈良時代の土師器皿が出土した。

ＳＤ２２５　Ａ－Ⅳｑｒ45・46地区で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅2.2m、深さ0.1～0.2mである。奈良時代の土師器杯類・甕の小片が出土した。

ＳＤ２２７　Ａ－Ⅲｑ33・34地区で検出した南北溝で、長さ3.8m以上、幅0.5m以上、深さ0.3mである。埋土は黄褐色砂質土で、奈良時代の可能性が高い土師器の椀・甕が出土した。

ＳＤ２４２　Ａ－Ｉｈ１・２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.4m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は明褐色土で、奈良時代の土師器甕小片が出土した。

ＳＤ２４４　Ａ－Ｉｌm1・2地区下面で検出した溝で、長さ2.5m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は明褐色土で、奈良時代の土師器、須恵器の小片が出土した。

ＳＤ２４５　Ａ－Ｉｈ１地区下面で検出した東西溝で、長さ８m以上、幅0.5m、深さ0.1mである。奈良時代の土師器、須恵器の小片が出土した。近世陶器も出土したが、近世遺構の切り込みを見落としたための混入と考えられる。

ＳＤ２５１　Ａ－Ｖｋｌ83・84地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良時代の溝ＳＤ２５３より新しい。奈良時代の可能性がある土師器甕等、須恵器甕等の小片が出土した。

ＳＤ２５３　Ａ－Ｖｌ83・84地区で検出した東西溝で、長さ3.5m以上、幅0.5m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代の溝ＳＤ２５１より古い。奈良時代と思われる土師器甕等、須恵器小片が出土した。

ＳＤ２５７　Ａ－Ｖｐ～ｒ84地区で検出した東西溝で、長さ９m以上、幅1.2m以上、深さ0.1mである。奈良時代の土師器杯類・甕、須恵器杯類・甕、また時代は確定できないが土錘（82・83）が出土した。灰釉陶器片や山茶椀（81）も出土したが、灰釉陶器片は黒笹90号窯式[32]のものであり、溝の埋没期を示すものと考えられる。山茶椀は後世の遺構の切り込みを見落としたための混入であろう。

ＳＤ２５８　Ａ－Ｉｎ２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.2m以上、幅1.1m、深さ0.3mである。埋土は黄灰色土で、奈良時代の土師器甕が出土した。中世の陶器も出土したが、これは後世の遺構の切り込みを見落としたための混入であろう。

ＳＤ２５９　Ａ－Ｖｏ83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.9m以上、幅0.7～1.2m、深さ0.4mである。埋土は上層が灰褐色砂質土、下層がにぶい褐色砂質土で、奈良時代の土師器皿・甕、須恵器杯・甕が出土した。

ＳＤ２６０　Ａ－Ｖｏ83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.9m以上、幅0.9m、深さ0.2mである。埋土は灰褐色土で、奈良時代の土師器椀（84）・台付き椀（85）・台付き皿（86）・杯・皿（87～90）・甕片、須恵器甕小片が出土した。

ＳＤ２６１　Ａ－Ｖｏｐ84地区で検出した東西溝で、長さ６ｍ以上、幅0.7～1.2m、深さ0.1mである。埋土は灰褐色土で砂や礫を含む。奈良時代の土師器椀・高杯・甕、須恵器甕等の小片が出土した。

ＳＤ２７０　Ａ－Ｖｐｑ83・84地区下面で検出した南北方向の大溝で、長さは不明、幅７ｍ、深さ0.7m以上である。埋土は三層に別れ、上から順に灰色礫、褐色礫、黄色砂である。奈良時代の土師器椀・杯・高杯・甕、須恵器杯・甕の小片が出土した。

ＳＤ２７４　Ａ－Ｖｎｏ83・84地区下面で検出した南北方向の大溝で、長さ2.0m以上、幅7.3m、深さ0.8mである。埋土は明黄褐色シルトまたは灰白色砂である。奈良時代の土師器甕・甑、須恵器甕の小片が出土した。

ＳＤ２７６　Ａ－Ｖｐ83・84地区付近の下面で検出した溝である。奈良時代の土師器椀（91）・甕片、須恵器甕の小片が出土した。

④　土坑

ＳＫ２３０　Ａ－Ｖｒ64地区で検出した土坑で、平面形は0.8m以上×0.5mで、深さ0.1mである。奈良時代の可能性が高い土師器の甕（92・93）が出土した。

ＳＫ２６３　Ａ－Ⅳｑ44地区下面で検出した土坑で、平面形は1.0m以上×1.0mで、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、奈良時代の可能性が高い土師器椀・甕の小片が出土した。

（5）奈良時代から平安時代の遺構

①　溝

ＳＤ１２５　第１次調査で確認した東西溝で、今回の調査でもＡ－Ｖｑｒ69地区でその続きを検出した。第１次調査の成果も合わせると長さ12m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土はにぶい黄橙色シルトで、一部に黒色砂質土（黒ボク）が混じる。第１次調査では「古墳時代後期？以降」としていたが、今回の調査で奈良～平安時代の間におさまる土師器小片が出土したため、当該遺構の時期を「奈良～平安時代」と訂正しておく。

ＳＤ２０３　Ａ－Ⅱｐｑ11地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅0.8m、深さ0.1mである。埋土は暗褐色砂質土で、奈良～平安時代の間におさまる土師器小片が出土した。

ＳＤ２０７　Ａ－Ｖｑ83・84地区で検出した南北溝で、長さは不明、幅1.8m、深さ0.2mである。埋土は明黄褐色シルトで、奈良～平安時代の間におさまる土師器杯・甕小片、須恵器小片、製塩土器小片が出土した。

ＳＤ２１０　Ａ－Ⅳｑｒ50地区で検出した東西溝で、長さ1.7m、幅0.3m、深さ0.1mである。埋土は灰褐色または黒色の砂質土で、小石が混じる。奈良～平安時代の間におさまる土師器小片が出土した。

ＳＤ２１８　Ａ－Ⅱｑｒ27地区で検出した東西溝で、長さ1.8m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は上層が暗褐色土または灰褐色砂質土で、下層が黒褐色砂質土である。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕小片が出土した。

ＳＤ２２８　Ａ－Ⅳｑｒ50地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.1～1.5m以上、深さ0.4m以上である。埋土は何層かに分かれるが主としてにぶい褐色系の砂質土で、奈良～平安時代の間におさまる土師器の小片が出土した。

ＳＤ２５２　Ａ－Ｖm83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅0.8m以上、深さ0.1mである。遺構検出面では平面上は重複していないが、調査区の断面観察により奈良～平安時代の溝ＳＤ２５６より新しい。埋土は褐灰色砂質土で径10㎝程の礫を含む。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕等の小片が出土した。

ＳＤ２５４　Ａ－Ｖｋ83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.8m以上、幅1.0～1.5m、深さ0.5mである。切り合いにより平安時代の溝ＳＤ２５５より古い。埋土は黄褐色系のシルトまたは灰色粗砂である。奈良～平安時代の間におさまる土師器、須恵器の小片が出土した。

ＳＤ２５６　Ａ－Ｖm83・84地区で検出した南北溝で、長さ1.7m以上、幅0.9m、深さ0.4mである。遺構検出面では、平面上は重複していないが、断面観察により奈良～平安時代の溝ＳＤ２５２より古い。埋土は三層に分かれ、上から順に灰白色砂質土、橙色砂質土、灰褐色粗砂である。奈良～平安時代の間におさまる土師器、須恵器甕小片が出土した。

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長　さ	幅	深　さ	時　代	主　な　出　土　遺　物	備　　考
ＳＤ30	SD32･34･35	A－Ⅱ下面	ｒ20～29	45m以上	3m前後	1.5m	古墳前半	縄文土器（44）、土師器高杯･壺（45）	第１次調査で検出、ＳＨ212より古
ＳＤ41	——	A－Ⅲ	ｑｒ35	12m以上	0.4m	0.1m	不明	なし	第１次調査で検出、ＳＤ222より新
ＳＨ78	——	A－Ⅳ	ｑｒ46･47	4.8m以上	3.2m	0.2m	不明	なし	第１次調査で検出
ＳD88･89	ＳＤ26	A－Ⅳ	ｑｒ55	21m以上	0.4～1.6m	0.4～0.6m	古墳～奈良	土師器皿（79）･甕（80）	２条の溝　第１次調査で検出
ＳＤ90	——	A－Ⅳ	ｑｒ55～56	21m以上	2.0m	0.3m	奈良	なし	第１次調査で検出
ＳＤ92	ＳＤ27	A－Ⅳ	ｑｒ56	18m以上	0.9m以上	0.3m	不明	なし	現地調査時番号重複、第１次調査で検出
ＳＤ95	ＳＤ９	A－Ⅳ	ｑｒ57	12m以上	0.7m	0.2m	平安末～鎌倉初頭	土師器小片、山茶椀	第１次調査で検出、ＳＤ97より新
ＳＤ97	ＳＤ62	A－Ⅳ	ｑｒ56･57	不明	不明	不明	古墳前半	土師器甕等小片	第１次調査で検出、ＳＤ95より古
ＳＤ125	ＳＤ５	A－Ⅴ	ｑｒ69	1.8m以上	0.6m	0.2m	奈良～平安	土師器小片	第１次調査で検出
ＳＤ201	ＳＤ１	A－Ⅱ	ｏｐ1	４m以上	1.5m	0.4～0.6m	奈良（平安～鎌倉）	縄文土器（63）、土師器皿･杯（64）･甕（65～68）、甑（69）、須恵器小片、山茶椀（70･72･73）、小椀（71）、鉢（74）	２条の溝か？
ＳＤ202	ＳＤ２	A－Ⅱ	ｐ2･3	1.2m以上	2.2m	0.3m	平安末～鎌倉	土師器甕、須恵器小片	ＳＤ229より新
ＳＤ203	ＳＤ３	A－Ⅱ	ｐｑ11	1.2m以上	0.8m	0.1m	奈良～平安	土師器小片	
ＳＨ204	ＳＫ４	A－Ⅱ	ｑｒ17	1.5m以上	2.8m	0.1m	奈良	なし	ＳＤ217より新
*205	欠　番								
ＳＤ206	ＳＤ６	A－Ⅴ	ｑ58～66	32m以上	不明	0.1～0.3m	古墳前半	土師器高杯（３･４）･甕（５～７）、須恵器･山茶椀	ＳＤ222と一連か？
ＳＤ207	ＳＤ７	A－Ⅴ	ｑ83･84	不明	1.8m	0.2m	奈良～平安	土師器甕･杯小片、須恵器小片、製塩土器小片	
ＳＤ208	ＳＤ８	A－Ⅴ	ｒ75～83	33m以上	不明	0.8～1.0m	古墳前半	縄文土器（８･９）、弥生土器壺（10～13）、土師器高杯（17～19）、壺（14～16）、甕（20～25）、ミニチュア（28）、椀（26）、小型丸底	落ち込みか？
＊209	欠　番								
ＳＤ210	ＳＤ10	A－Ⅳ	ｑｒ50	1.7m以上	0.3m	0.1m	奈良～平安	土師器小片	
ＳＫ211	ＳＫ11	A－Ⅳ	ｒ47･48	1.0m以上	0.3m	0.1m	古墳	土師器小片	
ＳＨ212	ＳＫ12	A－Ⅱ	ｑｒ24	1.6m以上	2.9m	0.2m	奈良	土師器皿（49）･甕（50）･甑、須恵器杯片	竈、ＳＤ30より新
ＳＫ213	ＳＫ13	A－Ⅱ	ｒ20	0.6m以上	1.1m	0.2m	不明	なし	
ＳＨ214	ＳＫ14	A－Ⅱ	ｑｒ19･20	1.2m以上	3.2m	0.1m	奈良	土師器杯（51）･皿（52～54）･甕（55～60）、須恵器杯小片	竈、排水溝
ＳＤ215	ＳＫ15	A－Ⅱ	ｑ15	1.2m以上	0.6m	0.2m	奈良	土師器杯類小片･甕、製塩土器小片	
ＳＤ216	ＳＤ16	A－Ⅰ	ｏ1	2.0m以上	2.5m	0.2m	奈良	土師器甕（77）	
ＳＤ217	ＳＤ17	A－Ⅱ	ｑｒ16～19	13m以上	0.4m	0.1m	奈良	土師器小片	ＳＨ204より古
ＳＤ218	ＳＤ18	A－Ⅱ	ｑｒ27	1.8m以上	0.6m	0.1m	奈良～平安	土師器甕小片	
ＳＤ219	ＳＤ19	A－Ⅱ	ｑｒ27･28	4.5m以上	0.3～0.6m	0.3m	奈良	土師器甕･皿、須恵器小片	
ＳＤ220	ＳＤ20	A－Ⅱ	ｐ7	2m以上	1.2m以上	0.1m	奈良	土師器高杯･甕、須恵器小片、土錘（78）	ＳＤ221より古
ＳＤ221	ＳＤ21	A－Ⅱ	ｐ6･7	2m以上	1.2m	0.2～0.5m	奈良	土師器皿･甕、須恵器小片	ＳＤ220より新
ＳＤ222	ＳＤ22	A－Ⅲ･Ⅳ	ｑｒ32～57	不明	不明	0.3m	古墳前半	縄文土器（29～32）、弥生土器壺（33･34）、甕（35）、土師器高杯（36～38）･壺（41）･甕（39･40）、木製品	ＳＤ206と一連か？
ＳＤ223	ＳＤ23	A－Ⅱ	ｑ13～14	4.5m以上	0.4～1.0m	0.05m	奈良	土師器皿	
ＳＤ224	ＳＤ24	A－Ⅳ	ｑｒ44･45	1.7m以上	1.0～1.6m	0.1m	不明	土師器小片	
ＳＤ225	ＳＤ25	A－Ⅳ	ｒ45･46	1.8m以上	2.2m	0.1～0.2m	奈良	土師器甕･杯類小片	
＊226	欠　番								
ＳＤ227	ＳＤ27	A－Ⅲ	ｑ33･34	3.8m以上	0.5m以上	0.3m	奈良	土師器椀･甕	現地調査時番号重複
ＳＤ228	ＳＤ28	A－Ⅳ	ｑｒ50	1.5m以上	1.1～1.5m	0.4m	奈良～平安	土師器小片	
ＳＤ229	ＳＤ29	A－Ⅰ･Ⅱ下面	ｐ1～5	20m以上	３m前後	1.6m	平安末	土師器杯（94）･甕（95）	ＳＤ202より古
ＳＫ230	ＳＫ30	A－Ⅴ	ｒ64	0.8m以上	0.5m	0.1m	奈良	土師器甕（92･93）	現地調査時番号重複
ＳＤ231	ＳＤ30	A－Ⅴ	m83･84	2.4m以上	0.7m以上	0.1m	近世以降	陶器擂鉢、鉄釉皿、土師器、須恵器	ＳＤ250より新、現地調査時番号重複
＊232	欠　番								
ＳＤ233	ＳＤ33	A－Ⅱ下面	ｐ6	0.9m以上	1.0m	0.5m	古墳	土師器、須恵器小片	ＳＤ236より新
＊234	欠　番								
＊235	欠　番								
ＳＤ236	ＳＤ36	A－Ⅱ下面	ｐ6	1.8m以上	2.3m	0.5m以上	古墳？	土師器小片	ＳＤ233より古
ＳＤ237	ＳＤ37	A－Ⅰ	ａ～m1･2	48m以上	0.8～2.0m	0.2m	現代	近世陶器椀･甕･皿、瓦、銭貨（96）、石硯（97）	ＳＤ239より新
ＳＺ238	ＳＺ38	A－Ⅰ	ｎ1	径1.8m			近世～明治	陶器甕（98）･椀･皿･瓦など	
ＳＤ239	ＳＤ39	A－Ⅰ	ｂ2	0.9m以上	0.6m	0.1m	現代	現代遺物	ＳＤ237より古
ＳＤ240	ＳＤ40	A－Ⅰ下面	ｊ2	1.8m以上	1.0m	0.5m	古墳前半	土師器高杯（46）	
ＳＤ241	ＳＤ41	A－Ⅰ下面	ｋ1	2.0m以上	0.5m	0.2m	不明	土師器小片	

第３表　Ａ地区遺構一覧（１）

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長　さ	幅	深　さ	時　代	主　な　出　土　遺　物	備　考
ＳＤ242	ＳＤ42	A－Ⅰ下面	h1･2	1.4m以上	0.6m	0.2m	奈良	土師器甕小片	
ＳＤ243	ＳＤ43	A－Ⅰ下面	l 1･2	1.5m以上	0.6m	0.1m	不明	土師器小片	
ＳＤ244	ＳＤ44	A－Ⅰ下面	l m1･2	2.5m以上	1.0m	0.1m	奈良	土師器、須恵器小片	
ＳＤ245	ＳＤ45	A－Ⅰ下面	h1	８m以上	0.5m	0.1m	奈良	土師器、須恵器小片（近世陶器混入）	
ＳＤ246	ＳＤ46	A－Ⅰ下面	f 1	3.8m以上	0.5以上	0.1m	中世	土師器皿、山茶椀	
ＳＤ247	ＳＤ47	A－Ⅰ下面	l 1･2	1.5m以上	0.8m	0.2m	平安末	土師器甕、ロクロ土師器、須恵器小片	ＳＤ249より古
ＳＤ248	ＳＤ48	A－Ⅰ下面	k l 1･2	1.8m	0.7m	0.9m	平安末～鎌倉	土師器、須恵器、山茶碗（近世陶器混入）	
ＳＤ249	ＳＤ49	A－Ⅰ下面	l 1･2	1.5m以上	0.6m	0.1m	中世以降	陶器小片	ＳＤ247より新
ＳＤ250	ＳＤ50	A－Ⅴ	m83･84	1.8m以上	1.1m	0.1m	古墳～奈良	土師器甑、須恵器小片	ＳＤ231より古
ＳＤ251	ＳＤ51	A－Ⅴ	k l 83･84	2.0m以上	0.7m	0.2m	奈良	土師器甕等、須恵器甕等小片	ＳＤ253より新
ＳＤ252	ＳＤ52	A－Ⅴ	m83･84	1.8m以上	0.8m	0.1m	奈良～平安	土師器甕等小片	ＳＤ256より新
ＳＤ253	ＳＤ53	A－Ⅴ	l 83･84	3.5m以上	0.5m	0.1m	奈良	土師器甕等、須恵器小片	ＳＤ251より古
ＳＤ254	ＳＤ54	A－Ⅴ	k 83･84	1.8m以上	1.0～1.5m	0.5m	奈良～平安	土師器、須恵器小片	ＳＤ255より古
ＳＤ255	ＳＤ55	A－Ⅴ	j k 84	2.0m以上	1.0m	0.2m	平安前期	土師器甕、灰釉陶器小片	ＳＤ254より新
ＳＤ256	ＳＤ56	A－Ⅴ	m83･84	1.7m以上	0.9m	0.4m	奈良～平安	土師器、須恵器甕小片	ＳＤ252より古
ＳＤ257	ＳＤ57	A－Ⅴ	p ～ r 84	９m以上	1.2m以上	0.1m	奈良	土師器甕･杯類、須恵器甕･杯類、（灰釉陶器、山茶椀（81）混入）、土錘（82･83）	
ＳＤ258	ＳＤ58	A－Ⅰ下面	n 2	1.2m以上	1.1m	0.3m	奈良	土師器甕、（陶器混入）	
ＳＤ259	ＳＤ59	A－Ⅴ	o 83･84	1.9m以上	0.7～1.2m	0.4m	奈良	土師器皿･甕、須恵器杯･甕	
ＳＤ260	ＳＤ60	A－Ⅴ	o 83･84	1.9m以上	0.9m	0.2m	奈良	土師器椀（84･85）･杯･皿（86～90）･甕、須恵器甕等小片	
ＳＤ261	ＳＤ61	A－Ⅴ	o p 84	６m以上	0.7～1.2m	0.1m	奈良	土師器椀･高杯･甕、須恵器甕等小片	
＊ 262	欠　番								
ＳＫ263	ＳＫ63	A-Ⅳ下面	q 44	1.0m以上	1.0m	0.2m	奈良	土師器椀･甕小片	
ＳＤ264	ＳＤ64	A－Ⅱ	q r 29	1.5m以上	1.0m	0.4m	奈良～平安	土師器甕等、須恵器甕等小片	ＳＤ265より古
ＳＤ265	ＳＤ65	A－Ⅱ	q r 29	1.9m以上	0.2m以上	0.1m	平安末～鎌倉	土師器、山茶碗小片	ＳＤ264･269より新
＊ 266	欠　番								
ＳＤ267	ＳＤ67	A－Ⅱ	q r 30	2.0m以上	0.3m	0.1m	奈良～平安	土師器、須恵器小片	
＊ 268	欠　番								
ＳＤ269	ＳＤ69	A－Ⅱ	q r 29	2.0m以上	0.7m	0.2m	不明	土師器小片	ＳＤ265より古
ＳD270	ＳＤ70	A－Ⅴ下面	p q 83･84	不明	7m	0.7m以上	奈良	土師器椀･杯･高杯･甕、須恵器杯･甕小片	
ＳＤ271	ＳＤ71	A－Ⅴ	q r 59	2.0m以上	1.1m以上	0.3m	古墳前半	土師器壺･甕（47･48）･高杯等小片	ＳＤ272より古
ＳＤ272	ＳＤ72	A－Ⅴ	q r 59	3.0m以上	1.5m以上	0.1m	奈良～平安	土師器甕小片	ＳＤ271より新
ＳＫ273	ＳＫ73	A－Ⅴ	r 63	1.0m	0.5m	0.5m	古墳	土師器甕	
ＳＤ274	ＳＤ74	A－Ⅴ下面	n o 83･84	2.0m以上	7.3m	0.8m	奈良	土師器甕･甑、須恵器甕小片	
ＳＤ275	ＳＤ75	A－Ⅴ下面	q r 60～62	2.5m以上	2.5m	0.9m	古墳前半	土師器小片	
ＳＤ276	ＳＤ76	A－Ⅴ下面	p 83･84	―――	―――	――	奈良	土師器椀（91）、甕、須恵器甕小片	

第４表　Ａ地区遺構一覧（２）

遺構番号	中地区名	柱　穴　ｐ　ｉ　ｔ　名	規　模	柱　間　寸　法	方　位	時　代	出　土　遺　物
ＳＢ277	A-Ⅱ	q 15ｐ1、q 16ｐ1･2･3、q 17ｐ1	３間	1.7m等間	N8°E	奈良	土師器杯･皿（61）･甕
ＳＢ278	A-Ⅴ	r 70ｐ3、r 71ｐ1･2	３間	1.8+2.2+2.0m	N11°E	奈良	土師器甕小片
ＳＢ279	A-Ⅴ	r 72ｐ1･2･3、r 73ｐ2	３間	1.3m等間	N11°E	奈良	土師器杯･甕、須恵器杯蓋（62）等
ＳＢ280	A-Ⅱ	r 22ｐ1･2、r 23ｐ1	３間	1.95m等間	N24°E	奈良	土師器小片
ＳＢ281	A-Ⅴ	r 68ｐ3、r 69ｐ1	２間	1.8m等間	N10°E	奈良	土師器杯等小片
ＳＢ282	A-Ⅴ	r 69ｐ3･5、r 70ｐ1	２間	1.8m等間	N8°E	奈良	土師器小片、須恵器杯
ＳＢ283	A-Ⅴ	r 79ｐ2、r 80ｐ4	３間	1.8m等間	N16°E	奈良	土師器小片

第５表　Ａ地区掘立柱建物一覧

ＳＤ２６４　Ａ－Ⅱｑｒ29地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.0m、深さ0.4mである。南側の法面には中段がみられる。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ２６５より古い。埋土は暗褐色砂質土で、奈良～平安時代におさまる土師器甕等、須恵器小片が出土した。なお、古墳時代の古式土師器も出土した。

ＳＤ２６７　Ａ－Ⅱｑｒ30地区で検出した東西溝で、長さ2.0m以上、幅0.3m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色砂質土に浅黄色粗砂が混じる。奈良時代以降の土師器、須恵器の小片が出土した。

ＳＤ２７２　Ａ－Ⅴｑｒ59地区下面で検出した南北溝で、長さ3.0m以上、幅1.5m、深さ0.1mである。切り合いにより古墳時代前半の溝ＳＤ２７１より新しい。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕小片が出土した。

（6）平安時代の遺構

①　溝

ＳＤ２５５　Ａ－Ⅴｊｋ84地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良～平安時代の溝ＳＤ２５４より新しい。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトに黒色砂質土が混じる。平安時代前期の土師器甕、灰釉陶器小片が出土したが、灰釉陶器は黒笹14号窯式または黒笹90号窯式のものである。

（7）平安時代末期から鎌倉時代の遺構

①　溝

ＳＤ９５　第１次調査で確認された東西溝で、今回の第３次でもその続きをＡ－Ⅳ南端ｑｒ57地区で検出した。切り合いにより古墳時代前半の溝ＳＤ９７より新しい。第１次調査の成果も含めると長さ12m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。埋土は褐色シルトで、平安時代末期～鎌倉時代の土師器小片と山茶椀が出土しているが、山茶椀は藤澤編年[33]の５～６型式である。

ＳＤ２０２　Ａ－Ⅱｐ2・3地区で検出した東西溝で、長さ1.2m以上、幅2.2m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ２２９より新しい。埋土は黒褐色土または粗砂混じり暗褐色砂質土である。奈良～平安時代の間におさまる土師器甕、須恵器小片が出土した。

ＳＤ２２９　Ａ－Ⅰ・Ⅱｐ１～５地区下面で検出した南北溝で、長さ20m以上、幅３m前後、深さ1.6mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ２０２より古い。埋土は何層かに分かれるが、黄褐色系のシルト・砂質土・粗砂である。平安時代の杯（94）・甕（95）および平安時代末期の土師器小片が出土した。

ＳＤ２４７　Ａ－Ⅰｌ１・２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.8m、深さ0.2mである。切り合いにより中世の溝ＳＤ２４９より古い。須恵器の小片および平安時代末期の土師器甕、ロクロ土師器が出土した。

ＳＤ２４８　Ａ－Ⅰｋｌ２地区下面で検出した東西溝で、長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.9mである。須恵器や平安時代～中世の土師器、山茶椀が出土した。近世陶器も出土したが、調査ミスによる混入であろう。

ＳＤ２６５　Ａ－Ⅱｑｒ29地区で検出した東西溝で、長さ1.9m以上、幅0.2m以上、深さ0.1mである。切り合いにより時期不明の溝ＳＤ２６９および奈良～平安時代の溝ＳＤ２６４より新しい。平安時代から中世の土師器、山茶椀が出土した。

（8）中世の遺構

①　溝

ＳＤ２４６　Ａ－Ⅰｆ１地区下面で検出した東西溝で、長さ3.8m以上、幅0.5m以上、深さ0.1mである。埋土は褐色土で、中世の土師器皿、山茶椀が出土した。

ＳＤ２４９　Ａ－Ⅰｌ１・２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ２４７より新しい。埋土は褐色土で、中世以降の陶器小片が出土した。

（9）近世から明治時代の遺構

①　溝

ＳＤ２３１　Ａ－Ⅴｍ83・84地区で検出した南北溝で、古墳～奈良時代の溝ＳＤ２５０上に平面上重

複して検出したもので、ＳＤ２５０よりも新しい。長さ2.4m以上、幅0.7m以上、深さ0.1mである。埋土はにぶい赤褐色砂礫である。近世以降の陶器擂鉢、鉄釉皿が出土した。当該遺構よりも古い時期である土師器や須恵器も出土した。

② 埋め甕土坑

ＳＺ２３８ Ａ－Ｉｎ１地区で検出した埋め甕土坑で、平面形は径1.8mの円形である。陶器甕（98）は常滑製の甕である。埋土からは近世以降の陶器の椀・皿、瓦などが出土した。

(10) 時期不明の遺構

① 竪穴住居

ＳＨ７８ 第１次調査で竪穴住居として確認されたものであるが、今回の調査でもＡ－Ⅳｑｒ46・47地区でその続きを検出した。第１次調査の成果も含めると平面形は東西4.8m以上×南北3.2m、深さは0.2mであるが、北側のラインが若干不定形である。方位は30°程東に振れる。第１次調査で時期不明としているが、今回の調査でも出土遺物がなく、時期を特定することができなかった。

② 溝

ＳＤ４１ 第１次調査で確認された東西溝であるが、今回の調査でもＡ－Ⅲｑｒ35地区でその続きを検出した。第１次調査の成果も含めると長さ12m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。第１次調査では時期不明としたが、今回の調査でも出土遺物がないためやはり明確な時期は不明であるが、切り合いにより古墳時代前半の溝ＳＤ２２２より新しいことが確認された。

ＳＤ９２ 第１次調査で確認された溝で、今回の調査でもＡ－Ⅳｑｒ56地区で検出した。第１次調査の成果も含めると長さ18m以上、幅0.9m、深さ0.3mである。時期は第１次調査で不明としているが、第３次調査でも出土遺物はなく、やはり時期不明である。

ＳＤ２２４ Ａ－Ⅳｑｒ44・45地区で検出した東西溝である。長さ1.7m以上、幅1.0～1.6m、深さ0.1mである。土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。

ＳＤ２４１ Ａ－Ｉｋ１地区下面で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。

ＳＤ２４３ Ａ－Ｉｌ１・２地区下面で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は明褐色土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。

ＳＤ２６９ Ａ－Ⅱｑｒ29地区で検出した東西溝で、長さ2.0m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色砂質土で、土師器の小片が出土したが、出土遺物からの時期決定は困難である。切り合いによりＳＤ２６５より古いことから、鎌倉時代以前の溝としか判断できない。

③ 土坑

ＳＫ２１３ Ａ－Ⅱｒ20地区で検出した土坑で、平面形は0.6m以上×1.1mで、深さ0.2mである。埋土は灰褐色砂質土であるが、出土遺物はない。

(11) 現代の攪乱

① 溝

ＳＤ２３７ Ａ－Ｉ地区ほぼ全面にわたる東西溝で、長さ48m以上、幅0.8～2.0m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土で、近世の陶器椀・皿・甕、瓦、銭貨（96）、石硯（97）が出土したが、切り合いによりＳＤ２３９よりも新しいため現代の攪乱と判断した。

ＳＤ２３９ Ａ－Ｉｂ２地区で検出した南北溝で、長さ0.9m以上、幅0.6m、深さ0.1mで、埋土は暗灰色土である。切り合いによりＳＤ２３７よりも古いが、埋土から現代の遺物が出土したことにより攪乱と判断した。

４ 遺物

Ａ地区からの出土遺物は、古い物は縄文時代、新しい物は近世で、このうち図示し得たものは118点である。出土量としては、古墳時代、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代初頭の三時期がほとんどである。

個々の出土遺物の法量や技法の特徴等については、遺物観察表に記載したので参照されたい。遺構からの出土遺物は、遺構の項で種類等を記しているので、ここでは図示し得た遺物のみ、各遺構別に特徴的な事項や補足説明を中心に概述する。

（1）主要遺構出土の遺物

① 古墳時代前半の遺構からの出土遺物

ＳＤ２０６出土遺物

土師器高杯（３）は、杯部と脚部上半部が残存するものであるが、杯部は内湾し、脚部は外反する。内外面ともミガキを施す。

土師器高杯（４）は脚部のみの破片であるが、脚は外反し、ハケ調整を施すものである。

土師器甕（５・６）はS字状口縁甕である。（５）は口縁部の破片、（６）は上半部の残存で、胴部が大きく膨らむ。胴部外面にハケメを施し、内面はオサエ及びナデである。（６）の外面には煤が付着する。

土師器甕（７）は口頸部が「く」の字状を呈するもので、口縁端部は外面に面をもつ。頸部に貼り付け突帯をもつものである。胴部外面は縦方向のハケメ、口頸部内面は横方向のハケメ、胴部内面は斜め方向のハケメである。

ＳＤ２０８出土遺物

縄文土器（８・９）はともに口縁部の破片である。（９）は、口縁端部が刻みで、外面には条痕がみられる。

弥生土器壷（10〜13）は、いずれも小片である。(10)は、口縁部が外に大きく広く開くもので、頸部に直線文を施す。(11）は受口口縁壷である。(12）は広口壷で、口縁端部に面を持ち、刻目文を施す。口縁端部内面には浮文がある。内外面ともハケメ調整である。(13）は肩部の破片で、直線文と波状文を交互に施す。内面はナデである。

土師器壷（14〜16）のうち（14）は口縁部の小片である。(15）は径５㎝程の底部で内面には工具によるナデの痕跡がみられる。壺（16）は、口径12㎝、胴部最大径17㎝程の壺である。胴部は球状で、口縁部は外反し、端部は上下に肥厚し外面に面をもつ。外面端部は羽状刺突で、その上に四方向に棒状浮文を３個ずつ貼り付ける。頸部外面はハケメ、胴部は上から、直線文、波状文、刺突文、刻み文の順に文様を施す。施文の単位は７本である。内面は口縁端部が羽状刺突で、胴部にはオサエとナデがみられる。外面胴部中央に線刻による文様がみられる。

土師器高杯（17〜19）はいずれも破片である。(17)は杯部で、内外面ともミガキである。(18）は脚部片であるが、裾部が大きく開く。円孔透かしがあり、外面はミガキ、内面はナデである。(19）は直線的な脚であるが、裾部で屈曲して大きく開く。

土師器甕（20）は、ＳＤ２０６出土の土師器甕（７）を小さくしたような形状であるが、口縁端部は丸く、胴部外面は縦方向のケズリである。

土師器甕（21〜25）は、Ｓ字状口縁甕の破片であるが、胴部は内外面ともハケメである。(22・23）の口縁部外面にはキザミがみられる。

土師器椀（26）は、口径12㎝、器高３㎝である。口縁部ヨコナデで、体部外面にはオサエがみられる。

土師器甕（27）は、口縁部の破片のため口径は不明であるが、長胴甕になるものである。外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。

ミニチュア土器（28）は、口径4.3㎝、器高2.1㎝のもので、器壁は底部で0.6㎝、体部で0.4㎝と厚い。いわゆる手捏ね土器で外面にはオサエの痕がみられる。

ＳＤ２２２出土遺物

縄文土器（29〜32）は、いずれも小片で、(29）は口縁部、(30〜32）は胴部である。(29）は条痕、(31)は貼り付け隆帯である。(32）は後期の浅鉢で、外面がナデ、内面がミガキである。

弥生土器壷（33・34）はともに胴部の破片であるが、(33）は頸部から肩部にかけて櫛描直線文、胴部は直線文と波状文であり、(34）は波状文を施す。

弥生土器甕（35）は、口縁部は短く外反し、端部は面を持ち上方につまみ上げる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメである。

弥生土器高杯（36〜38）はいずれも脚部で、外に開くものである。(38）は径14㎝と特に大きく開く。３点とも三方向に円孔透かしを穿つ。(36）は外面ミガキ、内面ハケメである。(37）の外面は直線文、ハケメである。(38）の外面は直線文、ミガキ、内面はハケメである。

土師器壺（41）は口径23cm程の大きさのもので、口縁が２段になる。

土師器甕（39・40）はともに台部の破片である。台部下端は内側に折り曲げる。外面はハケメである。

土師器椀（42）は、口径15cm程で、口縁部ヨコナデ、体部外面ミガキである。

土師器甕（43）は、口径15cm程で、胴部最大径も口径とほぼ同じである。

ＳＤ３０出土遺物

縄文土器（44）は、胴部の破片である。外面は二枚貝条痕のちミガキと思われる。

土師器壺（45）は、口縁部の破片である。内外面ともミガキで、外面には波状文を施す。

ＳＤ２４０出土遺物

高杯（46）は、脚部のみの残存であるが脚径13cm程で、三方向に透かし孔がみられる。脚部上半は三段の櫛描直線文、下半はハケ後ミガキである。

ＳＤ２７１出土遺物

土師器甕（47・48）はともに破片であるが、（47）は口縁部で、体部外面はハケメである。（48）は底部及び台部で、台部端部は内側に折り曲げる。

②奈良時代の遺構からの出土遺物

ＳＨ２１２出土遺物

土師器皿（49）は、口径16cm、器高2.3cmである。器壁が摩耗しているため調整は不明である。

土師器甕（50）は平底の甕である。外面下半はハケメ後ケズリであり、上半はハケメ後ナデである。内面は下半がケズリ、上半はナデである。底部に炭化物が付着する。

ＳＨ２１４出土遺物

土師器杯（51）は、口径は15cm程で、器高４cmである。口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。

土師器皿（52～54）は口径22cm程のもので、いずれも底部はヘラケズリである。（54）の内面には螺旋暗文がみられる。

土師器甕（55～58）は、口縁部の破片であるが、口径が23～30cmと大型であり長胴甕になるものである。口縁は「く」の字状である。口縁部ヨコナデ、胴部外面は斜め方向のハケメ、内面は（55・57）が横方向のハケメ、（56・58）はナデである。

土師器甕（59・60）は胴部が球状になるもので、（60）は胴部最大径が28cm程である。（59・60）とも胴部は内外面ともハケメである。

ＳＢ２７７出土遺物

土師器皿（61）は口径18cm程で、口縁部が外反する。口縁部はヨコナデで、底部外面はケズリとオサエがみられる。

ＳＢ２７９出土遺物

須恵器杯蓋（62）は径15cm程で、かえりがつかないものである。つまみ部分は欠損しているため、その形態は不明である。

ＳＤ２０１出土遺物

縄文土器（63）は、口縁部の小片で、外面は二枚貝背の押圧である。

土師器杯（64）は平安時代前期の杯である。小片のため口径は不明であるが、口縁部を外反させるもので、底部はナデである。

土師器甕（65・66）は口径16cmの中型の甕である。胴部外面は縦方向のハケメである。（65）はハケメが粗く、平安時代のものである。

土師器甕（67・68）は口径20～25cmの長胴甕である。口頸部は「く」の字状であり、口縁端部は外に面を持ち、上方にやや肥厚する。胴部外面はハケメであるが、頸部は斜め方向、胴部中央は縦方向、底部は横方向である。胴部内面は上半が横方向のハケメ、下半から底部がケズリである。

土師器甑（69）は上半部のみ残存する。口径は24cm程で、端部は上方に面を持つ。胴部上方には把手がつく。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。

山茶椀（70・72・73）はいずれも小片である。高台径６～７cm程で、高台は低い。底部外面には糸切り痕がみられる。成形はロクロナデである。（70）の口縁端部は若干外反する。藤澤編年の５型式、12世紀後葉～13世紀初頭のものであろう。

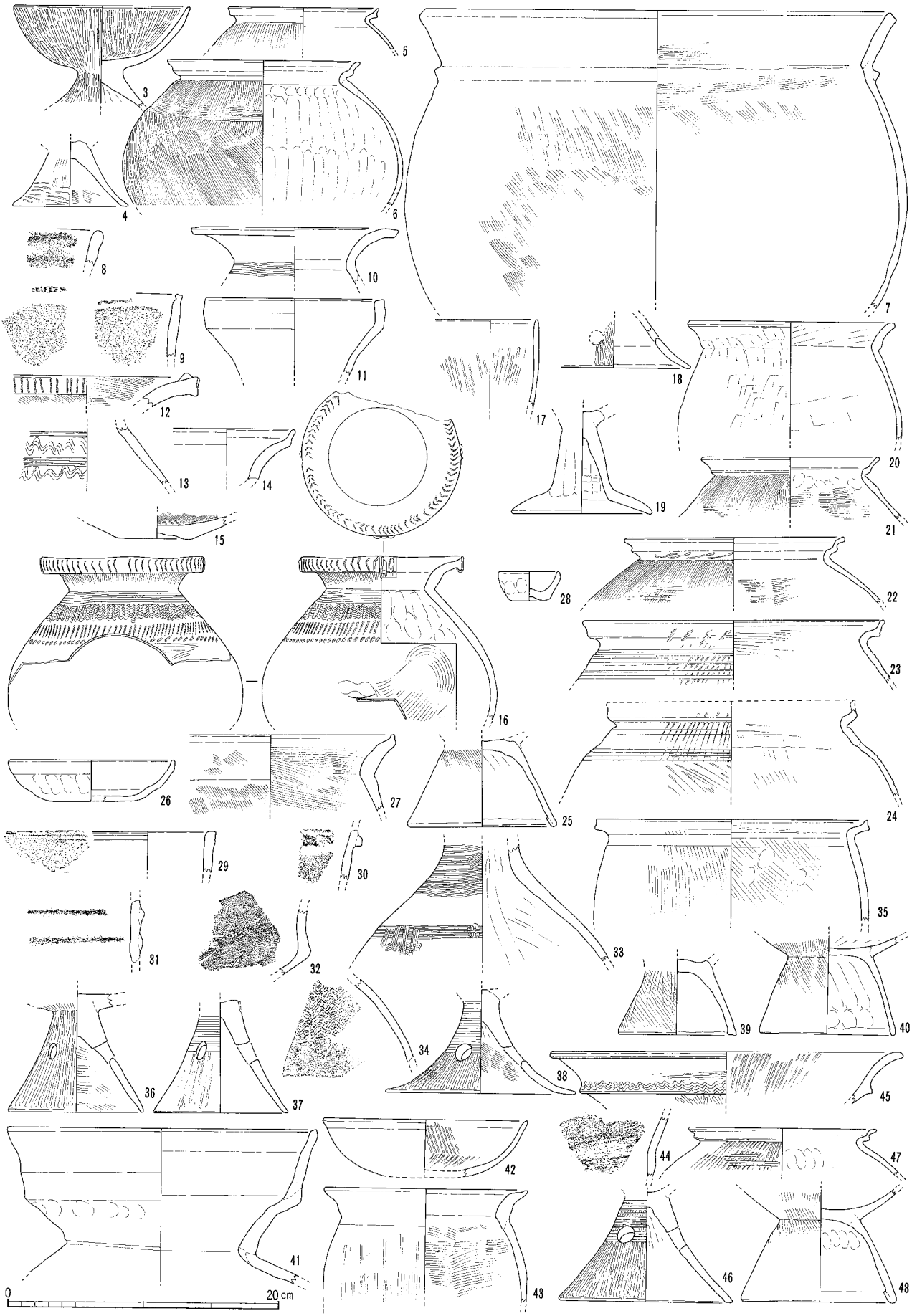
山茶椀系小椀（71）は高台径５cm程で、高台の断面は三角形である。ロクロ成形である。

陶器鉢（74）は山茶椀質の鉢で高台部付近の破片である。底部には糸切り痕がみられる。ロクロ成形で、片口になるものであろう。

土錘（75）細長い形のもので、長さ4.4cm、最大幅

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
3	017-03	ＳＤ206	土師器高杯	13.0			ミガキ	やや粗、砂粒含み	並	灰褐	杯部1/6	
4	017-02	ＳＤ206	土師器高杯			8.5	ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙	脚部1/2	
5	018-01	ＳＤ206	土師器甕	11.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	並	にぶい黄橙	口縁部1/6	
6	017-01	ＳＤ206	土師器甕	14.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	並	にぶい黄橙	上半部1/6	煤付着
7	016-01	ＳＤ206	土師器甕	34.0			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	並	灰白	口縁部1/3	
8	040-08	ＳＤ208	縄文土器				ヨコナデ	やや粗	並	にぶい黄橙	口縁部小片	
9	014-08	ＳＤ208	縄文土器				キザミ、条痕	密、砂粒含み	並	黄橙	口縁部小片	
10	013-04	ＳＤ208	弥生土器壺	15.2			ヨコナデ、直線文	密、砂粒含み	並	橙	口縁部1/4	
11	014-05	ＳＤ208	弥生土器壺	13.0			ヨコナデ	やや密、砂粒含み	良	橙	口縁部1/6	
12	015-03	ＳＤ208	弥生土器壺				キザミ、ハケメ、浮文	密、砂粒含み	良	橙	口縁部小片	
13	015-04	ＳＤ208	弥生土器壺				直線文、波状文	密、砂粒含み	並	橙	体部小片	
14	014-07	ＳＤ208	土師器壷				ナデ	密、砂粒含み	良	橙	口縁部小片	
15	014-02	ＳＤ208	土師器壺			5.1	ナデ	やや密、砂粒含み	良	橙	底部	
16	018-02	ＳＤ208	土師器壺	12.0			羽状刺突、キザミ、ハケメ、直線文、波状文	やや粗	並	橙	上半部	線刻
17	013-02	ＳＤ208	土師器高杯				ミガキ	密、砂粒含み	並	橙	小片	
18	014-04	ＳＤ208	土師器高杯				ヨコナデ、ミガキ、透かし	密、砂粒含み	良	橙	脚部小片	
19	013-03	ＳＤ208	土師器高杯			10.2	ナデ	密、砂粒含み	並	橙	脚部2/3	
20	014-03	ＳＤ208	土師器甕	15.0			ヨコナデ、ケズリ	密、砂粒含み	良	橙	口縁部1/4	
21	013-06	ＳＤ208	土師器甕	13.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	にぶい黄橙	口縁部1/12	
22	015-02	ＳＤ208	土師器甕	16.0			ヨコナデ、ハケメ、キザミ	密、砂粒含み	並	にぶい黄橙	口頸部1/4	
23	013-07	ＳＤ208	土師器甕	22.0			ヨコナデ、ハケメ、キザミ	やや密、砂粒含み	並	暗褐	口縁部1/10	
24	015-01	ＳＤ208	土師器甕				ヨコナデ、ハケメ、直線文	やや密、砂粒含み	良	にぶい黄橙	口縁部～体部	
25	014-06	ＳＤ208	土師器甕			10.7	ナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	橙	台部1/3	
26	014-01	ＳＤ208	土師器椀	12.0	3.0		ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	密、砂粒含み	並	にぶい黄橙	1/3	
27	013-05	ＳＤ208	土師器甕				ヨコナデ、ハケメ	密、砂粒含み	並	浅黄橙	口頸部小片	
28	013-01	ＳＤ208	手捏ね土器	4.3	2.1		ナデ、ユビオサエ	密、砂粒含み	良	黒褐	ほぼ完形	
29	011-05	ＳＤ222	縄文土器				条痕	粗	やや良	淡黄	小片	
30	040-09	ＳＤ222	縄文土器				ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
31	012-03	ＳＤ222	縄文土器				貼りつけ隆帯	粗、砂粒含み	やや良	灰白	体部小片	
32	040-05	ＳＤ222	縄文土器浅鉢				ナデ、ミガキ	やや粗	並	にぶい橙	体部小片	
33	010-01	ＳＤ222	弥生土器壷				直線文、波状文	やや粗	並	浅黄橙	体部小片	
34	012-02	ＳＤ222	弥生土器壷				波状文	やや密	やや良	橙	胴部小片	
35	011-02	ＳＤ222	弥生土器甕	19.7			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや良	灰黄	口頸部小片	
36	010-03	ＳＤ222	土師器高杯			10.0	ハケメ、ミガキ、三方向透かし	やや密	並	橙	脚部	
37	010-02	ＳＤ222	土師器高杯			10.0	直線文、ハケメ、三方向透かし	やや密	並	にぶい黄橙	脚部1/2	
38	012-01	ＳＤ222	土師器高杯			13.8	櫛描直線文、ミガキ、三方向透かし	やや密	やや良	橙	脚部1/3	
39	011-03	ＳＤ222	土師器甕			8.5	ハケメ	やや密	やや良	にぶい黄橙	台部のみ	
40	011-04	ＳＤ222	土師器甕			9.7	ナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや良	にぶい橙	台部のみ	
41	009-01	ＳＤ222	土師器壷	22.8			ヨコナデ	やや密	並	明黄褐	口頸部	
42	012-04	ＳＤ222	土師器椀	14.8			ヨコナデ、ミガキ	やや密	やや良	橙	1/8	
43	009-02	ＳＤ222	土師器甕	15.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	灰褐	上半1/4	
44	040-06	ＳＤ30	縄文土器				突帯、二枚貝条痕、ミガキ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
45	007-01	ＳＤ30	土師器壷	25.7			ミガキ、波状文	密、砂粒含み	並	にぶい黄橙	口縁部1/8	
46	008-01	ＳＤ240	土師器高杯			12.7	櫛描横線、ハケ後ミガキ、透かし孔	やや密、砂粒含み	並	にぶい橙	脚部ほぼ完形	
47	006-05	ＳＤ271	土師器甕	13.7			ヨコナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや良	にぶい黄橙	口頸部1/6	
48	006-06	ＳＤ271	土師器甕			11.1	ナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	やや良	橙	台部1/6	

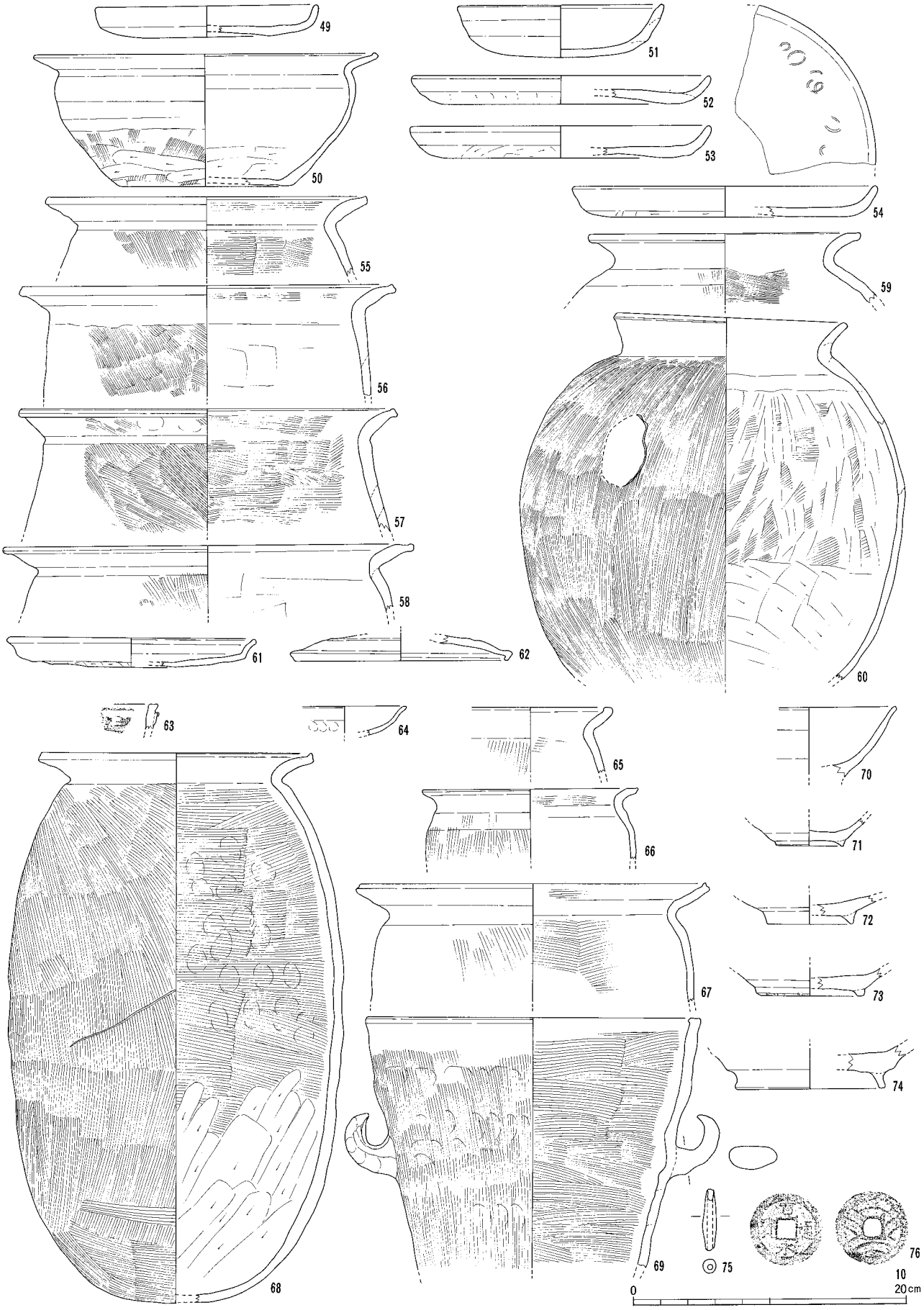
第６表　Ａ地区出土遺物観察表（１）



第15図　Ａ地区出土遺物実測図（１）（1：4）

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
49	001-03	ＳＨ212	土師器皿	16.0	2.3	9.0	ヨコナデ	やや密	良	橙	1/4	炭化物付着
50	001-01	ＳＨ212	土師器甕	24.8	9.6	11.4	ハケメ、ナデ、ケズリ	やや密、砂粒含み	内面不良	浅黄橙	1/3	
51	003-04	ＳＨ214	土師器杯	14.8	3.9		ヨコナデ、未調整	粗、砂粒含み	不良	にぶい黄橙	3/4	
52	003-03	ＳＨ214	土師器皿	21.6	2.1		ヨコナデ、ケズリ	やや粗、砂粒含み	やや不良	橙	1/8	
53	003-02	ＳＨ214	土師器皿	21.8	3.5		ヨコナデ、ケズリ	やや粗、砂粒含み	良	橙	1/6	
54	003-05	ＳＨ214	土師器皿	22.0	2.0		ヨコナデ、ケズリ、暗文	やや密、砂粒含み	良	にぶい橙	1/4	
55	003-01	ＳＨ214	土師器甕	23.2			ヨコナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含み	並	橙	口頸部1/4	
56	002-03	ＳＨ214	土師器甕	27.2			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	にぶい黄橙	口頸部1/6	
57	002-01	ＳＨ214	土師器甕	27.3			ヨコナデ、ハケメ	やや粗	不良	黄橙	口頸部1/4	
58	002-04	ＳＨ214	土師器甕	29.7			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	やや不良	にぶい黄橙	口頸部1/8	
59	002-02	ＳＨ214	土師器甕	21.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや不良	にぶい橙	口頸部1/6	
60	004-01	ＳＨ214	土師器甕	16.5			ヨコナデ、ハケメ	粗、砂粒含み	不良	にぶい黄橙	上半3/4	体部に穿孔
61	001-04	ＳＢ277	土師器皿	18.0	2.1	6.4	ヨコナデ、ケズリ	やや密	良	橙	1/6	
62	001-05	ＳＢ279	須恵器蓋	15.4			ロクロナデ	密、砂粒含	良	灰	1/6	
63	040-07	ＳＤ201	縄文土器				二枚貝背の押圧	やや密	並	浅黄橙	口縁部小片	
64	019-03	ＳＤ201	土師器杯				ヨコナデ、オサエ	やや密	やや良	橙	体部小片	
65	019-04	ＳＤ201	土師器甕				ヨコナデ、ハケメ	やや粗	やや良	にぶい黄橙	口頸部小片	
66	019-02	ＳＤ201	土師器甕	16.0			ヨコナデ、ハケメ	やや粗	やや良	にぶい黄橙	口縁部1/3	
67	020-01	ＳＤ201	土師器甕	25.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや良	にぶい橙	上半部小片	
68	021-01	ＳＤ201	土師器甕	20.0	40.0		ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密、砂粒含み	良	にぶい橙	1/2	
69	019-01	ＳＤ201	土師器甑	24.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密	良	にぶい橙	上半部1/3	
70	020-05	ＳＤ201	山茶椀				ロクロナデ	密	良	灰白	体部小片	
71	020-04	ＳＤ201	小椀			5.0	ロクロナデ	密	良	灰白	底部	
72	020-07	ＳＤ201	山茶椀			6.0	ロクロナデ	密	良	灰白	底部1/4	
73	020-08	ＳＤ201	山茶椀			7.0	ロクロナデ	密	良	灰白	底部1/4	
74	020-06	ＳＤ201	陶器鉢			11.0	ロクロナデ	密	良	灰白	底部片	
75	020-02	ＳＤ201	土錐	長4.4	幅1.0	重量2.8g	ナデ	密	良	にぶい橙	ほぼ完形	
76	020-03	ＳＤ201	鋳貨	径2.8			寛永通宝				完形	裏面波状文

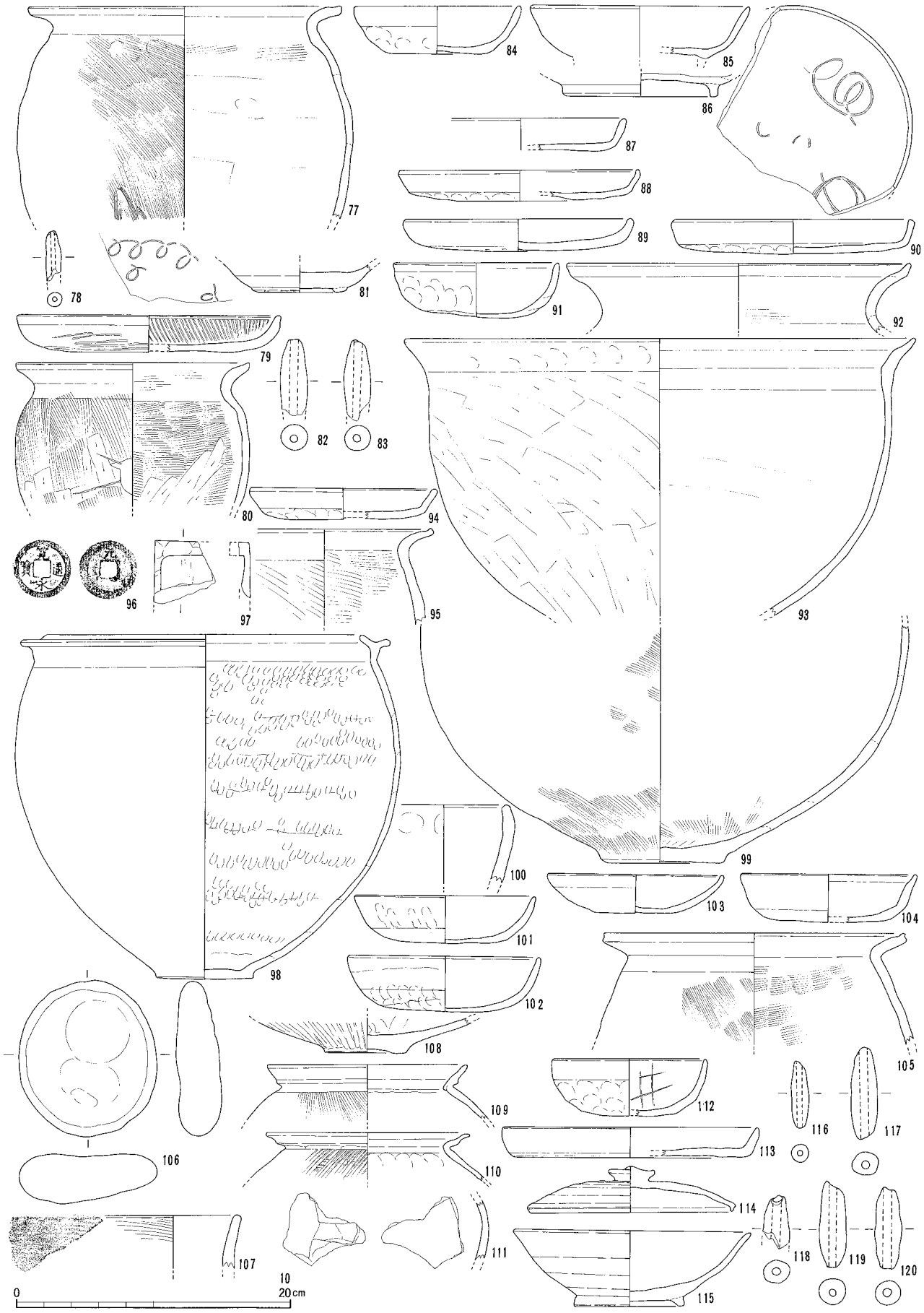
第７表　Ａ地区出土遺物観察表（２）



第16図　A地区出土遺物実測図（２）（1：4、ただし76は1：2）

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
77	011-01	ＳＤ216	土師器甕	22.7			ヨコナデ、ハケメ	やや密	やや良	にぶい黄橙	上半1/5	
78	012-05	ＳＤ220	土錐	残長3.6	幅1.1	重量3.8g		やや密	やや良	にぶい橙	2/3	
79	007-04	ＳＤ88･89	土師器皿	19.0	2.7		ヨコナデ、ミガキ、暗文	密、砂粒含み	並	橙	1/4	
80	007-02	ＳＤ88･89	土師器甕	16.8			ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密、砂粒含み	並	灰黄褐	口頸体部1/2	煤付着
81	008-02	ＳＤ257	山茶椀			6.0	ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台	やや密、砂粒含み	良	灰白	底部のみ	
82	008-03	ＳＤ257	土錐	残長5.5	幅2.0	重量18.2g		やや密、砂粒含み	並	にぶい橙	ほぼ完形	
83	008-04	ＳＤ257	土錐	残長5.9	幅1.9	重量16.5g		やや密、砂粒含み	並	灰黄褐	ほぼ完形	
84	006-03	ＳＤ260	土師器椀	12.0	3.5		ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	やや良	淡橙	3/8	
85	006-02	ＳＤ260	土師器椀	15.9			ヨコナデ、ナデ	やや密	やや良	橙	1/6	
86	006-01	ＳＤ260	土師器皿			10.4	ナデ	やや密	やや良	橙	底部1/4	
87	005-04	ＳＤ260	土師器皿		2.4		ヨコナデ	やや密	やや良	浅黄橙	小片	
88	005-03	ＳＤ260	土師器皿	17.3	2.2		ヨコナデ、オサエ	やや密	やや良	橙	小片	
89	005-02	ＳＤ260	土師器皿	16.4	2.4		ヨコナデ、ケズリ	やや密	やや良	橙	1/4	
90	005-01	ＳＤ260	土師器皿	17.2	2.5		ヨコナデ、ケズリ、暗文	密	良	橙	1/3	
91	006-04	ＳＤ276	土師器椀	12.0	4.0		ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密	やや良	浅黄橙	2/3	
92	001-02	ＳＫ230	土師器甕	25.0			口縁部ヨコナデ、ハケメ	やや粗	不良	灰白	口縁1/4	
93	033-01	ＳＫ230	土師器甕	37.1			口縁部ヨコナデ、オサエ、ケズリ	やや密	やや良	にぶい黄橙	1/4	
94	007-03	ＳＤ229	土師器杯	13.5	2.3		ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	並	橙	1/6	
95	007-05	ＳＤ229	土師器甕				ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	にぶい橙	口頸部小片	煤付着
96	008-06	ＳＤ237	銭貨	径2.1			寛永通宝					裏面「元」
97	008-05	ＳＤ237	石硯								小片	
98	039-01	ＳＺ238	陶器甕	91.0	98.2	27.9	タタキ、ナデ	やや密、砂粒含み	良、軟質	灰褐	1/2	
99	038-01	ｒ62pit1	土師器壺			8.2	ハケ後ナデ	粗、砂粒含み	良	灰白	下半1/3	
100	037-06	ｒ17pit3	製塩土器				ナデ	粗、砂粒含み	良	橙	小片	
101	037-03	ｒ20pit2	土師器椀	13.2	3.4		ナデ、ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	良	灰白	1/2	
102	037-02	ｒ20pit2	土師器椀	13.9	4.0		ナデ、ヨコナデ、オサエ	密、砂粒含み	良	浅黄橙	ほぼ完形	
103	037-04	ｇ15pit3	土師器杯	12.6	2.8		ナデ、ヨコナデ	密、砂粒含み	良	橙	1/4	
104	037-05	ｇ13pit2	土師器杯	12.8	3.5		ナデ、ヨコナデ	やや密、砂粒含み	良	橙	1/4	
105	037-01	ｏ83pit1	土師器甕	22.0			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	良	浅黄橙	口縁1/4	
106	036-01	Ⅳ地区廃土	石器	縦11.4	横10.1	厚3．6						重さ546ｇ
107	036-03	ｒ25包含層	縄文土器				条痕	やや粗	良	にぶい黄橙	口縁部小片	
108	036-02	ｒ77包含層	土師器甕			6	ミガキ、ナデ	やや密	やや良	橙	底部	
109	040-01	ｒ63包含層	土師器甕	14.6			ヨコナデ、ハケメ	やや密	良	灰白	口縁1/6	
110	040-02	ｎ84包含層	土師器甕	14.8			ヨコナデ、ハケメ	やや密、砂粒含み	並	灰黄褐	口縁1/6	
111	040-04	ｒ63包含層	土師器鉢				ナデ	やや密、砂粒含み	良	灰黄褐	小片	内面に水銀朱
112	035-02	ｋ32包含層	土師器椀	11.0	4.1		ナデ、ヨコナデ、オサエ	やや密	やや良	にぶい橙	2/3	
113	035-04	ｏ83包含層	土師器皿	18.5	2.2		ヨコナデ、オサエ、ケズリ	やや密	やや良	橙	1/3	
114	035-03	ｐ４包含層	須恵器蓋	14.7	3.3		ロクロナデ、ロクロケズリ	粗、砂粒含み	やや良	にぶい橙	1/6	ロクロ回転右廻り
115	035-01	ｒ18包含層	山茶椀	17.0	5.5	8.0	ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台	やや密、砂粒含み	良	灰白	底部完、体部小片	
116	035-06	廃土	土錐	長4.9	幅1.3	重量5.7g	ナデ	やや密	やや良	橙	完形	
117	035-08	ｐ84包含層	土錐	長6.7	幅1.9	重量17.3g	ナデ	やや粗	やや良	にぶい黄橙	完形	
118	035-07	ｐ83包含層	土錐	残長3.9	幅1.9	残重量9.1g	ナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙	1/2	
119	035-09	m83･84包含層	土錐	長6.3	幅2.0	重量20.0g	ナデ	やや粗	やや良	にぶい橙	完形	
120	035-05	ｇ84包含層	土錐	長6.0	幅1.9	重量16.4g	ナデ	やや密	やや良	黄灰	完形	

第８表　Ａ地区出土遺物観察表（３）



第17図　A地区出土遺物実測図（3）（1：4、ただし96は1：2、98は1：8）

1.0㎝、重量2.8ｇである。

銭貨（76）は江戸時代の寛永通宝で、裏面は波状文である。

ＳＤ２１６出土遺物

土師器甕（77）は、奈良時代のもので、口径23㎝程、胴部最大径25㎝程と胴部が若干大きくなる長胴甕である。口縁部はヨコナデ、胴部外面は斜めまたは縦方向のハケメである。内面はナデであるが、横方向のハケメが残存する。

ＳＤ２２０出土遺物

土錘（78）は細長い形で、最大幅1.1㎝である。

ＳＤ８８・８９出土遺物

土師器皿（79）は口径が19㎝程、器高は2.9㎝である。底部から体部下半はミガキで、内面には放射状暗文と螺旋暗文がみられる。

土師器甕（80）は、口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメで、下半はケズリである。内面は横方向のハケメで、下半はケズリである。外面には煤が付着する。

ＳＤ２５７出土遺物

山茶椀（81）は底部から体部下半の破片であるが、高台はかなり低くつぶれている。藤澤編年の６型式である。

土錘（82・83）は細長い形のもので、最大幅は２㎝程である。

ＳＤ２６０出土遺物

土師器椀（84）は口径12㎝、器高3.5㎝で、底部は平底である。口縁部ヨコナデ、体部から底部は外面がオサエ、内面はナデである。

土師器椀（85）は、口径が16㎝で、高台がつくものである。

土師器皿（86）は、高台付き皿で、高台径が10㎝程である。

土師器皿（87～90）は口径17㎝前後、器高2.2～2.5㎝のものである。いずれも口縁部はヨコナデであるが、底部は（88）がナデ調整、（89）がヘラケズリ、（90）がヘラケズリ及びオサエである。（90）の内面には暗文がみられる。

ＳＤ２７６出土遺物

土師器椀（91）は口縁部ヨコナデで、体部にはオサエの跡が明瞭に残る。粘土紐つなぎ痕もみられる。

ＳＫ２３０出土遺物

土師器甕（92）は、口径25㎝程である。頸部外面に縦方向のハケメがみられる。

土師器甕（93）は口径37㎝程で、口縁部は外反し、端部は丸くおわる。胴部は半球状で、頸部の器壁が厚くなる。口縁部はヨコナデであるが、胴部から底部にかけての外面は全面にケズリである。

③平安時代の遺構からの出土遺物

ＳＤ２２９出土遺物

土師器杯（94）は口径13.5㎝で、口縁部ヨコナデ、底部はオサエである。

土師器甕（95）は口頸部の破片であるが、長胴甕になるものである。

④近世の遺構からの出土遺物

ＳＺ２３８出土遺物

陶器甕（98）は、埋め甕として使用されたもので常滑製の陶器甕である。胴部最大径が口径を上回り、口縁は、内端が極端に肥大化した形態である。焼成は軟質で、いわゆる赤物と呼ばれているものである。18世紀のもの[34]で、三重県内での類例は津市の六大Ｂ遺跡Ａ地区のＳＺ６８出土[35]のもの、伊勢市の古市・中之地蔵町遺跡出土[36]のものがある。

⑤現代の攪乱からの出土遺物

ＳＤ２３７出土遺物

銭貨（96）は江戸時代の寛永通宝で、裏面には「元」の文字がみられる。

石硯（97）は長方硯であるが、海部の破片である。

（２）ピット及び遺物包含層等出土の遺物

ピットからは、製塩土器（100）、土師器椀（101・102）・杯（103・104）・壷（99）・甕（105）が出土した。遺物包含層からは、縄文土器（107）、土師器（111）・甕（108～110）・椀（112）・皿（113）、須恵器蓋（114）、山茶椀（115）、土錘（117～120）が出土した。石器（106）と土錘（116）は廃土からの採集遺物である。

土師器（111）は小片のため断定はできないが、古墳時代の土師器で把手付きの鉢になる可能性が高い。内外面ともにナデで、内面には水銀朱がわずかにみ

られ、また外面には煤が付着する。

土師器椀（112）は、口径11cm、器高４cm程の椀で、口縁部は上方に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面は体部から底部はナデ、外面底部はオサエがみられる。内面に「井」状のヘラ記号が施される。

（河北）

Ⅳ　Ｂ地区の調査結果

１　概要

Ｂ地区は、Ａ地区の西側約30ｍの所にほぼ平行して位置する細長い調査区で、Ｂ－Ⅰ・Ⅱ地区に分けて調査を行った。Ｂ－Ⅰ地区は北側の調査区で、南北に細長く、北端から小地区14までである。Ｂ－Ⅱ地区は逆Ｌ次状の形をした南側の調査区で、小地区15から南端までである。Ｂ地区の総延長は294ｍで、幅1.5～2.0ｍ、調査面積は470㎡である。

２　土層

Ｂ－Ⅰ地区の土層断面図は、西壁のＤ～Ｅ間とＦ～Ｇ間、南壁のＥ～Ｆ間でそれぞれ作成した。

Ｂ－Ⅰ地区の基本的層序は、第１層が黄灰色砂質土の耕作土（１）、第２層が橙色粘質土の床土（２）、第３層が灰褐色粘質土の遺物包含層（５）、第４層が黒色砂質土の地山（４）である。遺構は第４層上面から切り込んでおり、検出もその面で実施した。なお、小地区ｅ９～11のＳＤ３０５、ＳＫ３０１付近では、下層確認を実施しており、第５層が褐灰色シルト（24）、第６層が褐灰色シルトに砂混じり（25）、第７層が黄灰色シルト質砂礫（26）、第８層が褐灰色砂礫（27）である。

Ｂ－Ⅱ地区の土層断面図は、南北方向の調査区はＢ～Ｃ間の西壁で、南端の東西方向の調査区はＡ～Ｂ間の北壁でそれぞれ作成した。

東西方向調査区の基本的層序は、第１層がオリーブ灰色粘質土の耕作土（１）、第２層が橙色粘質土の床土（２）、第３層が褐灰色シルト（19）、第４層が暗褐色粘質シルトの遺物包含層（126）、第５層が褐色粘質シルト（127）または黄褐色粘質シルト（135）、第６層が地山である。ただし、第２～５層については、場所によっては消滅している所もあり、層序は一定ではない。遺構は第６層上面で検出した。

南北方向調査区の基本的層序は、南端部から小地区42の溝ＳＤ３３２付近までは、第１層がオリーブ灰色粘質土の耕作土（１）、第２層が褐灰色砂質シルト（19）、第３層が灰褐色砂質シルト（22）、第４層が褐灰色粘質シルト（97）、第５層が地山である。溝ＳＤ３３２付近から小地区34付近の溝ＳＤ３２９までは第４層が消滅する。小地区34の溝ＳＤ３２９付近から小地区20の溝ＳＤ３１６付近までは、第１層がオリーブ灰色粘質土の耕作土（１）、第２層が橙色粘質土の床土（２）、第３層が褐灰色砂質シルト（19）、第４層が橙色砂質シルト（21）、第５層が灰褐色砂質シルト（22）、第６層が地山である。

ＳＤ３１６付近から北端までは、第１層がオリーブ灰色粘質土の耕作土（１）、第２層が橙色粘質土の床土（２）、第３層が灰褐色シルト（３）、第４層が黒褐色砂質土（４）、第５層が褐灰色砂質シルト（５）、第６層が暗赤褐色砂質土（６）、第７層が黒色土の地山（154）である。

３　遺構

遺構は古いものは古墳時代、新しいものは平安時代末～鎌倉時代である。遺構の時期決定については、Ａ地区同様、出土遺物による時代判断を中心にして、これに他の遺構との切り合い関係を参考にした。しかしながら、出土遺物は細片が多く、また、遺構が重複している箇所では、遺物の混入が考えられるケースもあり、遺構の時期判断はより困難であった。各々の遺構の時期については、一定の幅を持った時期とせざるを得ない遺構が多くなり、次のような区分とした。

（１）古墳時代前半
（２）古墳時代
（３）古墳時代から奈良時代
（４）奈良時代以降
（５）古墳時代から平安時代
（６）奈良時代から平安時代
（７）平安時代
（８）平安時代末期から鎌倉時代
（９）時期不明

（1）古墳時代前半の遺構

①　溝

ＳＤ３２０　Ｂ－Ⅱｊｋ23～26地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13m、幅1.0m以上、深さ0.3mである。切り合いにより古墳時代の溝ＳＤ３１９より古い。埋土は黄褐色土で、古墳～平安時代前期の土師器高杯・壷が出土している。出土遺物は、古墳時代前半の物が多く、平安時代の遺物が少量である。当該遺構の周辺には平安時代の遺構があり、調査時に出土遺物が混入したか、あるいは平安時代の遺構の切り込みを見落としていたと考え、当該遺構の時期は古墳時代前半と判断した。

（2）古墳時代の遺構

①　溝

ＳＤ３０７　Ｂ－Ⅰｅｆ11～14地区で検出した南北溝で、長さ15m以上、幅1.0m、深さ0.5mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３０４・３１５より古い。埋土は第１層が黒褐色砂質土、第２層が褐灰色細砂に黒褐色砂質土混じり、第３層が黒褐色粘質土に礫混じりで、古墳時代の土師器甕（121）等が出土した。

ＳＤ３１９　Ｂ－Ⅱｊｋ23～26地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13m、幅1.0m以上、深さ0.1m以上である。切り合いにより古墳～平安時代の溝ＳＤ３１８より古く、古墳時代前半の溝ＳＤ３２０より新しい。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、古墳時代の土師器甕、須恵器杯（122）が出土した。

ＳＤ３２３　Ｂ－Ⅱｉ19・20地区で検出した南北方向の大溝で、長さ3.3m以上、幅2.0m、深さ0.4mである。切り合いにより古墳～平安時代の溝ＳＤ３１６より古い。埋土は褐灰色砂質土で、古墳時代の土師器甕小片、須恵器杯（125）が出土した。掘り上がりの形状が複雑であることから複数の遺構が重複している可能性がある。

ＳＤ３２９　Ｂ－Ⅱｊｋ31～35地区で検出した南北方向の大溝で、長さ15.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.3mである。切り合いにより古墳～平安時代の溝ＳＤ３２２より古い。埋土は北側では一層で浅黄色粘質土ににぶい黄橙色砂質土混じりであり、南側では何層にも入り乱れて複雑であるが色調は浅黄色系や灰褐色系で、土質は粘質土または細砂である。古墳時代の可能性が高い土師器壷・高杯・甕が出土した。

（3）古墳時代から奈良時代の遺構

①　溝

ＳＤ３２５　Ｂ－Ⅱｊｋ29地区で検出した東西溝で、長さ0.5m以上、幅1.0m、深さ0.3mである。古墳～平安時代の溝ＳＤ３２２との切り合いは不明である。埋土は第１層がにぶい黄褐色粘質土、第２層が褐灰色細砂で、古墳～奈良時代におさまる須恵器甕の小片が出土した。

ＳＤ３２６　Ｂ－Ⅱｊｋ31地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.5m以上、深さ0.3mである。埋土は第１層が灰白色細砂、第２層が灰黄褐色系粘質土に黒褐色土混じりで、古墳～奈良時代と考えられる土師器細片および須恵器細片が出土した。

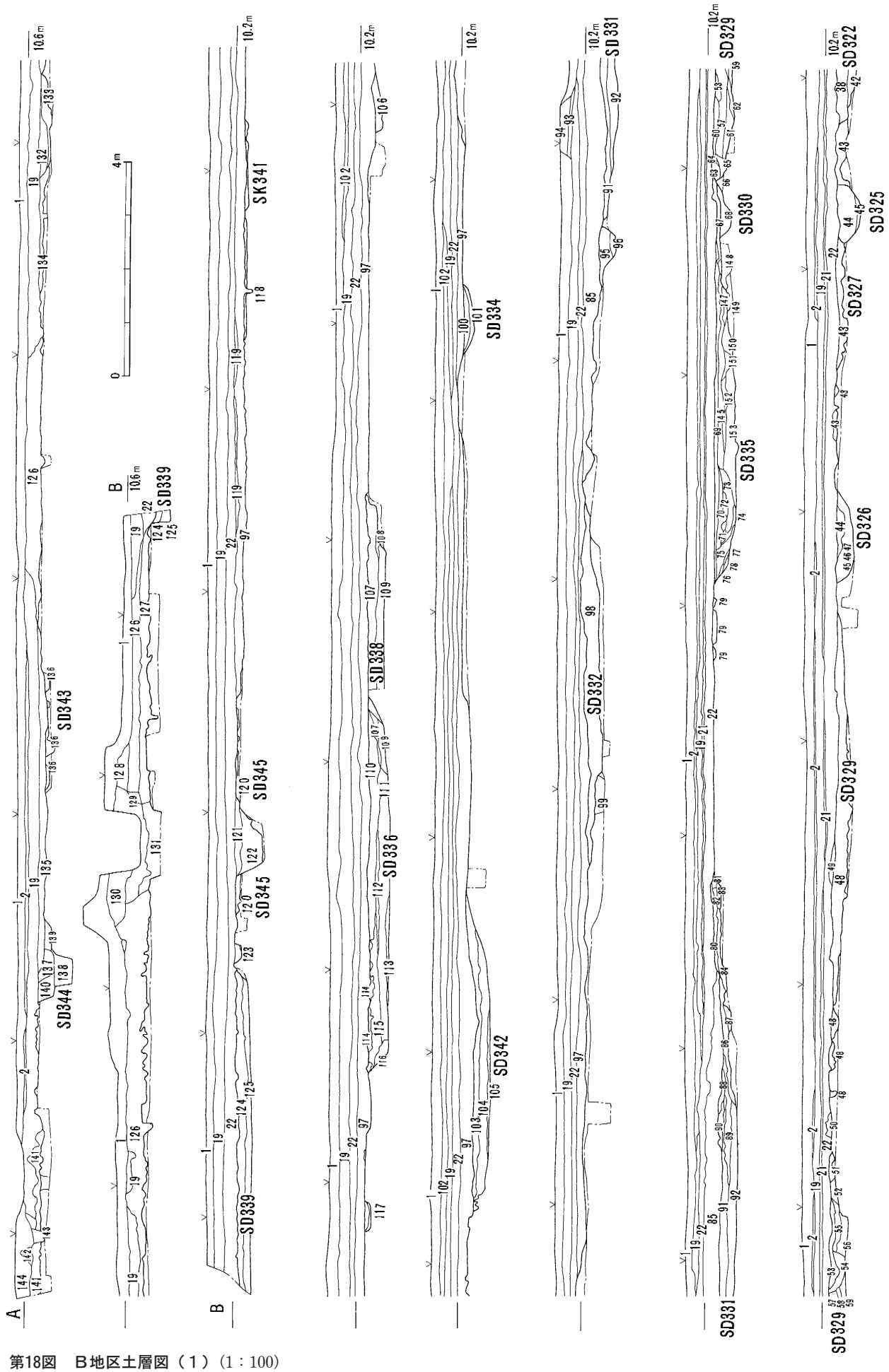
ＳＤ３３０　Ｂ－Ⅱｊｋ35地区で検出した南北溝で、長さ2.0m以上、幅0.9m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３５より古い。埋土は暗褐色粘質土で、古墳～奈良時代の土師器、須恵器の細片が出土した。

ＳＤ３３２　Ｂ－Ⅱｊｋ42～47地区で検出した南北方向の大溝で、長さ24m以上、幅1.5m以上、深さ0.6mである。切り合いによりＳＤ３３３より新しい。埋土はにぶい黄橙色砂質土で、古墳～奈良時代と考えられる土師器甕の小片が出土した。

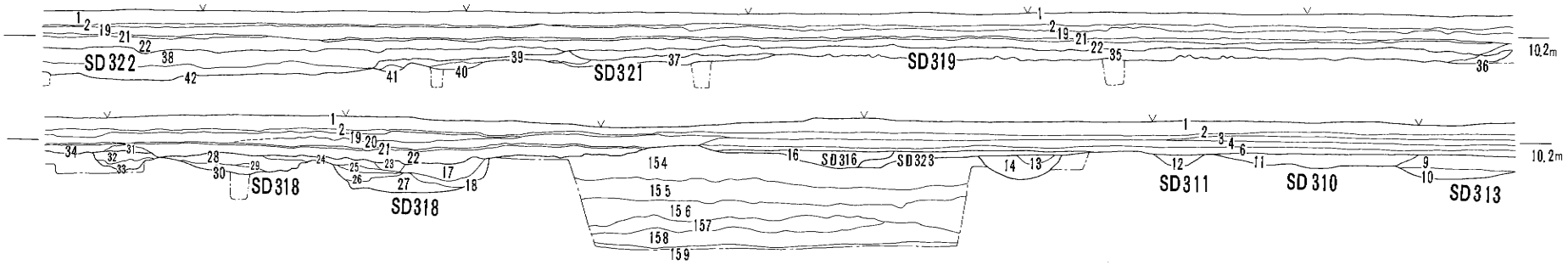
ＳＤ３３３　Ｂ－Ⅱｋ42～44地区で検出した南北方向の大溝で、長さ10m以上、幅0.8m以上、深さ0.3mである。出土遺物がないため、遺構の明確な存続時期は不明であるが、切り合いによりＳＤ３３２より古いので一応当該期とした。

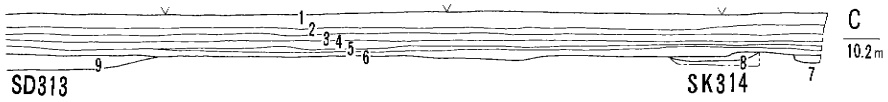
ＳＤ３３９　Ｂ－Ⅱｌ62・63地区で検出した南北溝で、長さ7.3m以上、幅0.7m、深さ0.3mである。切り合いによりＳＤ３４５より新しい。埋土は第１層が褐色粘質土、第２層が明黄褐色粘質土に明褐灰色細砂混じりで、古墳～奈良時代の土師器の小片が出土した。

ＳＤ３４０　Ｂ－Ⅱｋｌ60～63地区で検出した南北方向の大溝で、長さ13.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.2mである。切り合いによりＳＤ３４５より新し

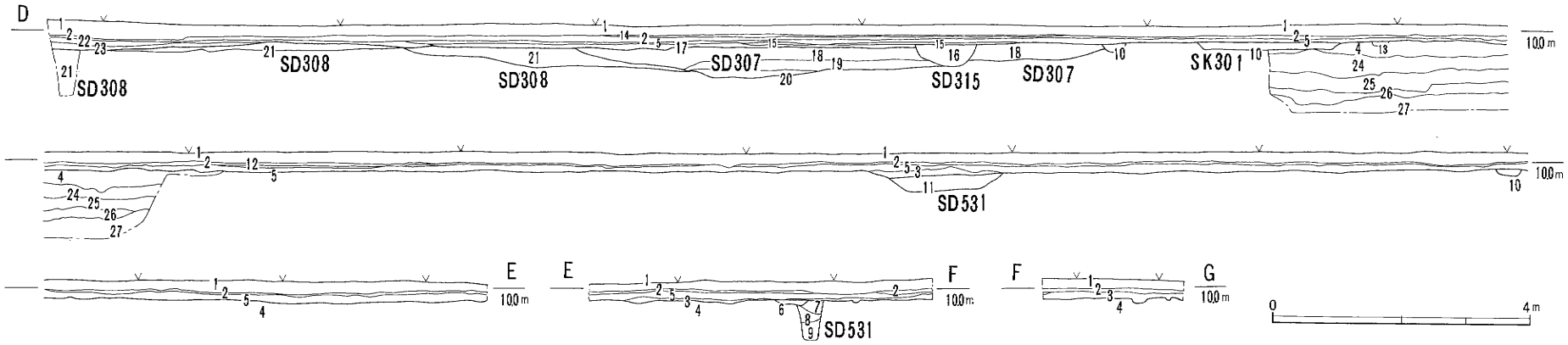


第18図　B地区土層図（1）（1：100）





1　オリーブ灰色粘質土（耕作土）
2　橙色粘質土（床土）
3　灰褐色砂質シルト
4　黒褐色砂質土
5　褐灰色砂質シルト
6　暗赤褐色砂質土
7　黒褐色粘質土
8　黒褐色砂質土に砂混じり（SK314）
9　暗褐色砂質シルト（SD313）
10　暗褐色砂質土（SD313）
11　黒褐色砂質土（SD310）
12　黒褐色粗砂（SD311）
13　黒褐色砂質土
14　浅黄色砂質シルトににぶい褐色粘質土混じり
15　褐灰色砂質土
16　暗褐色粘質シルト（SD316）
17　灰黄褐色粘質シルト（SD318）
18　褐色砂質土（SD318）
19　褐灰色砂質シルト
20　褐灰色砂質シルト
21　橙色砂質シルト
22　灰褐色砂質シルト
23　灰褐色砂質シルト（SD318）
24　灰黄褐色粘質シルト（SD318）
25　灰褐色細砂（SD318）
26　褐色砂質シルト（SD318）
27　褐灰色粘質シルト（SD318）
28　灰褐色粘質シルト（SD318）
29　黒褐色砂質シルト（SD318）
30　暗褐色粘質シルト（SD318）
31　浅黄色砂質シルト
32　黒褐色粘質土に浅黄色砂質シルト混じり
33　黒褐色砂礫
34　褐色粘質シルト
35　にぶい黄褐色粘質シルト（SD319）
36　灰褐色粘質土シルトに黒褐色砂質土混じり（SD319）
37　灰色砂礫（SD321）
38　灰黄褐色粘質シルト（SD322）
39　浅黄色粘質シルト（SD321）
40　灰色粗砂に褐色粗砂混じり（SD321）
41　浅黄色粗砂（SD321）
42　灰黄褐色砂質シルト（SD322）
43　灰黄褐色粘質シルトに黒色砂質土混じり（SD327）
44　にぶい黄褐色粘質シルト（SD325・326）
45　褐灰色細砂（SD325・326）
46　黒褐色粘質土（SD326）
47　にぶい黄褐色粘質シルト（SD326）
48　浅黄色粘質シルトににぶい黄橙色砂質土混じり（SD329）
49　灰白色砂質シルト
50　灰褐色粘質シルトに黒褐色粘質シルト混じり
51　黒褐色粘質シルトに黄橙色砂質シルト混じり
52　明黄褐色砂質シルト
53　にぶい黄橙色細砂（SD329）
54　灰白色粘質シルト
55　暗赤褐色粘質シルトに明褐灰色砂質シルト混じり
56　灰褐色細砂
57　灰褐色細砂（SD329）
58　灰褐色細砂に暗褐色粘質土混じり（SD329）
59　暗褐色粘質土（SD329）
60　浅黄色細砂（SD329）
61　にぶい黄橙色細砂（SD329）
62　浅黄橙色細砂ににぶい黄橙色細砂混じり（SD329）
63　浅黄色粘質シルト（SD329）
64　浅黄色粘質シルトに黒褐色粘質土混じり（SD329）
65　にぶい黄橙色粘質土ににぶい黄褐色粗砂（SD329）
66　にぶい黄橙色粘質シルト
67　にぶい黄橙色シルト（SD335）
68　暗褐色粘質土（SD330）
69　褐色粘質シルト（SD335）
70　にぶい黄褐色粘質シルト（SD335）
71　黄褐色粘質シルト（SD335）
72　灰白色粘質シルト（SD335）
73　淡黄色粘質シルト（SD335）
74　浅黄色粘土（SD335）
75　にぶい黄橙色粘質シルト（SD335）
76　浅黄色粘質シルト（SD335）
77　浅黄色粘質シルトに黒色砂質土混じり（SD335）
78　黒色砂質土に黄褐色粘質土混じり（SD335）
79　にぶい黄橙色砂質シルトに暗褐色粘質土混じり
80　褐色粘質土
81　暗赤褐色粘質土
82　灰白色粘質シルト
83　灰白色粘質シルトに黒色砂質土混じり
84　灰白色粘質シルトに暗赤褐色砂質土
85　にぶい黄橙色粘質シルト
86　にぶい黄褐色粘質シルト
87　にぶい赤褐色粘質シルト（SD331）
88　にぶい橙色粘質シルト（SD331）
89　にぶい褐色粘質シルト（SD331）
90　にぶい橙色粘質シルト（SD331）
91　明褐灰色粘質シルト（SD331）
92　不明（SD331）
93　明褐灰色粘質シルト（表土）
94　表土
95　褐色粘質シルトに暗赤褐色砂質土混じり
96　黒褐色礫
97　褐灰色粘質シルト
98　にぶい黄橙色粘質シルト（SD332）
99　暗赤褐色砂礫
100　にぶい橙色粘質シルト（SD334）
101　褐灰色砂質シルト（SD334）
102　褐灰色砂質シルト
103　明褐灰色粘質シルト（SD342）
104　灰白色砂質シルト（SD342）
105　黄灰色砂礫（SD342）
106　灰白色粘質シルト
107　暗褐色粘質土（SD338）
108　にぶい黄褐色粘質土（SD338）
109　褐灰色砂礫（SD338）
110　にぶい橙色砂質シルト（SD336）
111　灰黄褐色粗砂に礫混じり
112　にぶい橙色粘質シルト（SD336）
113　暗赤褐色砂礫（SD336）
114　黒色砂質土（SD336）
115　にぶい橙色粘質シルト（SD336）
116　暗赤褐色砂質土に暗褐色粘質土混じり（SD336）
117　橙色粘質シルトに黒褐色砂質土混じり
118　黄褐色粘質シルト
119　明褐灰色粘質シルト
120　にぶい黄橙色粘質シルトに黒褐色砂質土混じり（SD345）
121　褐色粘質シルト
122　にぶい褐色粘質シルト
123　にぶい褐色粘質シルト
124　褐色粘質シルト（SD339）
125　明黄褐色粘質シルトに明褐灰色細砂混じり（SD339）
126　暗褐色粘質シルト
127　褐色粘質シルト
128　灰褐色砂質シルト
129　暗赤褐色粘土
130　にぶい赤褐色砂礫（攪乱）
131　灰色粘土（攪乱）
132　にぶい黄橙色粘質シルト
133　褐色粘質シルト
134　にぶい黄褐色粘質シルト
135　黄褐色粘質シルト
136　にぶい黄褐色粘質シルト（SD343）
137　にぶい黄褐色粘質シルト（SD344）
138　灰黄褐色粘質シルト（SD344）
139　灰褐色粘質シルト（SD344）
140　灰黄褐色粘質シルト（SD344）
141　にぶい褐色粘質シルト
142　灰褐色粘質シルト
143　オリーブ灰色粘質土
144　攪乱
145　淡黄色粘質シルト（SD335）
146　にぶい褐色粘質シルト（SD335）
147　灰黄褐色粘質シルト（SD335）
148　暗褐色粘質土（SD335）
149　にぶい黄褐色粗砂（SD335）
150　灰黄褐色粘質土（SD335）
151　にぶい黄橙色粘質シルト（SD335）
152　灰黄褐色粘質シルト（SD335）
153　黒褐色粘質土に灰色粗砂混じり（SD335）
154　黒色土
155　褐灰色シルトに砂混じり
156　褐灰色シルトに砂混じり
157　灰黄褐色砂質シルト
158　灰黄褐色シルト質砂
159　褐灰色砂礫



1　黄灰色砂質土（耕作土）
2　橙色粘質土（床土）
3　褐色粘質土（遺物包含層）
4　黒色砂質土
5　灰褐色粘質土（遺物包含層）
6　暗褐色粘質土
7　暗褐色粘質土（SD531）
8　黒褐色砂質土（SD531）
9　黒褐色粘質土（SD531）
10　黒褐色砂質土（SK301・その他）
11　暗褐色砂質土に黒褐色砂質土混じり（SD531）
12　褐灰色砂質土
13　灰褐色砂質土
14　黄橙色粘質土（床土）
15　暗褐色粘質土
16　黒褐色砂質土（SD315）
17　黒褐色粘質土
18　黒褐色砂質土（SD307）
19　褐灰色細砂に黒褐色砂質土混じり（SD307）
20　黒褐色粘質土に礫混じり（SD307）
21　黒～暗赤褐色砂質土（SD308）
22　明褐灰色砂礫
23　黒褐色砂質土
24　褐灰色シルト
25　褐灰色シルトに砂混じり
26　黄灰色シルト質砂礫
27　褐灰色砂礫

い。埋土は褐灰色土で、古墳～奈良時代の土師器小片、須恵器甕小片が出土した。

ＳＤ３４５　Ｂ－Ⅱｋｌ61～63地区で検出した南北溝で、長さ9.3m以上、幅0.4m、深さ0.1mである。埋土はにぶい黄橙色粘質土に黒褐色砂質土混じりで、出土遺物は土師器細片であるがその時期は不明である。切り合いにより、古墳～奈良時代の溝であるSD３３９・３４０より古いと判断できるが、厳密な時期決定には至らず、一応当該期でとりあつかった。

（４）奈良時代以降の遺構

①　溝

ＳＤ３１３　Ｂ－Ⅱｇｈ16～18地区で検出した南北溝で、長さ11m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３１０より古く、古墳～平安時代の溝ＳＤ３１２より新しい。埋土は第１層が暗褐色砂質土、第２層が暗褐色砂質土に砂利混じりである。奈良時代以降の土師器杯類・甕、須恵器の小片が出土した。

（５）古墳時代から平安時代の遺構

①　溝

ＳＤ３１６　Ｂ－Ⅱｉ19～21地区で検出した南北溝で、長さ4.5m以上、幅0.6m、深さ0.3mである。切り合いにより古墳時代の溝ＳＤ３２３より新しい。埋土は暗褐色粘質土で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕の小片が出土した。

ＳＤ３１７　Ｂ－Ⅱｉｊ21・22地区で検出した南北溝で、長さ2.5m以上、幅7.0m、深さ0.2mである。切り合いにより古墳～平安時代の溝ＳＤ３１８より新しい。埋土は暗褐色土で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕小片、須恵器甕の小片が出土した。

ＳＤ３１８　Ｂ－Ⅱｊ21～23地区で検出した東西方向の大溝で、長さ1.6m以上、幅7.0m、深さ0.5mである。掘り上がりが複雑な形状をしており、また断面でも複数の土層が観察されることから、遺構が重複していた可能性がある。切り合いにより古墳～平安時代の溝ＳＤ３１７より古く、古墳時代の溝ＳＤ３１９より新しい。埋土は複雑であるが、黒褐色・暗褐色・灰褐色・褐灰色系の粘質土が中心で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕（126）、須恵器甕小片が出土した。

ＳＤ３２１　Ｂ－Ⅱｊｋ26地区で検出した東西溝で、長さ2.5m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は灰色砂礫で、古墳～平安時代の土師器杯類・甕、須恵器甕が出土した。

ＳＤ３２２　Ｂ－Ⅱｊｋ26～31地区で検出した南北方向の大溝で、長さ9.0m以上、幅1.3m、深さ0.3mである。切り合いによりＳＤ３２４・３２７及び古墳時代の溝３２９より新しいが、古墳～奈良時代の溝ＳＤ３２５との切り合いは不明である。埋土は第１層が灰黄褐色砂質土、第２層がやや濃い灰黄褐色砂質土である。土師器杯類・高杯・甕（123）、須恵器杯（124）・甕が出土したが、その時期は古墳時代前期から平安時代後期まで及んでいるため、遺構の存続時期は特定し難い。

ＳＤ３２４　Ｂ－Ⅱｊｋ26～29地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅1.0m、深さ0.1mである。埋土は砂で、土師器が出土したが小片のため詳細な遺物の時期は不明である。切り合いがＳＤ３２２より古いことから一応、当該期の中におさまると判断した。

ＳＤ３２７　Ｂ－Ⅱｊｋ30・31地区で検出した南北溝で、長さ4.0m以上、幅不明、深さ0.1mである。埋土はにぶい黄褐色粘質土に黒色砂質土混じりで、土師器が出土しているが、小片のため遺物の詳細な時期は不明である。切り合いが、古墳から奈良時代の溝ＳＤ３２５より新しく、古墳～平安時代の溝ＳＤ３２２より古いことから一応、当該期の中におさまると判断した。

ＳＤ３３４　Ｂ－Ⅱｊｋ47・48地区で検出した南北溝で、長さ7.5m以上、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は第１層がにぶい橙色粘質土、第２層が褐灰色砂質土で、古墳～平安時代の土師器甕の小片が出土した。

（６）奈良時代から平安時代の遺構

①　溝

ＳＤ３０８　Ｂ－Ⅰｆ12～14地区で検出した南北溝で、長さ8.5m以上、幅1.5m以上、深さ0.1mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３０９より古い。埋土は一層で、上部は黒色砂質

土であるが、下にいくにしたがって漸次、色調が暗赤褐色に変化する。奈良～平安時代の土師器杯の小片が出土した。

ＳＤ３１２　Ｂ－Ⅱｈ17・18地区で検出した南北溝で、長さ4.0m以上、幅0.7m、深さ0.1mである。切り合いにより奈良時代以降の溝ＳＤ３１３及び平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３１０より古い。埋土は明黒褐色土に黄砂混じりである。古墳～平安時代の土師器杯類・甕、須恵器杯の小片が出土した。

②　不明遺構

ＳＺ３０６　Ｂ－Ｉｆ14地区で検出したもので、古墳時代の溝ＳＤ３０７および奈良～平安時代の溝ＳＤ３０８の上面に堆積する黒褐色砂の広がりである。古墳～平安時代の土師器甕、須恵器の小片が出土した。

（７）平安時代の遺構

①　溝

ＳＤ３４４　Ｂ－Ⅱｄ65地区で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅1.6mで、法面は両側とも段がみられる。深さは中段が0.2m、最深部が0.6mである。埋土は上段がにぶい黄褐色・灰褐色・灰黄褐色の粘質土であり、下段が濃い灰黄褐色粘質土である。上段と下段とに分層できることから、上下２条の溝である可能性もある。平安時代の土師器甕の小片が出土した。

ＳＤ５３１　第４次調査で確認した溝であるが、第３次調査でもＢ－Ｉ地区北端のａ２地区およびｄ５～７地区で検出した。溝の方向はＮ９°Ｗの南北溝である。この溝を南に延長したＡ－Ⅳ地区のｒ47地区付近では該当する溝は検出していない。第４次調査の調査成果も含めると長さ85m以上、幅0.6m、深さ0.6mである。断面の形状は四角形である。埋土はｄ５～７地区では暗褐色砂質土に黒褐色砂質土混じりであり、ａ２地区では、第１層が暗褐色粘質土、第２層が黒褐色砂質土に細砂混じり、第３層が黒褐色粘質土で土器片を含む。第４次調査でも埋土は三層に分かれ、色調、土質とも類似している。埋土からは平安時代の土師器杯類・甕（127）、須恵器小片、山茶椀が出土した。第４次調査では出土した長胴甕の年代から遺構の時期を奈良時代としている。第３次調査では平安時代の土師器甕等が出土したことから、遺構の時期を平安時代とあらためておきたい。なお、出土遺物のうち山茶椀は藤澤編年の７型式であるが、ａ２地区で当該溝を切る斜め溝からの混入であると推定した。

（８）平安時代末期から鎌倉時代

①　溝

ＳＤ３０４　Ｂ－Ｉｆ11～13地区で検出した南北溝で、平安時代末期～鎌倉時代の溝であるＳＤ３０９・３１５の上面で確認した。須恵器甕の小片及び平安時代末期～鎌倉時代の土師器甕が出土した。

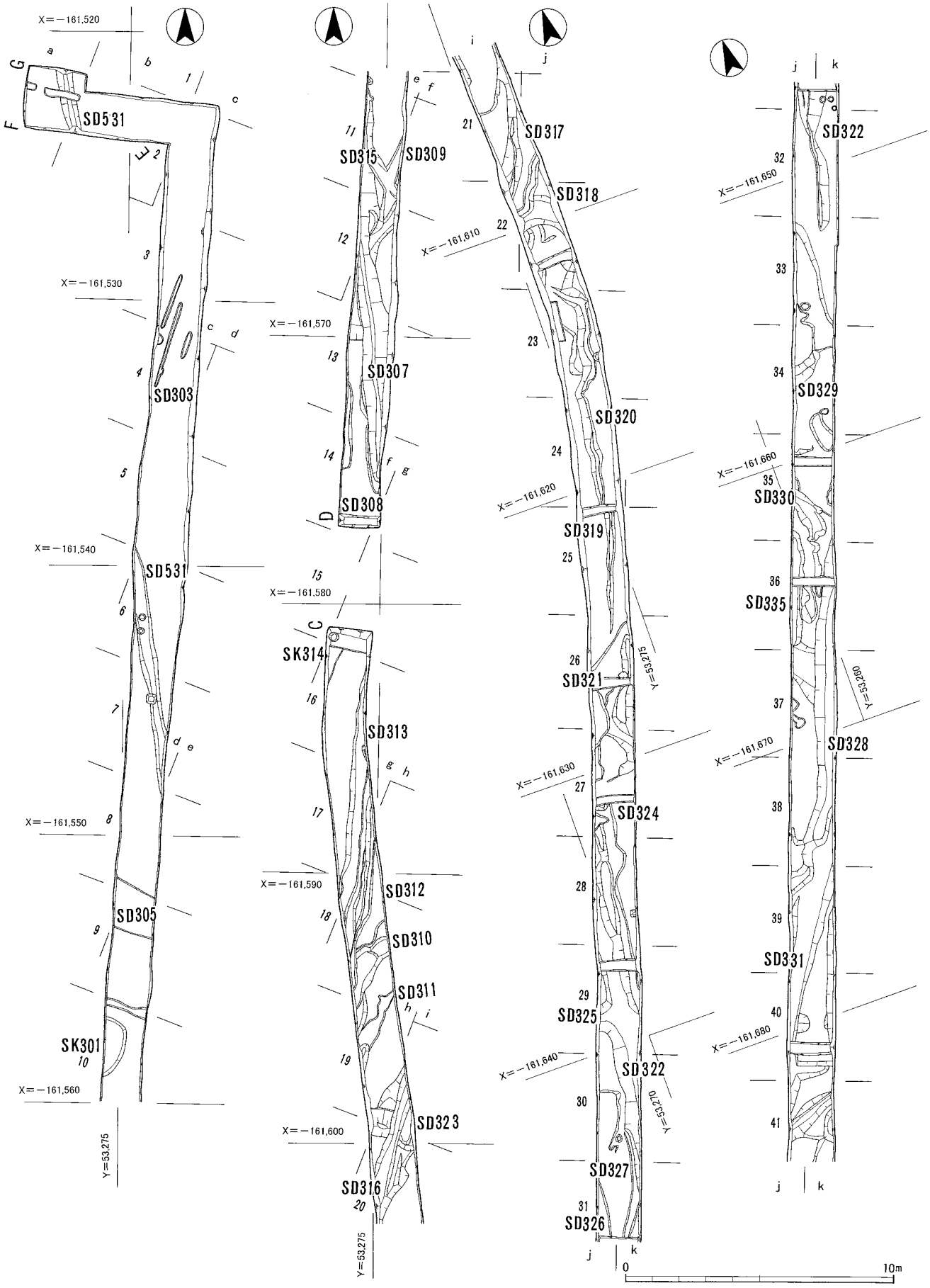
ＳＤ３０５　Ｂ－Ｉｄｅ９地区で検出した東西溝で、長さ1.5m以上、幅1.7mで、深さは0.05mと極めて浅い。現地調査時の判断を尊重して溝としたが、土坑の可能性もある。埋土は暗褐色土で、須恵器甕の小片及び平安時代末期～鎌倉時代の土師器甕、山茶椀小片が出土した。

ＳＤ３０９　Ｂ－Ｉｅｆ11・12地区で検出した南北溝で、長さ4.5m以上、幅0.8m、深さ0.2mである。ＳＤ３１５より新しく、ＳＤ３０４より古い。平安時代末期～鎌倉時代の土師器細片、山茶椀細片が出土した。

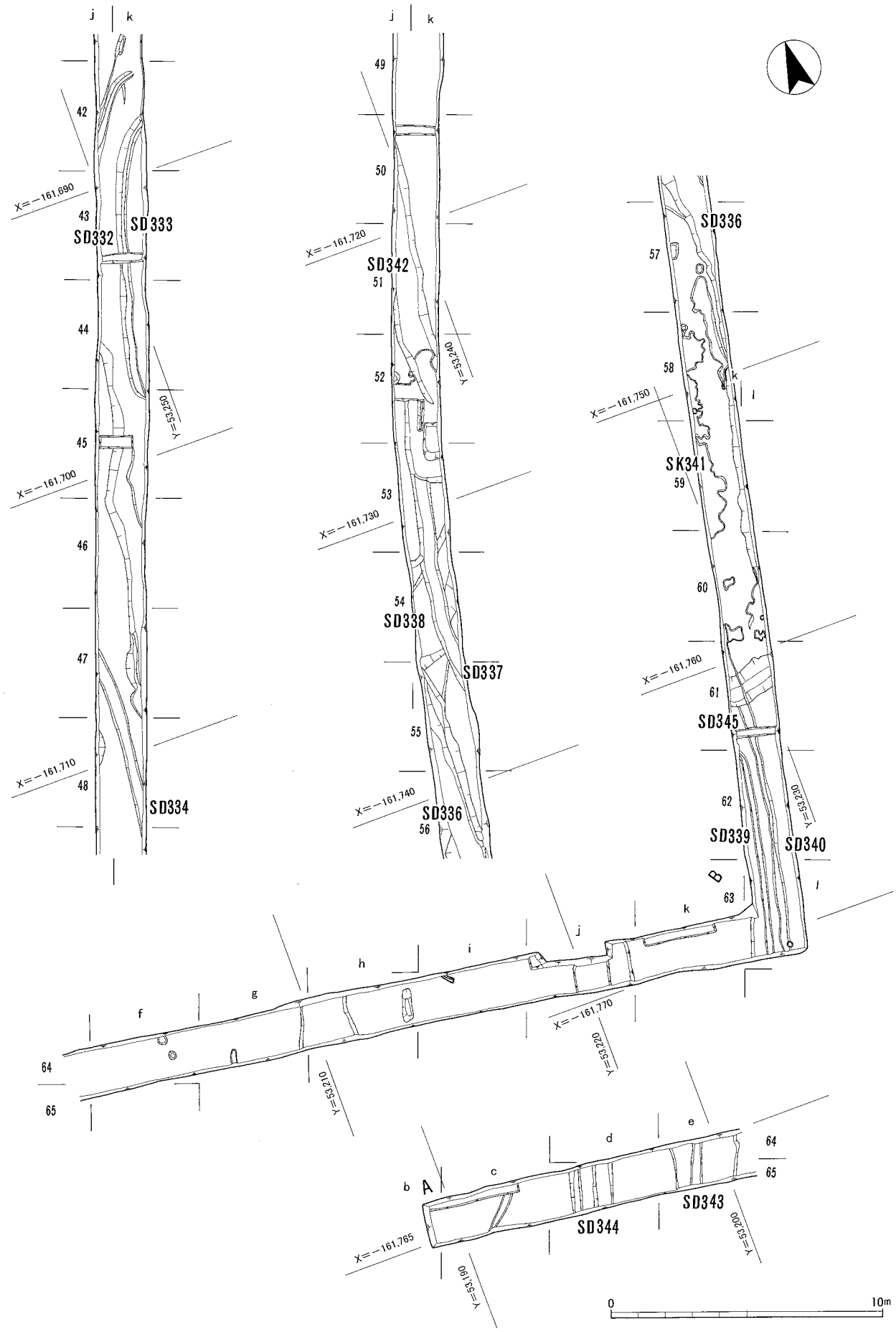
ＳＤ３１０　Ｂ－Ⅱｈ18地区で検出した溝で、長さ2.0m以上、幅1.1m、深さ0.2mである。切り合いにより奈良～平安時代の溝ＳＤ３１２及び奈良時代以降の溝ＳＤ３１３より新しい。埋土は黒褐色砂質土に砂利を多量に含む。須恵器甕及び平安時代末～鎌倉時代の土師器甕、山茶椀の小片が出土した。

ＳＤ３１１　Ｂ－Ⅱｈ18・19地区で検出した溝で、長さ2.5m以上、幅0.7mで、深さは0.05mと極めて浅い。埋土は黒褐色粗砂で、須恵器杯及び平安～鎌倉時代の土師器甕、青磁の小片が出土した。

ＳＤ３１５　Ｂ－Ｉｅｆ11地区で検出した溝で、長さ4.0m以上、幅0.6m、深さ0.1mである。切り合いにより、古墳時代の溝ＳＤ３０７より新しく、平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３０９より古いものであるが、詳細な時期決定には至らず、一応当該期とした。埋土は黒褐色砂質土で、時期不明の土師器細片が出土した。



第20図　B地区遺構平面図１（1：200）



第21図　B地区遺構平面図２（1：200）

ＳＤ３２８　Ｂ－Ⅱｋ36～38地区で検出した南北方向の大溝で、長さ11.5m以上、幅1.0m以上、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３５より新しい。平安時代後期以降の土師器甕、ロクロ土師器が出土した。

ＳＤ３３１　Ｂ－Ⅱｊｋ38～40地区で検出した大溝で、長さ8.0m以上、幅1.7m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３２８より新しい。埋土は第１層が明褐色粘質土、第２層がにぶい橙色粘質土である。ただし、遺構の北側では流れが複雑になり層序が乱れている。須恵器甕片及び平安時代後末期のロクロ土師器（128～130）、土師器小皿（131）、山茶椀（132～135）、土師器甕、瓦器片が出土した。

ＳＤ３３５　Ｂ－Ⅱｊｋ36・37地区で検出した溝で、長さ7.4m以上、幅4.0m、深さ0.3mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３２８より古く、古墳～奈良時代の溝ＳＤ３３０より新しい。掘り上がりの形状が複雑であり、複数の溝が重複していた可能性がある。遺構埋土の層序は複雑であるが、概ね上から順に褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土、黒色砂質土である。土師器甕片、須恵器片が出土したが、ＳＤ３３６と同時期の山茶椀も出土した。

ＳＤ３３６　Ｂ－Ⅱｋ55～58地区で検出した南北方向の大溝で、長さ14m以上、幅1.2m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３８より新しい。埋土は上層がにぶい橙色シルトを中心とした層であり、下層は灰黄褐色粗砂を中心とした層である。須恵器甕及び土師器甕（136）、山茶椀（137～138）、土錘（140）、この他土師器、ロクロ土師器が出土した。

ＳＤ３３７　Ｂ－Ⅱｊｋ52～55地区で検出した南北溝で、長さ13m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３８より新しい。埋土は褐灰色土で、須恵器甕片及びロクロ土師器（141～148）、土器甕（149・150）、山茶椀（151～154）が出土した。

ＳＤ３３８　Ｂ－Ⅱｋ54・55地区で検出した東西方向の大溝で、長さ2.5m以上、幅2.0m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３６・３３７より古い。埋土は第１層が暗褐色粘質土、第２層が褐灰色砂礫である。平安時代後期のロクロ土師器（155～157）、灰釉陶器（163）、山茶椀（159～162）、小椀（164）、山皿（165）、土師器甕小片、須恵器壺（158）、須恵器片、土錘（166）が出土した。

ＳＤ３４２　Ｂ－Ⅱｊｋ50～52地区で検出した大溝で、長さ10m以上、幅1.2m、深さ0.4mである。切り合いにより平安時代末期～鎌倉時代の溝ＳＤ３３７より新しい。埋土は第１層が明褐灰色粘質土、第２層が灰白色砂質土、第３層が黄灰色砂礫である。山茶椀（167・168）、土師器小片が出土した。

（９）時期不明の遺構

①　溝

ＳＤ３０３　Ｂ－Ⅰｃ3・4地区で検出した南北溝で、長さ3.2m、幅0.2m、深さ0.1mである。時期不明の土師器細片が出土している。ＳＤ３０３の両側に0.5m程離れて平行して、同じ形状の溝が検出されており、これらも含めた一連の溝は耕作溝の可能性が高い。

ＳＤ３４３　Ｂ－Ⅱｅ64・65地区で検出した南北溝で、長さ1.5m以上、幅2.4mで、法面は両側とも二段になっており、深さは一段目が0.1m、最深部が0.2mである。土層断面では浅い凹みが何箇所か確認できるため、何条かの溝が重複している可能性もある。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、時期不明の土師器小片が出土した。

②　土坑

ＳＫ３０１　Ｂ－Ⅰｅ10地区で検出した土坑で、平面形は1.8m×0.9m以上、深さ0.1mである。埋土は黒褐色砂質土で、時期不明の土師器小片が出土した。

ＳＫ３１４　Ｂ－Ⅱｇ16地区で検出した土坑で、平面形は1.2m×0.5m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色砂質土に砂利を含んでおり、時期不明の土師器細片が出土した。

ＳＫ３４１　Ｂ－Ⅱｋ58・59地区で検出した土坑で、平面形は８ｍ×1.0m以上、深さ0.05mである。埋土は褐灰色土で、時期不明の土師器細片が出土し

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	時　代	出　土　遺　物	備　考
ＳＫ301	ＳＫ1	ＢⅠ	e10	1.8m以上	0.9m以上	0.1m	不明	土師器小片	
＊302	欠　番								
ＳＤ303	ＳＤ3	ＢⅠ	c3～4	3.2m	0.2m	0.1m	不明	土師器細片	
ＳＤ304	ＳＤ4	ＢⅠ	f11～13	不明	不明	不明	平安末～鎌倉	土師器甕、須恵器甕小片	ＳＤ309･315の上面
ＳＤ305	ＳＤ5	ＢⅠ	d e9	1.5m以上	1.7m	0.05m	平安末～鎌倉	土師器甕、須恵器甕小片、山茶椀小片	
ＳＺ306	ＳＺ6	ＢⅠ	f14	不明	不明	不明	奈良～平安	土師器甕等、須恵器小片	ＳＤ307･308の上面
ＳＤ307	ＳＤ7	ＢⅠ	e f11～14	15m以上	1.0m	0.5m	古墳	土師器甕（121）等	ＳＤ304･315より古
ＳＤ308	ＳＤ8	ＢⅠ	f12～14	8.5m以上	1.5m以上	0.1m	奈良～平安	土師器杯小片	ＳＤ309より古
ＳＤ309	ＳＤ9	ＢⅠ	e f11～12	4.5m以上	0.8m	0.2m	平安末～鎌倉	土師器細片、山茶椀細片	ＳＤ315より新、ＳＤ304より古
ＳＤ310	ＳＤ10	ＢⅡ	h18	2.0m以上	1.1m	0.2m	平安末～鎌倉	土師器甕、須恵器甕、山茶椀小片	ＳＤ312･313より新
ＳＤ311	ＳＤ11	ＢⅡ	h18～19	2.5m以上	0.7m	0.05m	平安末～鎌倉	土師器甕、須恵器杯、青磁小片	
ＳＤ312	ＳＤ12	ＢⅡ	h17～18	4.0m以上	0.7m	0.1m	奈良～平安	土師器杯類･甕、須恵器杯小片	ＳＤ313･310より古
ＳＤ313	ＳＤ13	ＢⅡ	g h16～18	11m以上	1.0m	0.2m	奈良以降	土師器杯類･甕、須恵器小片	ＳＤ310より古、ＳＤ312より新
ＳＫ314	ＳＫ14	ＢⅡ	g16	1.2m	0.5m	0.1m	不明	土師器細片	
ＳＤ315	ＳＤ15	ＢⅠ	e f11	4.0m	0.6m	0.1m	平安末～鎌倉	土師器細片	ＳＤ309より古、ＳＤ307より新
ＳＤ316	ＳＤ16	ＢⅡ	i j19～21	4.5m以上	0.6m	0.3m	古墳～平安	土師器杯類･甕小片	ＳＤ323より新
ＳＤ317	ＳＤ17	ＢⅡ	i j21～22	2.5m以上	0.7m	0.2m	古墳～平安	土師器杯類･甕小片、須恵器小片	ＳＤ318より新
ＳＤ318	ＳＤ18	ＢⅡ	j21～23	1.6m以上	7.0m	0.5m	古墳～平安	土師器杯類･壷小片･甕（126）、須恵器甕小片	ＳＤ317より古、ＳＤ319より新
ＳＤ319	ＳＤ19	ＢⅡ	j k23～26	13m	1.0m以上	0.1m	古墳	土師器甕、須恵器杯（122）	ＳＤ318より古、ＳＤ320より新
ＳＤ320	ＳＤ20	ＢⅡ	j k23～26	13m	1.0m以上	0.3m	古墳前半	土師器高杯･壷	ＳＤ319より古
ＳＤ321	ＳＤ21	ＢⅡ	j k26	2.5m以上	1.0m	0.1m	古墳～平安	土師器杯類･甕、須恵器甕	
ＳＤ322	ＳＤ22	ＢⅡ	j k26～31	9.0m以上	1.3m	0.3m	古墳～平安	土師器高杯･杯類･甕（123）、須恵器杯（124）･甕	ＳＤ324･327･329より新
ＳＤ323	ＳＤ23	ＢⅡ	i19～20	3.3m以上	2.0m	0.4m	古墳	土師器甕小片、須恵器杯（125）	ＳＤ316より古
ＳＤ324	ＳＤ24	ＢⅡ	j k26～29	13m以上	1.0m	0.1m	古墳～平安	土師器小片	ＳＤ322より古
ＳＤ325	ＳＤ25	ＢⅡ	j k29	0.5m以上	1.0m	0.3m	古墳～奈良	須恵器甕小片	
ＳＤ326	ＳＤ26	ＢⅡ	j k31	2.0m以上	0.5m	0.3m	古墳～奈良	土師器細片、須恵器小片	
ＳＤ327	ＳＤ27	ＢⅡ	j k30～31	4.0m以上	不明	0.1m	古墳～平安	土師器小片	ＳＤ322より古、ＳＤ325より新
ＳＤ328	ＳＤ28	ＢⅡ	k36～38	11.5m以上	1.0m	0.4m	平安末～鎌倉	土師器甕、ロクロ土師器	ＳＤ335より新
ＳＤ329	ＳＤ29	ＢⅡ	j k31～35	15.5m以上	1.5m以上	0.3m	古墳	土師器壷･高杯･甕	ＳＤ322より古
ＳＤ330	ＳＤ30	ＢⅡ	j k35	2.0m以上	0.9m	0.2m	古墳～奈良	土師器、須恵器細片	ＳＤ335より古
ＳＤ331	ＳＤ31	ＢⅡ	k38～40	8.0m以上	1.7m	0.3m	平安末～鎌倉	ロクロ土師器（128～130）土師器小皿（131）土師器甕、須恵器甕片、瓦器片、山茶椀（132～135）	ＳＤ328より新
ＳＤ332	ＳＤ32	ＢⅡ	j k42～47	24m以上	1.5m以上	0.6m	古墳～奈良	土師器甕小片	ＳＤ333より新
ＳＤ333	ＳＤ33	ＢⅡ	k42～44	10m以上	0.8m以上	0.3m	古墳～奈良	遺物なし	ＳＤ332より古
ＳＤ334	ＳＤ34	ＢⅡ	j k47～48	7.5m以上	0.5m	0.2m	古墳～平安	土師器甕小片	
ＳＤ335	ＳＤ35	ＢⅡ	j k36～37	7.4m以上	4.0m	0.3m	平安末～鎌倉	土師器甕片、須恵器片、山茶椀	ＳＤ328より古、ＳＤ330より新
ＳＤ336	ＳＤ36	ＢⅡ	k55～58	14m以上	1.2m	0.4m	平安末～鎌倉	土師器甕（136）、山茶碗（137～138）、土錘（140）、ロクロ土師器、須恵器甕	ＳＤ338より新
ＳＤ337	ＳＤ37	ＢⅡ	j k52～55	13m	0.6m	0.2m	平安末～鎌倉	ロクロ土師器（141～148）、土師器甕（149、150）山茶椀（153、154）、須恵器甕小片	ＳＤ338より新
ＳＤ338	ＳＤ38	ＢⅡ	k54～55	2.5m	2.0m	0.4m	平安末～鎌倉	ロクロ土師器（155～157）、灰釉陶器（163）、山茶椀（159～162）、小椀（164）、山皿（165）、須恵器壷（158）、土錘（166）、土師器甕小片、須恵器	ＳＤ336･337より古
ＳＤ339	ＳＤ39	ＢⅡ	l62～63	7.3m以上	0.7m	0.3m	古墳～奈良	土師器小片	ＳＤ345より新
ＳＤ340	ＳＤ40	ＢⅡ	k l60～63	13.5m以上	1.5m以上	0.2m	古墳～奈良	土師器小片、須恵器甕片	ＳＤ345より新
ＳＫ341	ＳＫ41	ＢⅡ	k58～59	８m以上	1.0m以上	0.05m	不明	土師器細片	
ＳＤ342	ＳＤ42	ＢⅡ	k50～52	10m以上	1.2m	0.4m	平安末～鎌倉	土師器小片･山茶椀（167･168）	ＳＤ337より新
ＳＤ343	ＳＤ43	ＢⅡ	e64～65	1.5m以上	2.4m	0.2m	不明	土師器小片	
ＳＤ344	ＳＤ44	ＢⅡ	d65	1.5m以上	1.6m	0.6m	平安	土師器甕小片	
ＳＤ345	ＳＺ42	ＢⅡ	k l61～63	9.3m以上	0.4m	0.1m	古墳～奈良	土師器細片	ＳＤ339･340より古
ＳＤ531	ＳＤ2	ＢⅠ	a2、d5～7	85m以上	0.6m	0.6m	平安	土師器杯類･甕（127）、須恵器小片、（山茶椀混入）	第４次調査で検出

第９表　Ｂ地区遺構一覧

ている。一応土坑としたが、平面形が不定形であり、浅い凹みの可能性もある。

4　遺物

Ｂ地区からの出土遺物の時期は、縄文時代から中世までであるが、このうち図示したのは50点である。量的には、古墳時代の土師器・須恵器と平安時代末～鎌倉時代の土師器・山茶椀がほとんどである。個々の出土遺物の法量や技法の特徴等は遺物観察表に記載したので、参照されたい。以下には、各遺物の特徴的な事項や補足説明等を中心に概述する。

（1）遺構出土遺物

①古墳時代の遺構からの出土遺物

ＳＤ３０７出土遺物

土師器甕（121）は古墳時代のいわゆるＳ字状口縁甕である。上半部が残存しているが、口径は13cm程で、胴部最大径は22cm程である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はナデである。

ＳＤ３１９出土遺物

須恵器杯身（122）は、口径10cm程で、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面に面をもつ。受け部は斜め上方にのびる。底部から体部下半のロクロケズリはかなり高い位置までみられる。ロクロ回転は右廻りである。

ＳＤ３２３出土遺物

須恵器杯身（125）は、口径14cm程の大きさであるが、器高は３cmと低い。たちあがりは短く、口縁端部は丸くおさまる。受け部はほぼ水平で短く、底部は平坦である。体部下半～底部はロクロケズリである。

②古墳～平安時代の遺構からの出土遺物

ＳＤ３１８出土遺物

土師器甕（126）は、口縁部の破片であるが、推定口径は21cmで、器壁は１cmと厚い。口縁部が外反し、端部が水平になる特異な形状である。外面はナデ、内面は横方向のハケメである。口縁が開くタイプの土師器は、三重県内では明和町の寺垣内遺跡[37]、北野遺跡[38]などで出土例があるが、口縁端部の形態は微妙に異なるものである。

ＳＤ３２２出土遺物

土師器甕（123）は平安時代のもので口頸部の小片である。口縁部はヨコナデで、内面にはヨコハケが残存し、外面はオサエおよびナデである。

須恵器杯身（124）は口径10cm程で、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面に面をもつ。受け部は短く、斜め上方にのびる。

③平安時代の遺構からの出土遺物

ＳＤ５３１出土遺物

土師器甕（127）は、口径、胴部最大径とも16cm程で、胴部は球状になる。口縁端部は外面に面を持ち、先端を上方につまみ上げる。胴部外面は上半が縦方向の粗いハケメ、下半から底部がケズリである。胴部内面は上半がナデ、下半から底部がケズリである。

④平安時代後末期から鎌倉時代の遺構出土遺物

ＳＤ３３１出土遺物

ロクロ土師器（128・129）は高台付きの椀で、高台は径７cm程で、「ハ」の字状に開く。体部が内湾して立ち上がるものである。

ロクロ土師器（130）は高台がつかないもので、底部は平底で、体部が直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。底部には糸切り痕がみられ、体部にはロクロ目が明瞭に残る。

土師器小皿（131）は、口径８cm、器高1.5cmの小皿である。粘土紐つなぎ痕がみられる。

山茶椀（132～135）はいずれも破片であるが、（132）は口径14cm程であり、（133～135）は高台径７～８cmで高台は「ハ」の字状に低く開く。底部に糸切り痕がみられる。藤澤編年の５型式、すなわち12世紀後葉～13世紀初頭のものである。なお、（135）は一応、山茶椀としたが、焼成が甘く色調はにぶい橙色を呈する異質のものである。

ＳＤ３３６出土遺物

土師器甕（136）は、口径20cm程で、口縁は「く」の字状を呈し、端部は内側に折り曲げる。口縁部はヨコナデ、胴部外面にはナデ、オサエがみられる。

山茶椀（137～139）は、ＳＤ３３１出土の（132～135）と同様のものである。

土錘（140）は細長い形で長さ3.4cm、最大幅1.1cmで、重さ2.8gである。

ＳＤ３３７出土遺物

ロクロ土師器（141～143）は、高台のつくもので、ＳＤ３３１出土の（128・129）と同様のものである。

ロクロ土師器（144～148）は、口径９～10cm程のもので、器高は（144～146・148）が1.4～1.8cmと低く、（147）が2.5cmである。いずれも体部ロクロナデで、底部には糸切り痕が残る。

土器甕（149・150）は、ＳＤ３３６出土の土師器甕（136）と同様のものである。ともに外面に煤が付着する。

山茶椀（151～154）は、ＳＤ３３１出土の（132～135）及びＳＤ３３６出土の（137～139）と同様のものであるが、（154）の口縁部は外反しており、若干古い要素をもつ。

ＳＤ３３８出土遺物

ロクロ土師器（155～157）は、口径15cm、高台径７～８cm程で、高台はやや短いが、「ハ」の字状に開く。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおわる。体部にロクロ目が残る。

須恵器壷（158）は、高台径10cm程になる壷の底部であるが、体部外面の下部は、ロクロケズリである。

山茶椀（159～162）は、ＳＤ３３１出土の（132～135）、ＳＤ３３６出土の（137～139）、ＳＤ３３７出土の（151～154）と同様のものである。（159）は口縁端部が外反する。

灰釉陶器（163）は高台の断面形は三日月形が退化したもので、Ｏ―53窯式である。

山茶椀系小椀（164）は、高台径4.8cmでロクロ成形である。高台端部には籾殻痕が残り、底部外面に糸切り痕が残る。

山皿（165）は口径約９cm、器高は1.1cmと低いものである。ロクロ成形で底部外面に糸切り痕がみられる。焼成は甘く、色調はにぶい黄橙色である。

土錘（166）は、円柱形を呈するもので、長さ4.4cm、幅3.3cm、重量39.3gである。

ＳＤ３４２出土遺物

山茶椀（167・168）は、ともに底部から体部下半部にかけて残存するものである。ＳＤ３３１出土の（132～135）と同様のものである。

（２）その他の遺物

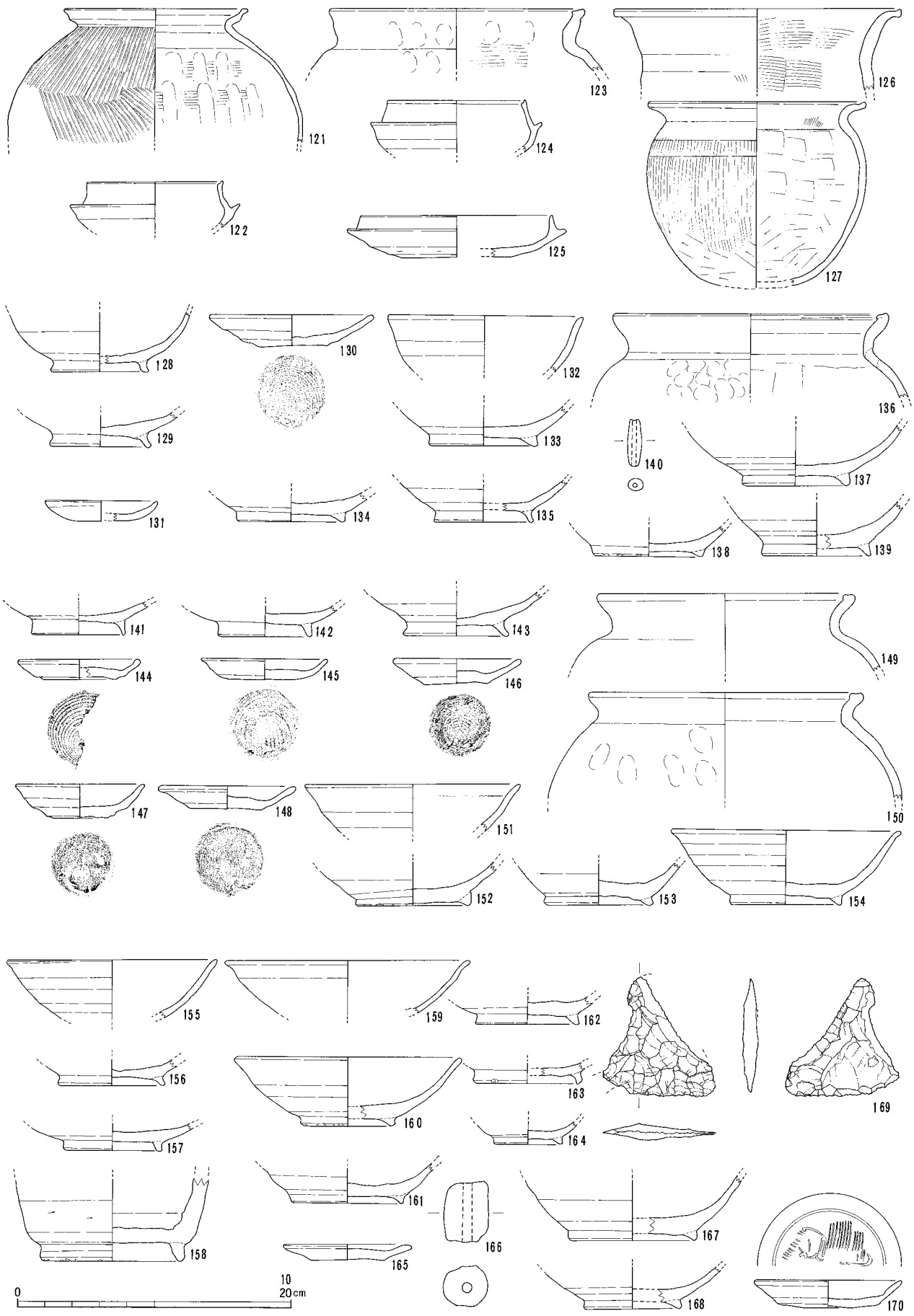
その他の遺構や遺物包含層からも遺物は出土しているが、その量はあまり多くない。

石匙（169）、青磁皿（170）の２点のみ図示した。

（河北）

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
121	030-02	ＳＤ307	土師器甕	13.0			ハケメ、ヨコナデ	やや粗、砂粒含	やや良	橙	上半１／３	
122	030-04	ＳＤ319	須恵器杯	9.8			ロクロナデ、ロクロケズリ	やや密、砂粒含	良	灰白	上半1/4	
123	031-01	ＳＤ322	土師器甕	18.3			ヨコナデ、ナデ、オサエ、ハケメ	やや粗、砂粒含	やや良	にぶい橙	口頸部1/８	煤付着
124	032-02	ＳＤ322	須恵器杯	10.0			ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰白	上半1/4	
125	030-05	ＳＤ323	須恵器杯	13.9	3.0		ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰	1/7	
126	030-03	ＳＤ318	土師器甕	20.8			ヨコナデ、ハケメ	やや粗、砂粒含	やや良	にぶい橙	口縁１／７	
127	030-01	ＳＤ531	土師器甕	15.8	13.6		ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密	やや良	浅黄橙	2/3	
128	031-04	ＳＤ331	ロクロ土師器			6.9	ロクロナデ、糸切り痕	密	やや良	灰白	下半1/2	
129	032-01	ＳＤ331	ロクロ土師器			7.0	ロクロナデ、糸切り痕	やや密	やや良	にぶい黄橙	底部完	
130	031-05	ＳＤ331	ロクロ土師器	11.6	2.4	5.1	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含み	良	浅黄橙	1/2	
131	031-03	ＳＤ331	土師器皿	8.0	1.5		ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙	1/6	
132	032-03	ＳＤ331	山茶椀	14.2			ロクロナデ	密	良	灰白	上半1/８	
133	032-04	ＳＤ331	山茶椀			7.6	ロクロナデ、糸切り痕	密	良	灰白	底部1/4	
134	032-05	ＳＤ331	山茶椀			7.4	ロクロナデ、糸切り痕	密	良	灰白	底部1/２	
135	031-02	ＳＤ331	陶器（？）			6.8	ロクロナデ、糸切り痕	密	良	にぶい橙	下半1/3	
136	029-03	ＳＤ336	土師器甕	19.8			ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密、砂粒含み	並	浅黄橙	口頸部１/6	
137	028-02	ＳＤ336	山茶椀			7.5	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	底部完、体部小片	
138	028-06	ＳＤ336	山茶椀			7.7	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	下半1/2	
139	028-07	ＳＤ336	山茶椀			7.7	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	下半1/3	
140	029-05	ＳＤ336	土錐	長3.4	幅1.1	重2.8ｇ	ナデ	土師質密	並	橙	完形	
141	026-05	ＳＤ337	ロクロ土師器			6.6	ロクロナデ、糸切り痕	やや粗、砂粒含	不良	浅黄橙	底部完	
142	026-04	ＳＤ337	ロクロ土師器			6.6	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含	不良	灰白	底部完	
143	026-03	ＳＤ337	ロクロ土師器			7.6	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含	不良	浅黄橙	底部完	
144	025-07	ＳＤ337	ロクロ土師器	8.8	1.4	5.3	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含	良	にぶい黄橙	1/2	
145	025-05	ＳＤ337	ロクロ土師器	9.1	1.5	5.0	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含	良	浅黄橙	2/3	
146	025-06	ＳＤ337	ロクロ土師器	9.1	1.8	4.4	ロクロナデ、糸切り痕	やや粗、砂粒含	良	灰白	ほぼ完	
147	026-06	ＳＤ337	ロクロ土師器	9.4	2.5	4.0	ロクロナデ、糸切り痕	やや粗、砂粒含み	良	灰白	底部完、体部小片	
148	025-04	ＳＤ337	ロクロ土師器	9.7	1.7	5.3	ロクロナデ、糸切り痕	やや粗、砂粒含	良	浅黄橙	完形	
149	025-02	ＳＤ337	土師器甕	18.6			ヨコナデ、ナデ	やや密、砂粒含み	良	にぶい黄橙	口頸部１/6	煤付着
150	025-01	ＳＤ337	土師器甕	20.0			ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗、砂粒含み	良	にぶい黄橙	口頸部1/6	煤付着
151	026-07	ＳＤ337	山茶椀	15.8			ロクロナデ	密、砂粒含み	良	灰白	上半1/6	
152	026-01	ＳＤ337	山茶椀			8.2	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	底部完	
153	026-02	ＳＤ337	山茶椀			7.4	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含み	良	灰白	底部1/2	
154	025-03	ＳＤ337	山茶椀	16.8	5.4	8.0	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	1/3	
155	029-01	ＳＤ338	ロクロ土師器	15.1			ロクロナデ	密、砂粒含み	良	浅黄橙	上半1/4	
156	028-03	ＳＤ338	ロクロ土師器			7.7	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	浅黄橙	底部完	
157	027-07	ＳＤ338	ロクロ土師器			6.5~7.0	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	淡黄	底部完	
158	027-01	ＳＤ338	須恵器壺			10.0	ロクロナデ、ロクロケズリ	やや密、砂粒含み	良	灰白	下半	ロクロ回転右廻り
159	028-04	ＳＤ338	山茶椀	17.8			ロクロナデ	やや密、砂粒含み	良	灰白	上半1/10	
160	027-04	ＳＤ338	山茶椀	16.2	5.6	6.5	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	1/2	
161	027-03	ＳＤ338	山茶椀			8.0	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含み	良	灰白	下半1/2	
162	027-05	ＳＤ338	山茶椀			7.3	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含み	良	灰白	底部1/2	
163	027-02	ＳＤ338	灰釉陶器			7.4	ロクロナデ、糸切り痕	密、砂粒含み	良	灰白	底部1/5	
164	027-06	ＳＤ338	小椀			4.8	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	底部完	
165	028-01	ＳＤ338	山皿	9.3	1.1	5.2	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	やや軟	にぶい黄橙	底部完、体部小片	
166	029-04	ＳＤ338	土錘	長4.4	幅3.3	重39.3g	ナデ	土師質やや密	並	橙	ほぼ完形	
167	028-05	ＳＤ342	山茶椀			9.9	ロクロナデ、糸切り痕	やや密、砂粒含み	良	灰白	下半1/3	
168	029-02	ＳＤ342	山茶椀			7.0	ロクロナデ	密、砂粒含み	良	灰白	下半1/3	
169	041-01	i20包含層	石匙	長4.3	幅4.1	厚0.6	打製	サヌカイト				重6.8ｇ
170	032-06	k48包含層	青磁皿	10.6	2.0	7.6	ロクロナデ	密	良	灰白	1/2	明オリーブ灰色の施釉

第10表　Ｂ地区出土遺物観察表



第22図　B地区出土遺物実測図（1：4、ただし169は1：2）

Ⅴ　Ｃ・Ｅ地区の調査結果

１　概要

Ｃ・Ｅ地区は、Ａ地区及びＢ地区の南端から約250ｍ南方に位置する調査区である。

Ｃ地区は、２箇所の正方形の調査区からなり、Ｃ－Ⅰ地区は６ｍ×６ｍ程、Ｃ－Ⅱ地区は９ｍ×９ｍ程である。調査面積は併せて120㎡である。

Ｅ地区はＣ－Ⅰ地区から延びる細長い調査区で、総延長79ｍ、幅1.5～2.0ｍの細長い調査区で、調査面積は130㎡である。Ⅰ～Ⅲ地区に分けて調査をおこなった。Ｅ－Ⅰ地区は、Ｃ－Ⅰ地区から延びる南北方向の長さ６ｍである。Ｅ－Ⅱ地区は、Ⅰ地区北端から西方向に延びる地区で長さ25ｍである。Ｅ－Ⅲ地区は、Ⅱ地区西端から北方向に延びる地区で長さ48ｍである。

２　土層

Ｃ－Ⅰ・Ⅱ地区及びＥ－Ⅰ・Ⅱ地区は、第１層が耕作土または表土（１）、第２層がオリーブ褐色または暗オリーブ褐色土の床土（２）、第３層が暗褐色やや粘質土の地山（３）、第４層が暗褐色やや粘質土に石混じり（４）、第５層が黄褐色砂質土に粗砂・石混じり（５）である。遺構検出は第３層上面で行った。本来は第２層と第３層の間に遺物包含層が存在したものであろうが、削平されたと推測される。

Ｅ－Ⅲ地区では、第２層の床土がなくなり、その替わりに第１層と第３層の間に何層かの土が複雑に見られるが、これらは現代の水田及び農道整備などの新しい時代のものである。

３　遺構および遺物

遺構は、井戸、溝、土坑、ピットを検出した。各遺構からの出土遺物はほとんどないため、多くは時期不明である。主な遺構を以下に記述する。なお、遺物は、遺構、包含層とも室町時代の遺物が少量出土したが、小片のため図示し得なかった。

（１）井戸

ＳＥ４０１　Ｃ－Ⅰ地区中央部で検出した井戸で、平面形は径0.9ｍ程のほぼ円形であるが、東端部や南端部はやや角張る。深さは1.6ｍで、第１層が黄褐色シルト、第２層が黄褐色粘質土に礫混じり、第３層が黄褐色粘土に礫混じり、第４層が青灰色粘土に礫混じりである。第２～４層の各埋土に混じる礫は、径１～10㎝程で地山に含まれている礫である。一応、埋土の分層を行ったが、各層の埋土にはそれ程の大きな差異はなく、一度に埋没した可能性が高い。また、底からは曲物等は出土しなかったことや井戸の径が0.9ｍと小さいことから、素掘りの井戸の可能性が高い。埋土からは室町時代の土師器鍋・皿、陶器甕の小片が出土した。

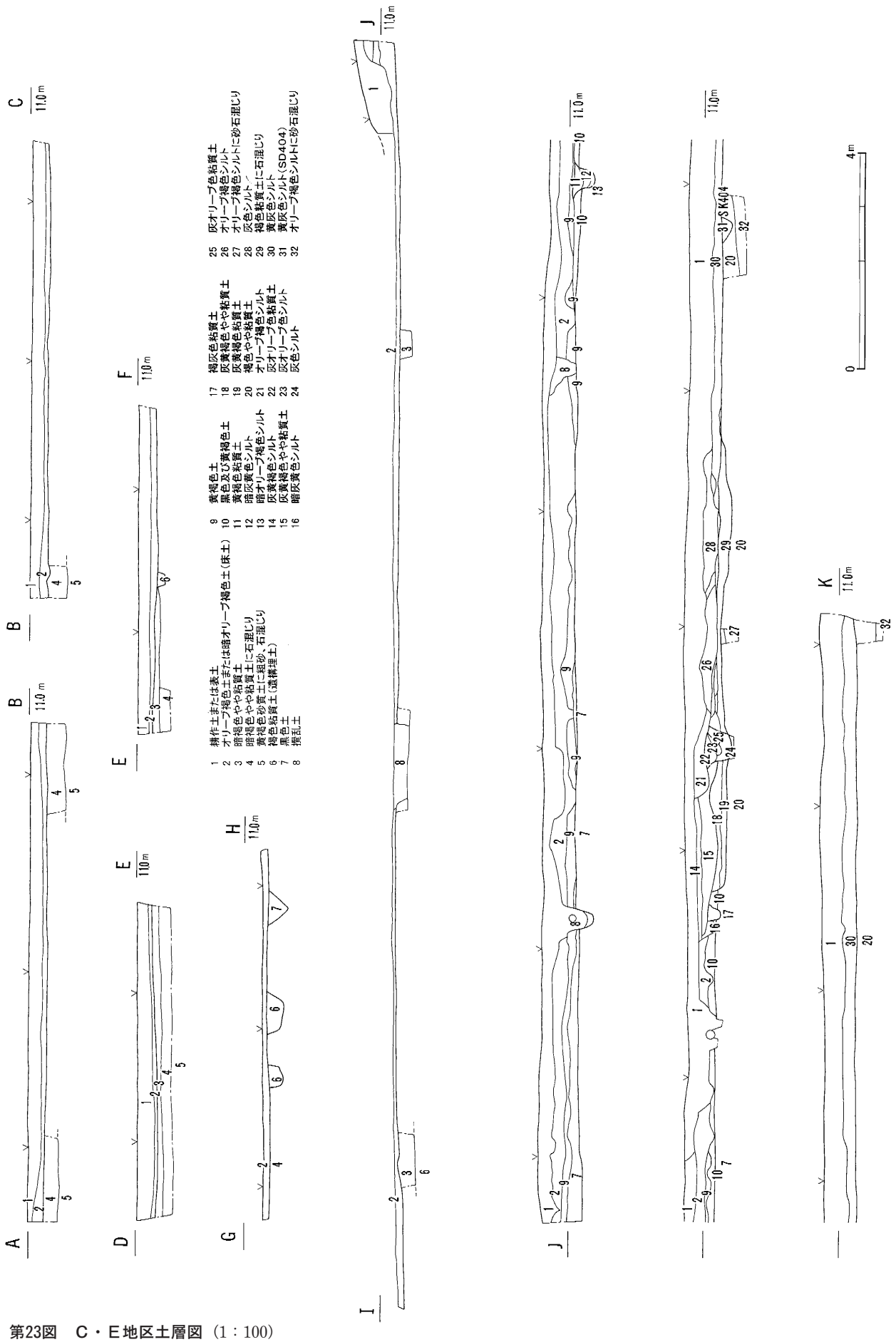
（２）土坑

ＳＫ４０２　Ｅ－Ⅲｉｈ６・７地区で検出した土坑で、平面形は1.1ｍ以上×0.9ｍで、深さは0.2ｍである。室町時代の土師器鍋・皿の小片が出土した。

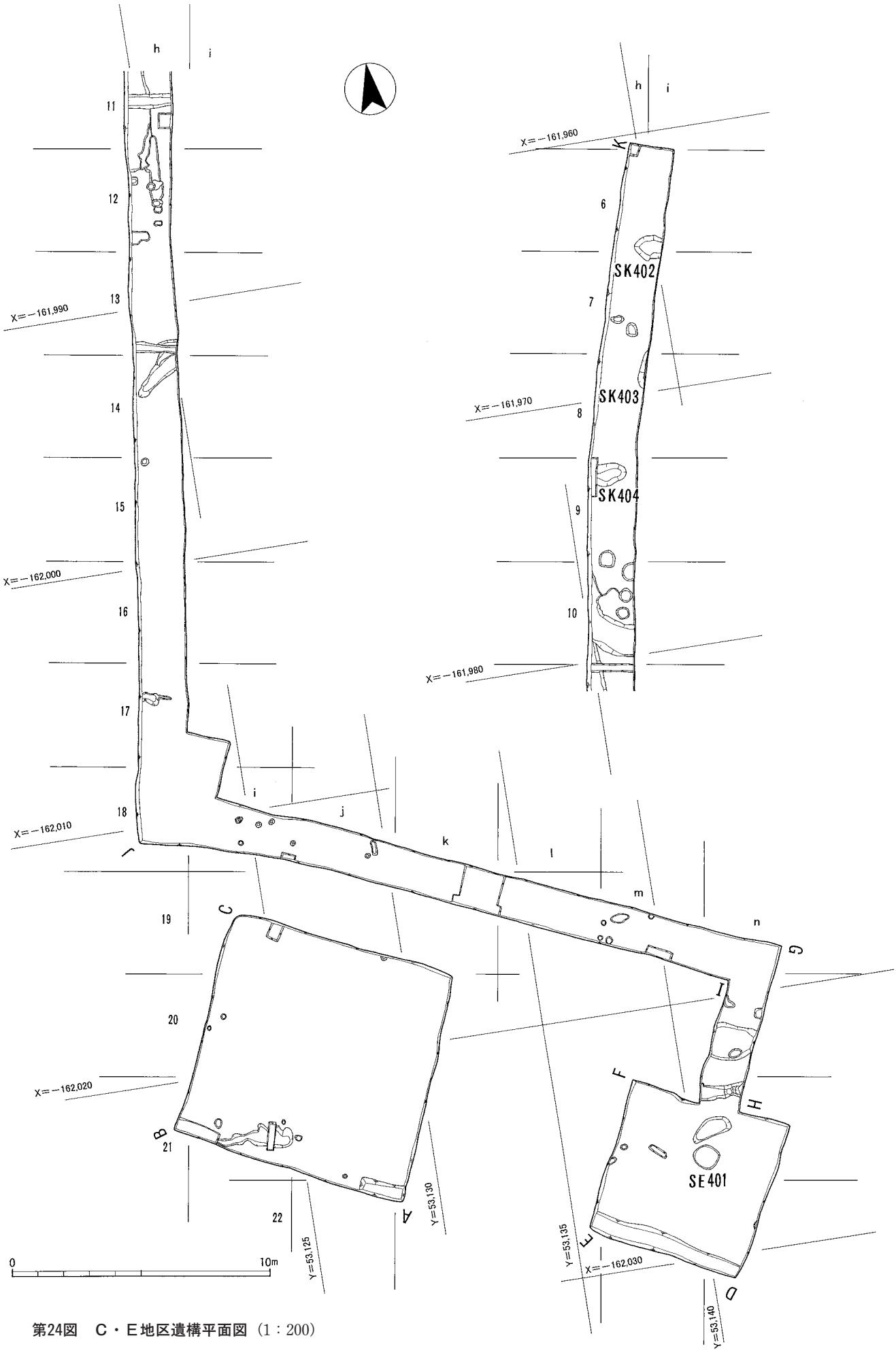
ＳＫ４０３　Ｅ－Ⅲｈ８地区で検出した土坑であるが、調査区の東端壁際に位置しており調査区外に延びるため、全体は不明であるが、南北長1.5ｍ以上、

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時　代	出　土　遺　物	備　考
ＳＥ401	ＳＫ1	C-Ⅰ	ｍｎ21	径0.9ｍ	――	1.6ｍ	室町	土師器鍋･皿、陶器甕	
ＳＫ402	ＳＫ2	E-Ⅲ	ｈｉ6～7	1.1ｍ以上	0.9ｍ	0.2ｍ	室町	土師器鍋･皿	
ＳＫ403	ＳＫ3	E-Ⅲ	ｈ8	1.5ｍ以上	――	0.2ｍ	室町	土師器鍋	
ＳＫ404	ＳＫ4	E-Ⅲ	ｈ9	1.4ｍ以上	0.7ｍ	0.3ｍ	室町	炭のみ土器なし	

第11表　Ｃ・Ｅ地区遺構一覧



第23図　C・E地区土層図（1：100）

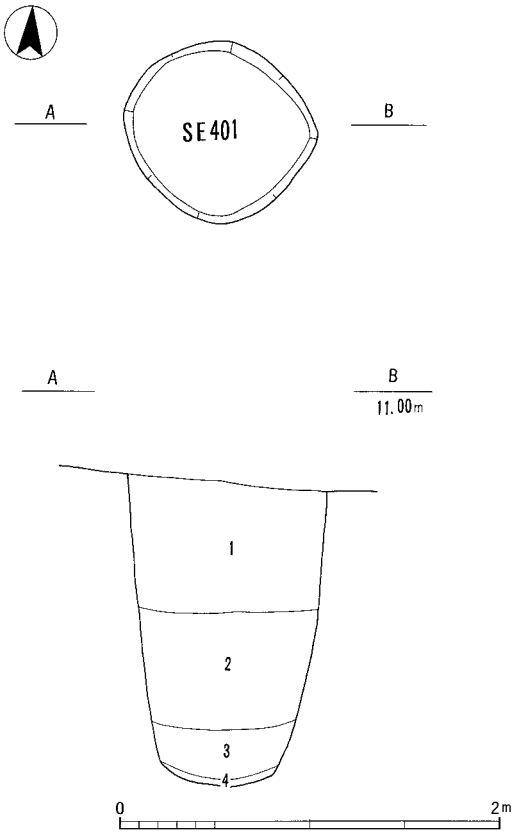


第24図　C・E地区遺構平面図（1：200）

深さは0.2m程である。室町時代の土師器鍋の小片が出土した。

ＳＫ４０４　Ｅ－Ⅲｈ９地区で検出した土坑で、平面形は1.4m以上×0.7mで、深さは0.3mである。遺構埋土は黄灰色シルトで、炭化物が少量出土した。土器は出土しなかったが、他の遺構と同様に室町時代の土坑であろう。

（河北）



第25図　ＳＥ401実測図（1：40）

Ⅵ　Ｄ地区の調査結果

１　概要

Ｄ地区はＡ地区の南端からさらに100m程南に位置し、県道に沿った南北に細長い調査区で、長さ72m、幅1.5～2.0m、調査面積は120㎡である。

２　土層

Ｄ地区の層序は、第１層が耕作土（１）で、その直下がＳＤ４１１・４１３などの遺構埋土である。遺構埋土の下は、黒色シルト（８）、褐色砂礫（９）、明黄褐色砂礫（10）などの地山である。耕作土と遺構埋土との間には、本来遺物包含層が存在したものであろうが、削平されたものと推測される。

３　遺構および遺物

遺構は、古墳～奈良時代の溝１条、平安時代の溝２条を検出した。遺物は、遺構、包含層とも少量出土したが、小片のため図示し得なかった。

（１）溝

ＳＤ４１１　調査区の北半で検出された大溝で、長さ36m以上、幅４m以上、深さは部分的な確認ではあるが0.7～1.0m程である。埋土は第１層が灰白色シルト（２）、第２層が灰黄色シルトまたは黄灰色シルト（３）、第３層がにぶい黄橙色シルトまたは浅黄色シルト（４）である。平面及び断面観察の結果、切り合いによりＳＤ４１２より古く、ＳＤ４１３より新しい。溝の時期は出土遺物から平安時代と考えられる。埋土からは、土師器杯類・甕、須恵器の小片が出土した。

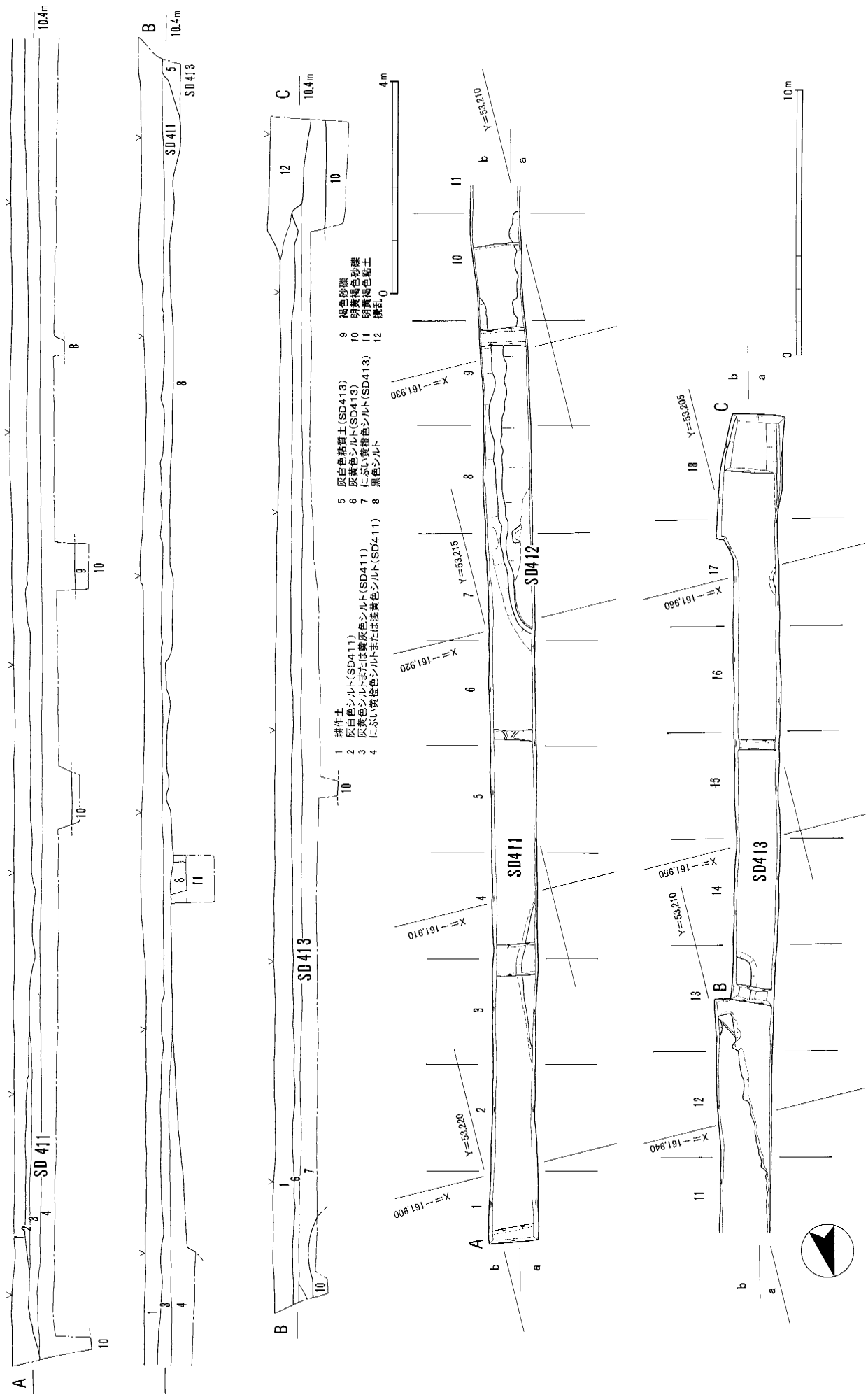
ＳＤ４１２　調査区中央西側で検出した大溝で、長さ15m以上、幅１m以上、深さ1.0mである。切り合いによりＳＤ４１１より新しい。溝の時期は出土遺物から平安時代と考えられる。埋土からは土師器杯類・甕、青磁椀の小片が出土した。

ＳＤ４１３　調査区南側で検出した大溝で、長さ29m以上、幅２m以上、深さは部分的なトレンチによる確認ではあるが0.9m程である。埋土は第１層が灰黄色シルト（６）、第２層がにぶい黄橙色シルト（７）である。断面観察の結果、切り合いによりＳＤ４１１より古い。溝の時期は出土遺物から古墳～奈良時代と考えられる。埋土からは土師器杯類・壷底部・甕、須恵器の小片が出土した。

（河北）

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時　代	出　土　遺　物	備　　考
ＳＤ411	ＳＤ1	Ｄ－Ⅰ	ａｂ1～10	36m以上	４m以上	1.0m	平安	土師器杯類・甕、須恵器小片	ＳＤ413より新、ＳＤ412より古
ＳＤ412	ＳＤ2	Ｄ－Ⅰ	ａｂ7～10	15m以上	１m以上	1.0m	平安	土師器杯類・甕、青磁椀小片	ＳＤ411より新
ＳＤ413	ＳＤ3	Ｄ－Ⅲ	ａｂ11～18	29m以上	２m以上	0.9m	古墳から奈良	土師器杯類・壷・甕、須恵器小片	ＳＤ411より古

第12表　Ｄ地区遺構一覧表



第26図　D地区土層図（1：100）及び平面図（1：200）

Ⅶ　Ｆ地区の調査

１　概要

Ｆ地区は、Ｃ・Ｅ地区から約150m南西方向で、山下町の集落のすぐ東側である。調査区は長さ52m、幅1.5～2.0mの東西方向に細長い形をしており、発掘調査面積は80㎡である。

２　土層

基本的層序は、第１層が耕作土（１）、第２層が床土（２）、第３層が灰オリーブ色シルト（３）、第４層が灰オリーブ色シルト（４）、第５層が黒色粘質土（６）で、遺構は第４層上面又は第５層上面で検出した。なお、西半部では第３層と第４層は削平により消滅している。また、第５層以下は、部分的に２箇所で下層確認を行ったが、第６層が灰褐色粘質土（７）、第７層が黄色粘土（11）、第８層が灰色砂礫混土（12）である。

３　遺構

遺構は、室町時代の井戸、溝、ピットを検出した。

（１）井戸

ＳＥ４２１　調査区中央で検出した井戸で、平面は径約１ｍの円形で、深さは1.4mまで確認した。埋土は第１層がにぶい黄色シルト、第２層が黄褐色砂質土、第３層が黄褐色粘質土、第４層がオリーブ褐色粘質土に明黄褐色粘質土混じり、第５層が明黄褐色粘質土に黒色粘質土混じりである。第５層まで掘削したが、それより下はピンポールで確認した結果、1.8mで堅い層に変化するようである。深さ0.8mから下の埋土、すなわち第４・５層には0.1～0.3m程の大きさの石が多数含まれていることから、石組み井戸が崩落した可能性がある。

（２）溝

ＳＤ４２２　調査区の東端の第４層上面で確認した溝で、長さ4.5m以上、幅0.7～1.5m、深さ0.1m

遺構番号	現地調査時遺構番号	中地区名	小地区名	長さ	幅	深さ	時　代	出　土　遺　物	備　考
ＳＥ421	ＳＫ1	Ｆ	ｉ2～3	径1m	―――	1.4m以上	室町	土師器鍋（171）、陶器捏鉢（172･173）	
ＳＤ422	ＳＫ2	Ｆ	ｏ2～3	4.5m以上	0.7～1.5m	0.1m	室町	土師器鍋（174～１７６）･羽釜（177）、陶器甕片、青磁椀（178）	

第13表　Ｆ地区遺構一覧表

遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径高台径	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
171	024-03	ＳＥ421	土師器鍋				ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	灰白	口縁部小片	煤付着
172	023-02	ＳＥ421	陶器捏鉢				オサエ、ナデ	やや粗、砂粒含み	並	灰白	口縁部小片	
173	023-01	ＳＥ421	陶器捏鉢			13	オサエ	やや粗、砂粒含み	良	にぶい赤褐	底部完形、下半1/2	
174	024-04	ＳＤ422	土師器鍋	23			ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	浅黄橙	口頸部小片	煤付着
175	022-02	ＳＤ422	土師器鍋	30			ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁･体部１/4	
176	022-01	ＳＤ422	土師器鍋	33			ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙	口縁部１/4	煤付着
177	023-03	ＳＤ422	土師器羽釜				ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口縁部小片	煤付着
178	024-02	ＳＤ422	青磁椀				ロクロナデ	密	良	灰白	口縁部小片	オリーブ灰色の釉
179	024-01	ｄ２　Ｐ1	土師器皿	11	2.2		ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密	並	浅黄橙	ほぼ完形	

第14表　Ｆ地区出土遺物観察表

である。埋土は灰黄褐色粘質土で、炭化物が混入する。

（3）ピット群

調査区西半部でピットを相当数検出した。径0.2～0.3m前後のものが多く、掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、調査区が狭いこともあって、掘立柱建物や柵などの柱穴として把握することはできなかった。

4　遺物

ＳＥ４２１出土遺物

土師器鍋（171）は口縁部の小片である。口縁端部を内側に折り曲げる。

陶器捏鉢（172・173）は、ともに破片である。(172)は口縁部の小片であるが、口縁端部外側に面をもつ。（173）は体部下半から底部の破片で、底部は平底で、体部下半にはユビオサエの痕が顕著にみられまた、内面は使用痕がみられる。(172）は灰白色、(173）はにぶい赤褐色をしており、あきらかに別個体である。

ＳＤ４２２出土遺物

土師器鍋（174～176）は、口縁端部を内側に折り曲げ、断面が三角形になるものである。口縁部はヨコナデである。体部外面は上面がハケメ、下半がケズリで、体部内面はナデである。

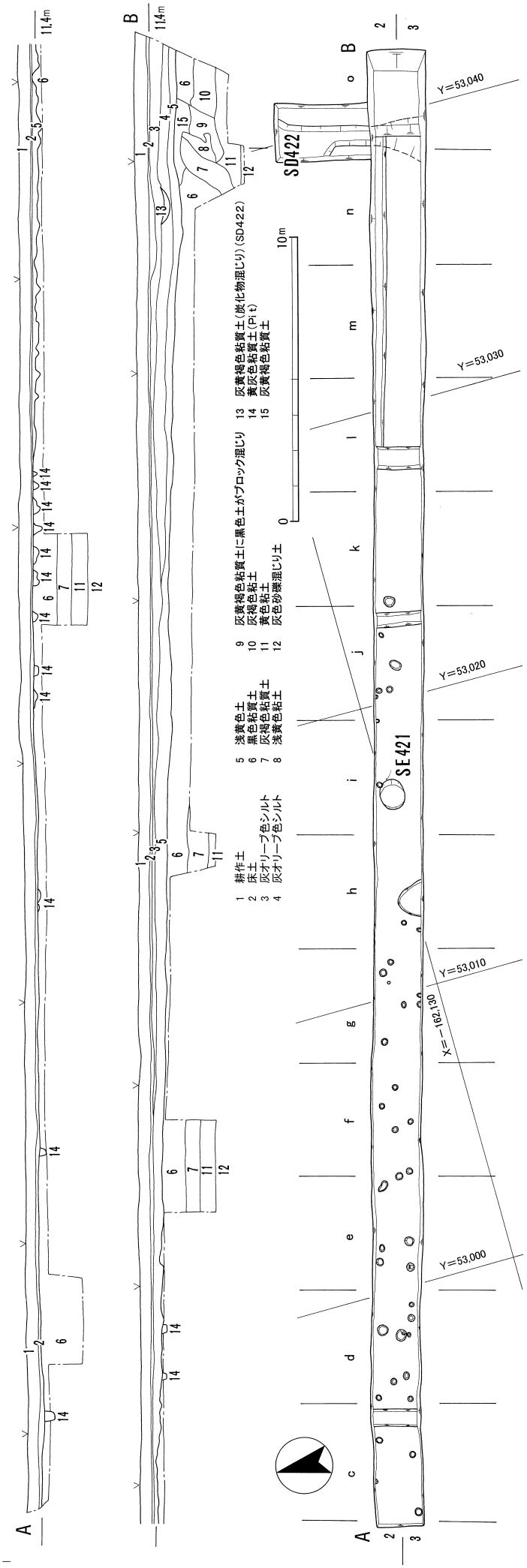
羽釜（177）は、口縁部から鍔部にかけての小片である。口縁端部は上方に面をもち、鍔部は斜め上方を向く。外面に煤が付着する。

青磁椀（178）は、口縁部の小片である。口縁部は外反し、端部は丸い。内外面ともオリーブ灰色の施釉がみられる。

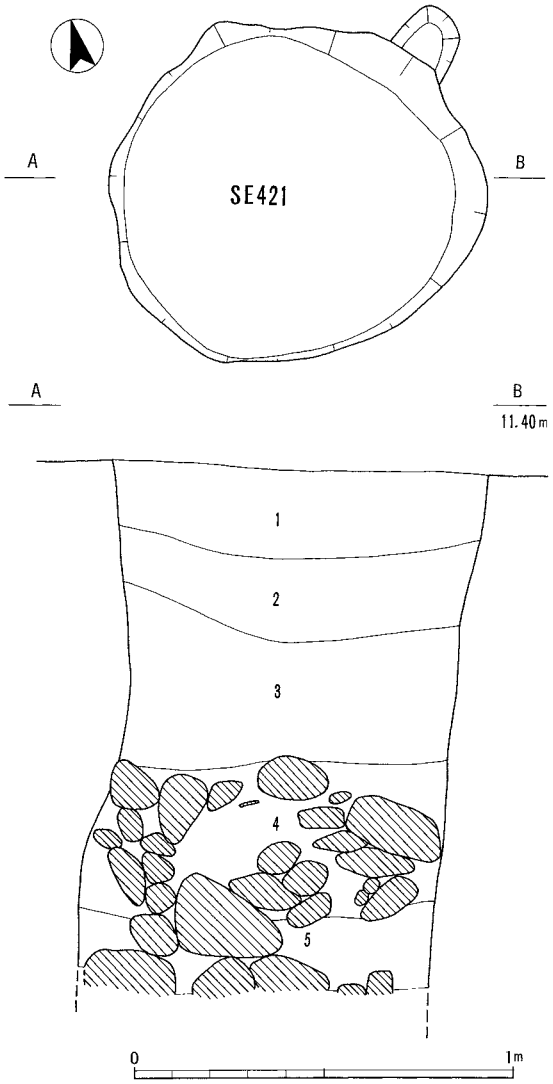
ピット出土遺物

土師器皿（179）は、口径11cm、器高2.2cmである。口縁端部はヨコナデで、体部から底部は、外面がオサエとナデ、内面がナデである。

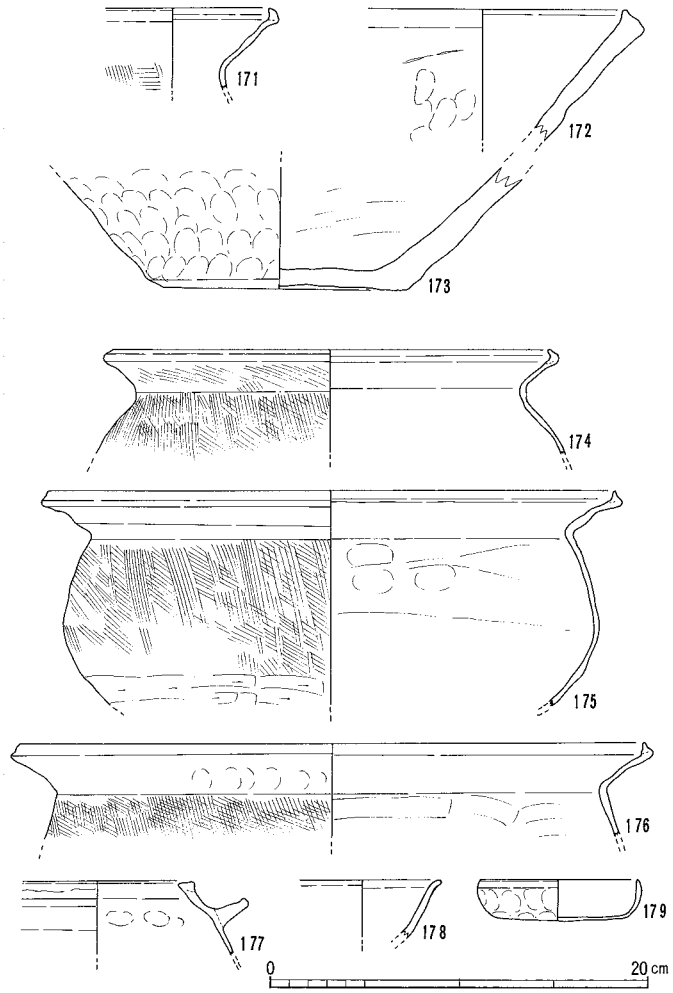
（河北）



第27図　Ｆ地区土層図（1：100）及び平面図（1：200）



第28図　ＳＥ421実測図（1：20）



第29図　Ｆ地区出土遺物実測図（1：4）

Ⅷ　科　学　分　析

琵琶垣内遺跡および山添遺跡における放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回分析調査を実施する琵琶垣内遺跡および山添遺跡は櫛田川左岸の氾濫原に立地する。両遺跡では、ともに奈良時代の遺物包含層より下位層準において、腐植質堆積物（黒ボク土）の堆積が確認されている。今回の分析調査では、この腐植質堆積物の形成年代に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）を実施する。

１．試料

（１）琵琶垣内遺跡（第３次）

測定試料は、琵琶垣内遺跡第３次調査Ａ－Ⅱ地区土層断面において、奈良時代の遺物を包含するオリーブ黒色シルトの下位に認められた黒色シルト（黒ボク土）より採取された土壌試料１点（14Ｃ－２）である。試料は、黒色を呈する腐植質に富む土壌いわゆる黒ボク土の様態を呈する。

（２）山添遺跡（第４次）

測定試料は、山添遺跡第４次調査Ｃ４地区土層断面で認められた黒色土層より採取された土壌試料１点である（14Ｃ－１）。試料は、ともに黒色を呈する腐植質土壌いわゆる黒ボク土の様態を呈する。

２．分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用いた。

３．結果

（１）琵琶垣内遺跡（第３次）

測定結果を第15表に示す。また暦年較正年代値を第16表に示す。

試料の測定年代（同位体補正年代）は14Ｃ－２が約7500年前の値を示した。この年代値は、既往の放射性炭素年代測定例によると、縄文時代早期に相当する年代である（谷口,2001）。今回の測定試料が土壌であることから、土壌化作用が行われた時期と、堆積年代が必ずしも一致するものではなく、また、土壌中には様々な由来を持った炭素分が取り込まれていることが推測される。これらのことから、今回の測定を行った黒色シルトの形成年代については、7500年前以降と幅をもって考えておく必要がある。今後、調査地点の地層累重状況や古地理に関する情報をもって、今回の結果を再評価する必要がある。

（２）山添遺跡（第４次）

測定結果を第17表に示す。また暦年較正結果を第18表に示す。

試料の測定年代（同位体補正年代）は約5400年前を示した。今回の測定を行った土壌の成因については、調査地点の地層累重状況や堆積構造などから総合的に評価する必要があるが、土壌中には様々な由来を持った炭素分が取り込まれている可能性が考えられる。このことから、本地点の黒ボク土の形成年代については、今回の測定結果である5400年前以降と幅をもって考えるのが妥当であろう。今後、上記した古地理変遷に関する情報の他に、土壌層の上部と下部層準の年代測定の実施により、より詳細な土壌の形成年代に関する情報が得られるものと期待される。

引用文献

谷口康浩（2001）縄文時代遺跡の年代．季刊考古学第77号,p.17-21.

遺跡名	地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
琵琶垣内遺跡（第３次）	A－Ⅱ地区	14C-2	黒ボク土	7490±40	−22.83±0.75	7460±40	IAAA-31152

第15表　放射性炭素年代測定結果（１）

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

試料	補正年代（BP）	較正年代（cal）		相対比	Code No.
14C-2	7493±42	cal BC 6412- BC 6369 cal BC 6363- BC 6342 cal BC 6312- BC 6296 cal BC 6293- BC 6260	cal BP 8362- 8319 cal BP 8313- 8292 cal BP 8262- 8246 cal BP 8243- 8210	0.403 0.173 0.136 0.289	IAAA-31152

第16表　暦年較正結果（１）

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

遺跡名	地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
山添遺跡（第４次）	C４地区	14C-1	黒ボク土	5390±40	−23.26±0.86	5370±40	IAAA-31151

第17表　放射性炭素年代測定結果（２）

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

試料	補正年代（BP）	較正年代（cal）		相対比	Code No.
14C-1	5394±44	cal BC 4329- BC 4270 cal BC 4262- BC 4222 cal BC 4185- BC 4165	cal BP 6279- 6220 cal BP 6212- 6172 cal BP 6135- 6115	0.513 0.343 0.144	IAAA-31151

第18表　暦年較正結果（２）

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

Ⅸ　結　　語

近年の県営ほ場整備事業は、農林部局の埋蔵文化財に対する適切な保護対策がとられ、ほとんどが盛土対応により地下遺構が保護されている。このため、発掘調査は大面積を調査することが少なくなり、盛土が困難な水路部分だけを調査することが多くなっている。

今回の琵琶垣内遺跡の第３次調査も水路部分等の調査がほとんどであり、各調査区のほとんどが細長い調査区となった。その結果、遺跡範囲内に縦横にトレンチを入れたような調査となっている。

琵琶垣内遺跡の第１・４次調査の報告書では、調査のまとめと検討として、今回の第３次調査の結果も含めて十分な検討がなされている[39]ので、遺跡全体の評価としてはそれを参考としていただきたい。

ここでは、第３次調査の結果判明したことを中心として、時代順に記述していきたい。

１　縄文時代の琵琶垣内遺跡

第１・４次調査では縄文時代の遺構は確認されておらず、遺物は第１次調査で24点が図示されている。今回の第３次調査でも縄文時代の遺構は確認されず、遺物はＡ地区の古墳時代の溝埋土や遺物包含層、あるいはＢ地区の遺物包含層から少量出土した。過去の調査とほぼ同様の傾向である。

Ａ－Ⅱ地区の黒色シルト（46）の放射性炭素年代測定の結果は7,500年前以降、すなわち縄文時代早期以降と考えられる値が出ている。したがって、この層、およびその上下の層が縄文時代の層と考えられるが、これらの層からは遺物は確認していない。一方、南に隣接した山添遺跡での黒色土層でも放射性炭素年代測定を実施しており、その結果は5,400年前以降と考えられている。今後はこうした結果も含めて、周辺の旧地形の復元や出土土器の年代検討を行うことが必要である。

２　古墳時代前期の大溝

古墳時代前期の遺構は、第１次調査ではＳＤ２８～３０・９６・９７の大溝等が確認されており、第４次調査でも溝が何条か確認されている。今回の第３次調査でも、第１次調査で検出したＳＤ３０・９７の続きをA地区で検出し、さらにＳＤ２０６・２０８・２２２の南北方向に走る大溝を検出した。これらの溝は第１次調査の結果、灌漑用導水路と考えられた大溝であるが、その評価については、第１・４次調査の報告書に詳細に記述されているので、参照されたい。

３　古墳時代後半

古墳時代後半の遺構は、第１次調査で竪穴住居ＳＨ６９・７０の２棟や溝、土坑が確認されている。第３次調査では、A地区では若干数の溝を、またB地区では溝ＳＤ３１９・３２２・３２３などを確認した。しかしながら、その数はあまり多くなく、これは第１次調査と同様の傾向である。

４　奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物

奈良時代の遺構は、第１次調査では竪穴住居ＳＨ７１～７４・７６・７７・７９・１０６・１１６の９棟、さらに複数の掘立柱建物、井戸ＳＥ１１８、溝、土坑が確認されている。第４次調査では、掘立柱建物ＳＢ５９４と溝12条、土坑１基が確認されている。

今回の第３次調査では、Ａ地区で竪穴住居はＳＨ２０４・２１２・２１４の３棟、掘立柱建物はＳＢ２７７～２８３の７棟を検出し、また溝や土坑も多数検出した。なお、遺構の項で奈良～平安時代とした遺構の多くは、出土遺物が小片であるため時期幅を持って判断したものである。したがって、これらの遺構の中には奈良時代に含まれる遺構が相当数あると考えられる。

第３次調査で検出した竪穴住居はＡ－Ⅱ地区に集中しているが、その南側には第１次調査で検出した竪穴住居群が展開しており、あわせて建物群としてとらえることができる。３棟の竪穴住居は、いずれも平面形は、一辺３ｍ前後の隅丸方形で、奈良時代に普遍的にみられるものである。竈の位置は、北辺にみられるものと東辺にみられるものがあり、ＳＨ２１２が北辺、ＳＨ２１４が東辺である。第１次調査で検出した竪穴住居は、北辺にみられるものがＳＨ１１６、東辺にみられるものがＳＨ７２・７３・７６・１０６である。

第３次調査で掘立柱建物と判断した遺構は、ＳＢ２７７～２８３の７棟である。検出したのは柱列であるが、いずれも柱掘形の規模や間数から掘立柱建物と判断をしたものである。狭い調査区のために全容は確認できなかったが、これらの建物の東側に隣接する第１次調査区では対応する柱穴が検出されていないことから、建物は西側の調査区外に延びるものと考えられる。

７棟のうちＳＢ２７７・２７８・２７９・２８１・２８２の５棟は方向がＮ８～11°Ｅと一定の規格性がみられる。このうちＢ２７８・２７９・２８１・２８２の４棟は、平面上近接または重複しているが、すぐ東側の第１次調査区で検出したＳＢ１４５は棟方向がN12°Ｅであり、これも含めて一群としてとらえることができる。

また、ＳＢ２８３については、棟方向がN16°Ｅであるが、８ｍ程東側には第１次調査で確認され奈良時代と判断されているＳＢ１４６が位置しており、その棟方向はN14°Ｅである。２棟の梁行のラインは北側、南側ともに揃っており、同時期に存続していたと考えてよいであろう。

第３次調査で検出した当該期の溝は、南北またはそれに直交する東西方向のものと、斜め方向のものがあることから、二時期に分かれると考えられる。

奈良時代の琵琶垣内遺跡は、本格的な集落が形成された時代であるが、古代伊勢道、飯野郡条里、神宮、斎宮などとの関係や御厨の問題については、第１・４次調査の報告書に詳細に記述されているので、参照されたい。

５　平安時代から鎌倉時代

当該期の遺構は、第１次調査では掘立柱建物ＳＢ１３１や溝、土坑などを検出している。第４次調査では、井戸ＳＥ５０２と溝４条が確認されている。

今回の第３次調査では、Ａ地区でＳＤ２０２・２２９・２４７・２４８・２６５などの溝を確認し、山茶椀やロクロ土師器などが出土した。ＳＤ２２９は第１次調査で検出した掘立柱建物ＳＢ１３１の西側約８ｍの所に位置するものであり、区画溝の可能性がある。Ｂ地区では、溝ＳＤ３３１・３３６・３３７・３３８があり、土師器や山茶椀などが出土している。Ｂ地区の出土遺物は、遺物包含層も含めてほとんどがこの時期である。当該期の集落は、第１次調査のＳＢ１３１とその周辺、第４次調査の井戸ＳＥ５０２周辺、さらに今回の調査のＢ地区周辺の３箇所に分かれていたと推定される。

６　室町時代

琵琶垣内遺跡範囲の南半部であるＣ・Ｅ地区およびＦ地区では室町時代の井戸や溝を検出し、当該期の土師器鍋・皿、陶器が出土している。一方、遺跡内の北に位置するＡ・Ｂ・Ｄ地区では中世の遺物はほとんど出土していない。琵琶垣内遺跡の中世の遺構、遺物については南に隣接する山添遺跡の中世遺構が、琵琶垣内遺跡の南半部にまで及んでいると考えるべきである。琵琶垣内遺跡と山添遺跡の間には、現在の安楽町の集落があり、琵琶垣内遺跡Ｆ地区の西には現在の山下町の集落が隣接している。中世の集落は、一般に現集落と平面上重複していることが多いとも言われているが、こうした両集落の地下にも中世遺跡が埋蔵されていると考えるべきである。

（河北）

〔註〕

（１）『松阪市（旧松阪市内）遺跡分布地図』松阪市教育委員会　2005

（２）「国の機関等の開発計画の事前協議」『三重県埋蔵文化財年報』16　昭和60年度　三重県教育委員会　1986

（３）ａ．『松阪市豊原町　閑浄寺遺跡』三重県教育委員会　1987（現地説明会資料）

ｂ．「閑浄寺遺跡」『三重県埋蔵文化財年報』18　昭和62年度　三重県教育委員会　1988

ｃ．伊藤裕偉・新名強・奥義次『琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2006

（４）『平成８年度　三重県埋蔵文化財年報』８　三重県埋蔵文化財センター　1997

（５）奥野実『琵琶垣内遺跡（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

（６）「発掘調査の概要」『平成12年度　埋蔵文化財年報』三重県埋蔵文化財センター　2001

（７）註（３）ｃに同じ

（８）註（３）ｃに同じ

（９）註（５）に同じ

(10) 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1979

(11) 坂倉一光「山添遺跡（第2次）」『山添遺跡（第2次）・里中遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1997

(12) 淺生卓司・中川明『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2006

(13) ａ．松阪市史編さん委員会『松阪市史』　第二巻資料篇　考古　松阪市　1978

ｂ．下村登良男「南伊勢の前期古墳」『三重　―その歴史と交流』雄山閣　1989

ｃ．『三重県史』資料編　考古１　三重県　2005

(14) 註（12）に同じ

(15) 福田哲也『山添２号墳』松阪市教育委員会　1998

(16) 柴山圭子・小濵学ほか『山添遺跡（第３次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2003

(17) 奥野実・田上稔・坂倉一光『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000

(18) 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会　1973

(19) 註（13）ｂ、(13）ｃに同じ

(20) ａ．吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告』Ⅰ　多気町教育委員会　1974

ｂ．川村輝夫ほか『河田古墳群発掘調査報告』Ⅳ　多気町教育委員会　1983

ｃ．下村登良男ほか『河田古墳群発掘調査報告』Ⅲ　多気町教育委員会　1986

(21) 斎宮跡に関する文献は多数あるが、総合的に記述された文献のうち近年刊行された下記の3点のみをあげておく

ａ．『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館　2001

ｂ．明和町史編さん委員会『明和町史』斎宮編　明和町　2005

ｃ．泉雄二『伊勢斎宮跡』（株）同成社　2006

(22) ａ．杉谷政樹「古代官道と斎宮跡について」『研究紀要』第6号　三重県埋蔵文化財センター　1997

ｂ．伊藤裕偉「斎宮寮・伊勢道・条里」『斎宮歴史博物館　研究紀要』13　斎宮歴史博物館　2004

(23) 註（13）ａに同じ

(24) 註（13）ａに同じ

(25) 註（16）に同じ

(26) 森川常厚・川崎志乃『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2003

(27) 註（26）に同じ

(28) 註（12）に同じ

(29) 小濵学・森川常厚『堀町遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　2000

(30) 柴山圭子『大川上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

(31) 註（29）に同じ

(32) 灰釉陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした

ａ．楢崎彰一ほか『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』（Ⅰ）愛知県教育委員会　1980

ｂ．藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　瀬戸市歴史民俗資料館　1982

c．斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊　考古学ジャーナル』№211　ニュー・サイエンス社　1982

d．楢崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告』（Ⅲ）愛知県教育委員会　1983

e．前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ　瀬戸市歴史民俗資料館　1984

(33) 山茶椀の編年については、主として下記の文献を参考にした

a．註（32）bに同じ

b．藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ　瀬戸市歴史民俗資料館　1983

c．藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』　第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

(34) 中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ　常滑市教育委員会　1986

(35) 本堂弘之『一般国道２３号中勢道路（９工区）建設事業に伴う　六大Ｂ遺跡（Ａ地区）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

(36) 角谷泰弘・新田洋・前川嘉宏・河北秀実「古市・中之地蔵町遺跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅷ　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1992

(37) 泉雄二「寺垣内遺跡」『織糸遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2006

(38) a．田村陽一「北野遺跡」『平成２年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告　―第２分冊―』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991

b．竹田憲治・筒井正明・上村安生『「北野遺跡（第２・３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995

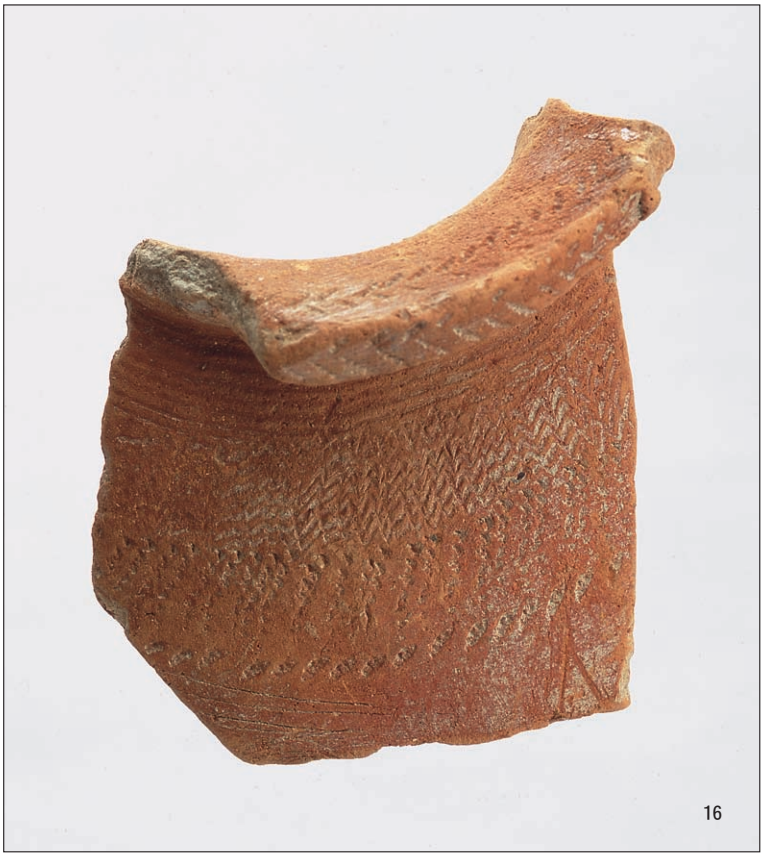
c．竹田憲治ほか『「北野遺跡（第５次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター　1996

(39) 註（３）cに同じ

図　　版

1

16



16

Ａ地区調査前風景（南から）

Ａ地区調査後風景（南から）

Ａ－Ⅰ地区（西から）

Ａ－Ⅰ地区（西から）

ＰＬ２

Ａ－Ⅰ地区（東から）

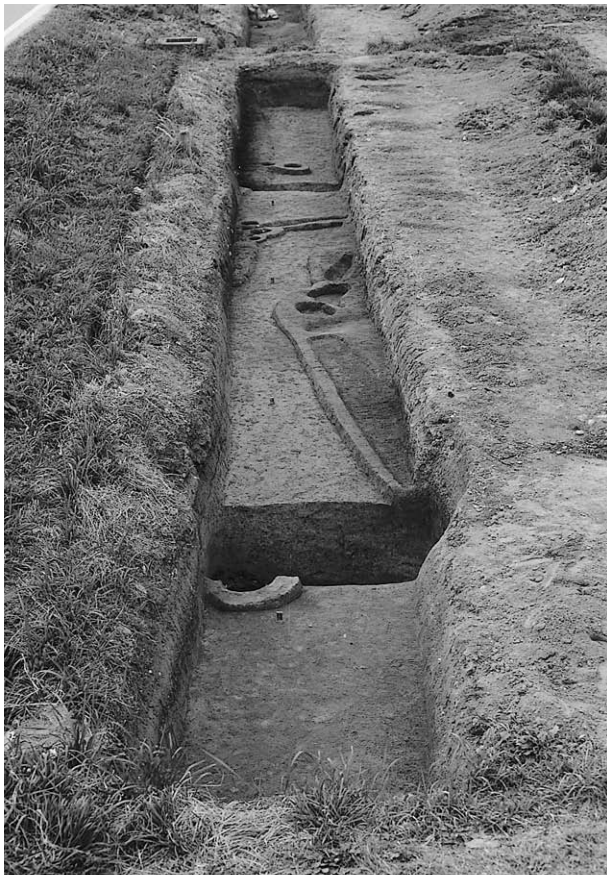
Ａ－Ⅰ地区東部（西から）

Ａ－Ⅱ地区北部（ＳＤ220より北）（北から）

Ａ－Ⅱ地区中央部（ＳＤ203より南）（北から）

Ａ－Ⅱ地区南部（ＳＤ219より北）（南から）

Ａ－Ⅱ地区南部（ＳＤ267より北）（南から）



Ａ－Ⅲ地区全景（北から）

Ａ－Ⅳ地区北部（南から）

Ａ－Ⅳ地区南部（ＳＤ225より南）（北から）

Ａ－Ⅳ地区南部下層（北から）

Ａ－Ⅴ地区南北トレンチ（北から）

Ａ－Ⅴ地区東西トレンチ（西から）

ＳＤ208（北から）

ＳＤ30（南から）

ＳＤ30（南から）

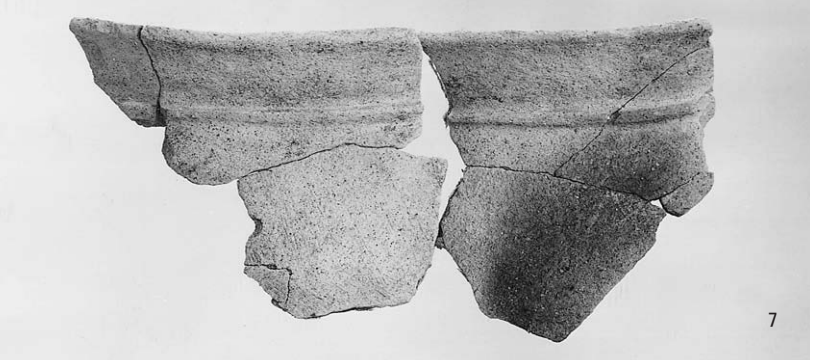
ＳＨ212（南から）

ＳＨ214（北から）

ＳＢ277（北から）

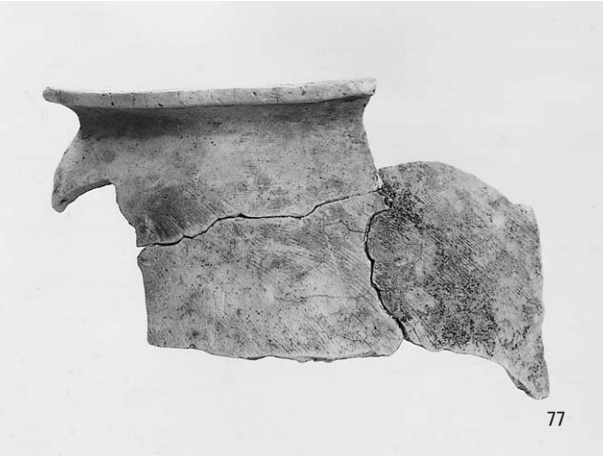
ＳＢ278（北から）

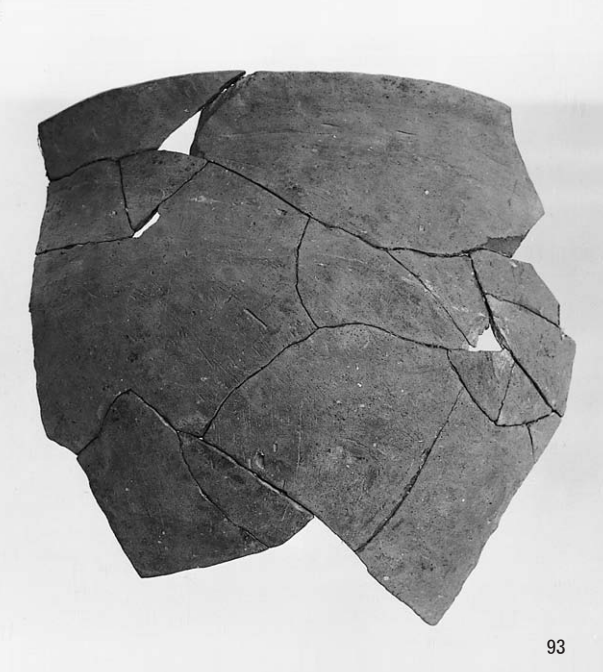
ＳＢ279（北から）



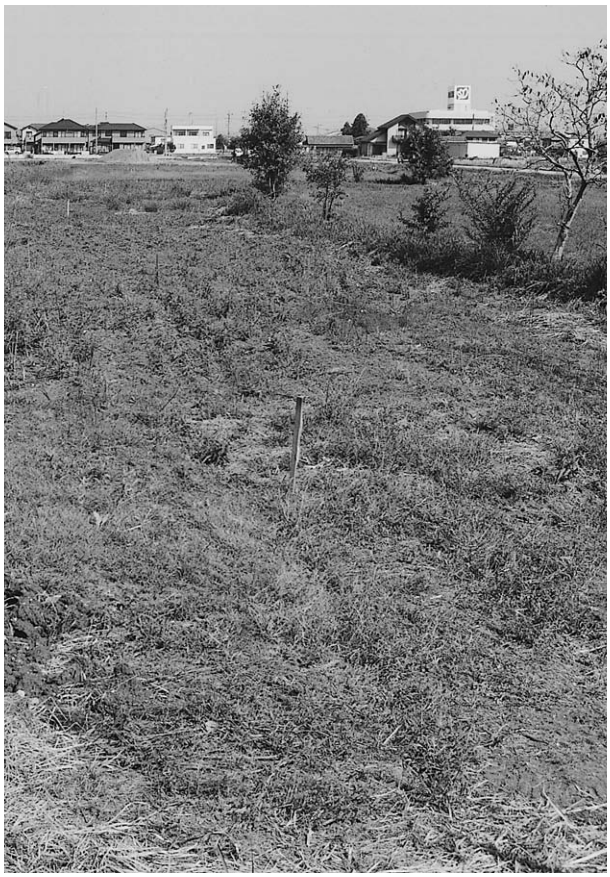
Ａ地区出土遺物

Ａ地区出土遺物





Ａ地区出土遺物

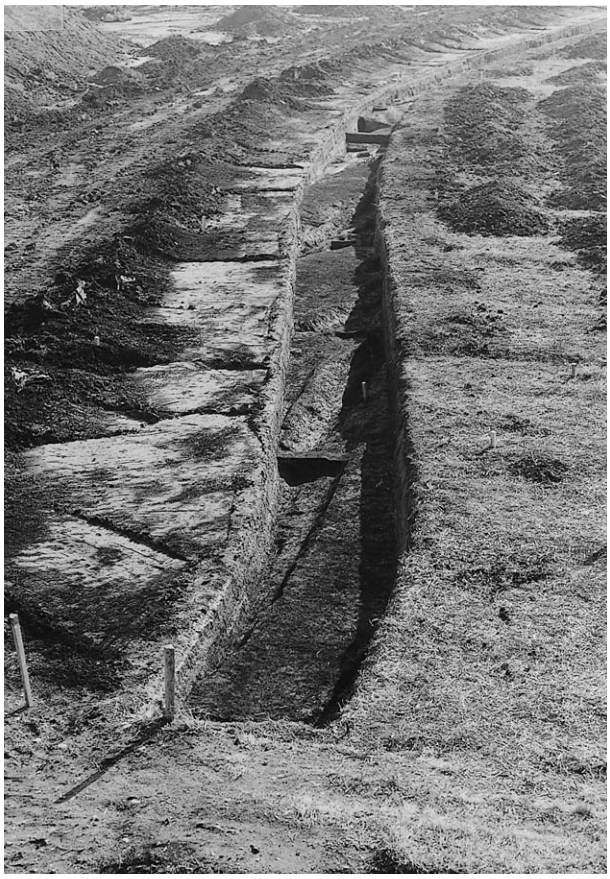


Ｂ地区調査前風景（南から）

Ｂ地区調査後風景（南から）

Ｂ－Ⅰ地区北端（東から）

Ｂ－Ⅰ地区（南から）



Ｂ－Ⅱ地区北部（北から）

Ｂ－Ⅱ地区中央部（ＳＤ322より南）（北から）

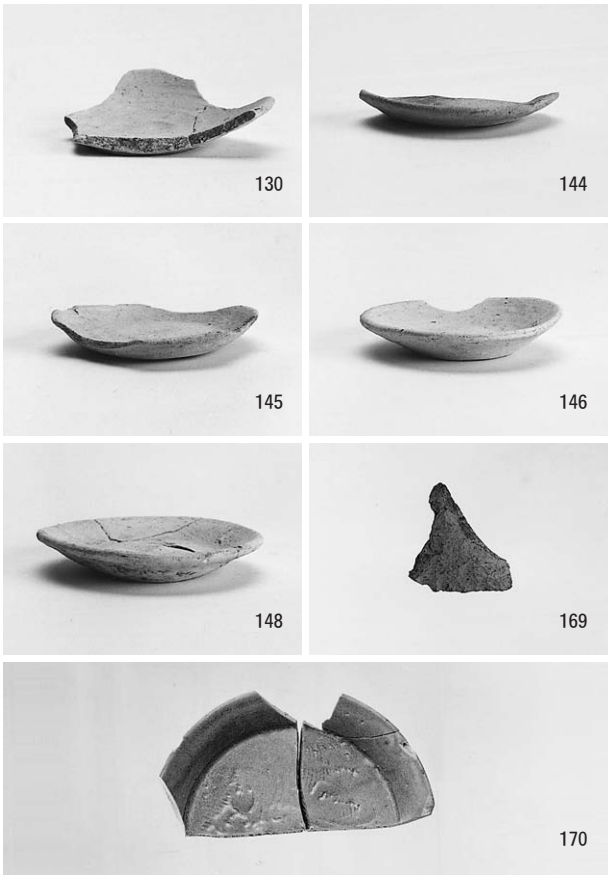
Ｂ－Ⅱ地区中央部（ＳＤ328より南）（北から）

Ｂ－Ⅱ地区中央部（ＳＤ334より南）（南から）

Ｂ－Ⅱ地区南部（ＳＤ345より北）（南から）

Ｂ－Ⅱ地区南部（ＳＤ342より南）（北から）

Ｂ－Ⅱ地区南端東西トレンチ（東から）



Ｂ地区出土遺物

C地区調査前風景（西から）

C地区調査後風景（西から）

E地区調査前風景（北から）

E地区調査後風景（北から）

Ｃ－Ⅰ地区全景（南から）

Ｅ－Ⅱ地区および Ｃ－Ⅱ地区（北から）

Ｃ地区全景（西から）

Ｃ－Ⅱ地区全景（西から）

E－Ⅰ地区およびC－Ⅰ地区（北から）

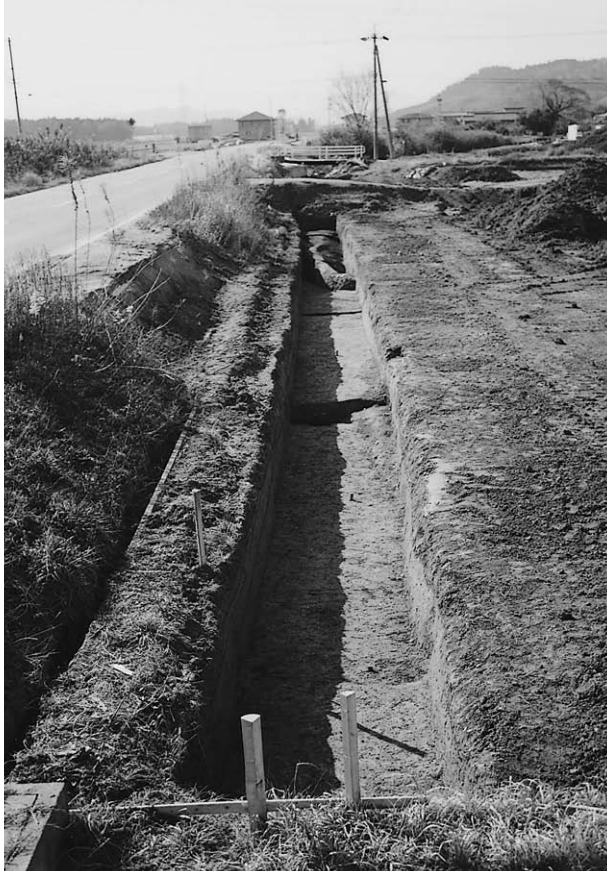
E－Ⅱ地区（西から）

E－Ⅲ地区（北から）

E－Ⅲ地区（南から）

Ｄ地区調査前風景（北から）

Ｄ地区調査後風景（北から）



Ｄ－Ⅰ地区（北から）

Ｄ－Ⅰ地区（南から）

Ｄ－Ⅲ地区（南から）

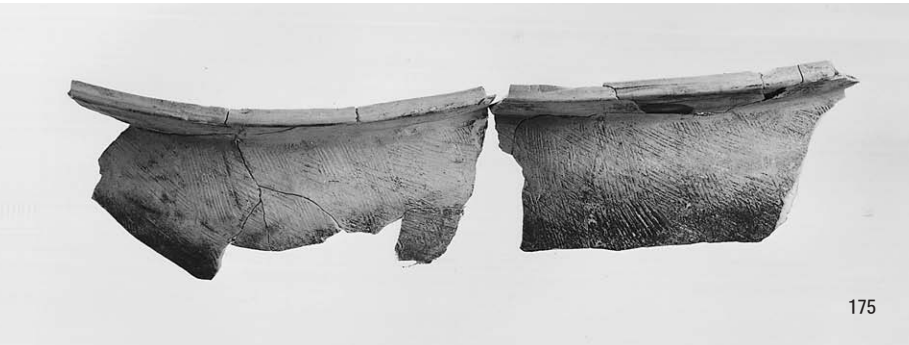
Ｄ地区作業風景

Ｆ地区調査前風景（西から）

Ｆ地区調査後風景（西から）

Ｆ地区（西から）

Ｆ地区（東から）



Ｆ地区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	びわがいといせき（だいさんじ）はっくつちょうさほうこく
書名	琵琶垣内遺跡（第3次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	286
編著者名	河北秀実・小濱学・川合圭子・宮田勝功
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL　0596-52-1732
発行年月日	西暦　2007年　3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
琵琶垣内遺跡（びわがいといせき）	三重県松阪市（みえけんまつさかし） 豊原町（とよはらちょう）・山下（やました）町（ちょう）・安楽町（あんらくちょう）	204	13Ａ－26	34度 42分 47秒	136度 34分 43秒	20011015 ～ 20020227	1,570	県営ほ場整備事業（櫛田上地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
琵琶垣内遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安～鎌倉時代 中世	 溝 竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑 溝 井戸	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・山茶椀 土師器・陶器	

要約

古墳時代前半の大溝を数条検出したが、このような大溝は第１次調査でも確認されているものであり、その広がりを確認することができた。

奈良時代の竪穴住居３棟、掘立柱建物７棟を検出したが、規模や棟方向に一定の規格性がみられ、第１次調査で確認している竪穴住居や掘立柱建物を含めて、建物群として把握することができた。

平安時代末から鎌倉時代の溝を多数検出、当該期の住居エリアを推定し得る資料となった。

室町時代の井戸等を検出したが、中世集落は南に隣接する山添遺跡でも確認されており、集落の広がりを推定することができた。

三重県埋蔵文化財調査報告286

琵琶垣内遺跡（第３次）発掘調査報告

２００７．３

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　　光出版印刷株式会社